の屋敷に攻めよせ、將にこれを討ち亡ぼさうとした所へ、少貳、大伴が六千餘騎を率ゐて探題の身方をしたので、菊池は長男の肥後守武重を後々の爲めに逃がしやり、自分は立所に討死をしてしまつた。

所が五月七日に兩六波羅が攻め落され、千劍破城の寄手も奈良まで退いたといふ事を聞いて、少貳入道は大いに驚き、自分で探題を討ち亡して身の罪を遁れようと考へ、大伴入道を誘つて、五月二十五日に七千餘騎の軍兵を探題英時の屋敷へ差向け、瞬く間に討ち亡してしまつた。

長門の探題降參の事

長門の探題遠江守時直は、京都の合戰で身方が苦戰してゐる事を聞き、六波羅を助けようと百餘艘の船を仕立てゝ海上を北上したが、阿波の鳴門で京都も鎌倉も討ち亡ぼされた事を知り、九州の探題と一所にならうと、船首を回して筑紫に向ひ、赤間關まで來て見ると、筑紫の探題英時も昨日既に亡ぼされてしまつたといふので、家來達も段々逃げ失せて、僅か五十餘人の手勢となり、海上を彼方此方とうろついて、どこに上陸するといふ目當もなかつたが、せめて妻子の行方なりと聞いて、心おきなく討たれたいものだと、家來を一人上陸さして、少貳、島津の陣へ降參を申し入れた。やがて笠置の合戰の時、筑前の國へお流されになつてゐた後醍醐天皇の御母方の御親戚であられる峯の僧正俊雅の前に召し出され、此僧正の情ある計らひで、天皇の御許しを得た上、命をつなぐ賴りの領地まで賜はつたが、まもなく病氣に罹つて亡くなつてしまつた。

越前の牛原地頭自害の事

淡河右京亮時治は京都の合戰の最中に北國を鎭撫しようと、越前の國へ下つて大野郡牛原といふ所にゐたが、其内六波羅が浚落したといふので、其軍勢はまたたくまに逃げてしまひ、妻子親戚の外は從ふ者もなくなつた。其處へ平泉寺の僧侶達が七千餘騎で、五月十二日に攻め寄せて來たので、二十人ほどゐた家來に敵を防がせ、近所に僧のゐたのを招いて、女房子供まで皆髮を剃り落させ、後生菩提の營みをした後、五つと六つとになる二人の子供を鎧唐櫃に容れ、二人の乳母に前後を舁かせ、鎌倉河へ沈めよと云ひつけて送り出した。母の女房も亦同じ淵へ身を投げようと、唐櫃につきそつて歩いて行つた。やがて唐櫃を河岸の上に据ゑ、蓋を開けて二人の子供を乳母が一人づゝ抱いて淵の底へ飛び込んだので、母親も續いて身を投げ、同じ淵へ沈んでしまつた。

其後時治も自害をした。

越中の守護自害の事附怨靈の事

越中の守護名越遠江守時有、弟の修理亮有公、甥の兵庫助貞持の三人は、出羽越後の官軍が北陸道を通つて京都へ攻め上るといふ事をきいて、途中でこれを防がうと、越中の二塚に陣を取つて、近國の軍勢を召集してゐた。すると、六波羅が既に攻め落された事が知れたので、馳せ集つた能登越中の兵士は放生津まで退き、反對に守護の陣へ押寄せようと企てた。此有様を見て、今までついてゐた家來達もまたたく間に逃げ去つてしまひ、僅に七十九人となつた。五月十七日の正午頃敵は一萬餘騎で攻め寄せてくるといふので、敵の近づかぬ中に女や子供を船にのせて沖へ沈め、自身は城の中で自害をしようと、しばらくの間婦人達と悲しい別れを惜しんでゐた。いよいよ敵も近附いたので、女房子供達は泣く泣く船に乘つて沖の方へ漕ぎ出した。城に殘つた七十九人の者共は女房子供が順々に沈んで行くのを見とどけた後、同時に腹を掻き切つて死んでしまつた。

其亡魂が今尙此處に留まつて、夫婦執着の妄念を遺したものか、近頃越後から上る船頭が此海

岸を通つた時、男女が三人づつ海上に現れ、互に近づかうとした刹那、俄に起つた猛火に邪魔されて近づき得ず、女はやがて浪の底に沈み、男は二塚の方へ行き、かき消すやうに失せたのを見たといふ事である。げに、妄念は罪深いものだ。

金剛山の寄手等誅せらるる事附佐介貞俊が事

金剛山から引返した平氏は尙奈良にとどまつて帝都を攻める企てがあるとの噂に、中院中將定平を大將として五萬餘騎を大和路へ差向け、楠兵衛正成に二萬餘騎をそへて河內國から搦手へ向はした。所が其殘兵五萬餘騎は、或は官軍に身方し、或は降參をして、追々頭數が減つて來たので、名うての大名らは最後の一戰も試みず、見苦しくも般若寺で出家をして、僧侶の姿になつて降參を申し出た。其面々は阿曾彈正少弼時治、大佛右馬助貞直、江馬遠江守、佐介安藝守を始め、長崎四郎左衛門尉、二階堂出羽入道道蘊以下、五十餘人の腰拔武士であつた。

けれども七月九日、阿曾彈正少弼、大佛右馬助、江馬遠江守、佐介安藝守、及び長崎四郎左衛門尉ら十五人は阿彌陀峯で殺されてしまひ、二階堂出羽入道道蘊だけは其才智を惜まれて死罪を許されたが、又隱謀を企てゝゐるといふので、同年の秋の末遂に死刑に處せられた。

佐介右京亮貞俊は北條高時に恨みを持ち、憤を懐きつゝ金剛山の寄手の中にゐたが、千種頭中將が綸旨を與へ、身方になれと勸めたので、去る五月の始めに千劔破城から降參をして京都へ來てゐた。其内平氏一門の者が滅亡すると、京都には身の置き所もなく、阿波國へ流されて、一人の從者さへなきわびしい生活をしてゐたが、關東方の者は縱へ降參しても、胸中に野心を懐いてゐるから斬り殺してしまふ方がよいといふ事になり、貞俊も亦た召捕られた。貞俊は故郷に殘して置いた妻子に會はず死ぬるのを殘念に思ひ、最後の念佛を勸めた僧に、常に身を離さず持つてゐた腰の刀と一首の歌とを、妻子の所へとどけてくれと賴んでから討たれた。

僧は其形見の太刀と歌とを彼れの妻に渡したが、妻はひどく悲しんで、其形見の太刀で胸をついて、自害をしてしまつた。

註

(一)衞府は宮城の警備等を掌つた役所。諸司は諸官廳。助は次官。

卷第十二

公家一統政道の事

後醍醐天皇が還幸せられて後、光嚴院を廢めて、其建てられた正慶の年號を棄て、元通りに元弘の年號を用ひられる事になつた。其三年の六月三日、大塔宮が志貴の毘沙門堂にゐられる事がわかつたので、諸國の兵共は先を爭つて馳せ集り、其軍勢は天下の半に過ぐる程の大軍となつた。宮は御入京遊ばされず、諸國の兵を集めて楯を作らせたり、鏃を研がせたりして、合戰の御用意おさ〳〵怠りないといふ事を聞いて、京都にゐる武士達は皆不安がつてゐた。そこで天皇は右大辨宰相清忠を敕使として、

「天下はもはや靜まつたのに、何故武器を調へたり、兵士を集めたりせられるか。又天下が亂れ

てゐた時には敵を防ぐ爲めに、剃髪染衣の姿を一時俗體に變へられたけれども、世の中が靜まつた今日では最早其必要がない。速く僧の姿にかへつて寺を治められたい。」

と仰せられた。宮は清忠を近くへ呼び寄せ、

「今天下が一時靜まつて、人民が安泰に暮らされるのは、一に天皇の御稜威と寡人の謀とによるのである。それに何ぞや足利治部大輔高氏は、唯だ一度の戰功で思ふ存分の振舞をしようとしてゐる。彼れの勢力がまだ十分固まらない內に討ち亡さなければ、彼れは第二の北條高時とならう。それ故、私は兵を集め武器を磨くのである。これは私の罪ではない。又逆賊は思ひがけなく速く亡んで、天下が穩かになりはなつたが、其仲間は身を隱してゐて隙を覘つてゐる。此際、上朝廷に威嚴がなかつたならば、下々の者は必ず驕りたかぶるであらう。今日の政治は文武兩道に由らなければならぬ。若し私が髪を剃り落して僧侶の姿となり、勇猛な將軍としての威穴を捨てたならば、誰れが朝廷の武力を維持するか。一體私が比叡山の奥に住んで一寺を守るのと、大將軍となつて天下を靜めるのと、どちらが國の爲めに大切であらう。此兩條を直ぐさま御許し下さるやうに、天皇に申し上げて呉れ。」

と御答へして清忠を歸された。

清忠卿は歸京して、早速其事を申上げた所、天皇は詳しくお聞きになつて、

「高氏にどれだけの不忠な行ひがあつて、それを討たうと云ふのか。罪のない者を討つのはよくない。二つの願ひの中、將軍になる事は差支へないが、高氏を討つ企てはやめるべきだ。」

と裁斷せられ、征夷大將軍の宣旨をお下しになつた。そこで宮のお怒りもやはらいだと見えて、六月十七日志貴を御出發になり、二十三日に御入京遊ばされた。其行裝は天下の壯觀であつた。

其後妙法院宮は讃岐國から、萬里小路中納言藤房卿は常陸國から、それ〴〵入京せられたのを手始めに、總て後醍醐天皇が笠置へお逃げになられた時、官位をやめさせられた人々とか、死罪や流刑にせられた者の子孫とかが、彼方此方から呼び出されて、長い間滿たされなかつた志を一時に達する事が出來た。これが爲め今まで武力を誇つてゐた武士達は何時の間にか公卿の奉公人となり、公卿が天下の實權を執つて、諸國の地頭や武士は皆召使か掃除人のやうな有樣になつた。これでは仕方がない、何か思ひがけぬ事が起つて、武士が又天下の實權を執る世の中になればよいなどと思ふ者が多かつた。

八月三日から武士に行賞せられる事になつたが、任命された上卿(一)は公平な處置を執る事が出來なかつたので、次々に人を替へたが、却々巧くまとまらなかつた。

又色々の訴へをさばく爲め、郁芳門の左右の脇に決斷所を造り、一月に六度の日を定めて裁判をしたが、これ亦統一がなく、紛亂に紛亂をかさねた。

所が七月の初めから御病氣であつた中宮が、八月二日におかくれになり、十一月三日には皇太子も崩御遊ばされたので、これは唯事ではない、亡くなつた武士の怨靈のしわざであらうと、其怨靈を鎭め、祟りを止める爲めに、四つの大寺に云ひつけて大藏經五千三百卷を一日中に書き寫させ、法勝寺で供養を遊ばされた。

大内裏造營の事

元弘三年正月十二日、公卿達は相談の結果、天皇に「今の宮城は僅に四町四方である爲め、境界が狹くて禮儀を正すに十分でない、四方へ一町づつ廣げて宮殿を造られたとはいへ、昔の皇居には到底及ばない。此際大内裏を造られては如何」と申上げ、安藝周防の二國を料國とせられ、日本國中の地頭、武家の所領の得分の二十分の一を徵收して、其費用に充てられることに定まつた。

戰爭の直後で、世の中はまだ十分靜まらず、國は疲れ、民は苦しんでゐるのに、遮二無二大内

裏を造られるといふことで、我國では未だ曾て一度も用ひた事のない紙幣を造つたり、諸國の地頭や武家の所領に課役をかけたりする事は、神慮にも違ひ、驕慢の端緒ともならうと、眉を顰める者が少くなかつた。

安鎭國家の法の事附諸大將恩賞の事

元弘三年の春頃、平氏の一族である規矩掃部助高政、絲田左近大夫將監貞義が筑紫に現れて、仲間の生き殘りや所々の逆賊を集めて國を亂さうと計つた。又河内國の賊徒は佐々目憲法僧正を大將として飯盛山に城を造り、伊豫國には赤橋駿河守の子の駿河太郎重時がゐて立烏帽子峯に城を造り、近邊の私領地を奪ひとつて知行してゐた。此等の逆賊は武力の上に佛法の威力を加へない限りは、容易に退治する事が出來まいと、俄に紫宸殿の皇居に壇を作り、竹内慈嚴僧正を召し出されて、天下安鎭の祈りを行はせられた。此祈りを行ふ時は、甲冑の武士が四門を警固し、内外辨、外辨、近衞の人々は階に竝び、樂人が音樂を奏する前に、武士達が南庭の左右に竝んで劔を拔いて四方を鎭める儀典を行つた。此祈りのききめの爲めか、諸國の賊は忽ちの間に攻め亡ぼされてしまつた。

やがて筑紫の少貳、大友、菊池、松浦を始め、新田左馬助、弟兵庫助、其他國々の武士達が一人も殘らず上京して來た。そこで大功のあつた人々の恩賞を先にしようと、足利治部大輔高氏に武藏、常陸、下總の三箇國、弟の左馬頭直義に遠江國、新田左馬介義貞に上野、播磨の二國、子の義顯に越後國、弟の兵部少輔義助に駿河國、楠判官正成に攝津、河內の二國、名和伯耆守長年に因幡、伯耆の二國をそれぞれ知行せしめられた。唯だあれほど忠義のあつた赤松入道圓心には佐用莊一所しか下されなかつたのは不釣合であつた。

千種殿並文觀僧正奢侈の事

千種頭中將忠顯朝臣は故六條の內府有房公の孫であつたから、文字の道を修めるべきであつたのに、二十歲頃から笠懸(七)や犬追物(八)を好み、博奕や淫亂を事とせられたので、夙に父の有忠卿から勸當せられてゐた。けれども此方は一時の榮華を極められる過去の因緣があつたものか、天皇が隱岐へ御遷幸の時に供奉したり、又六波羅の討手として上つて來たりした功勞によつて、大國三箇國と闕所(九)數十箇所とを頂いたので、身に過ぎる程の朝廷の恩を受け、其奢りは見る人々を驚かした。

しかしこれは俗人の事であるから、殊更に云ひ立てる程でもないが、彼の文觀僧正の振舞を傳へ聞くと、誠に不思議である。一度名譽利欲の世界を離れ、もはや三密(一〇)瑜伽の道に入られた甲斐もなく、唯だ利欲や名聞ばかりを追ひ、觀念定坐の勤めはまるで忘れてしまつたやうな有樣であつた。何の必要があるといふでもないのに、財寶を倉に積み蓄へて貧窮の者を助けず、一方には武器を集め、士卒の勢を盛んにしてゐた。又媚び諛つて交を結ぶ者には、功勞がなくても褒美を與へたりしたので、文觀僧正の手の者と云つて、仲間をつくり臂を張る者が洛中に充ち、其數は彼是五六百人もあつた。

廣有怪鳥を射る事

元弘三年七月に建武と年號を改められた。其年の秋頃から紫宸殿の上に怪鳥が現はれて、「いつまで、いつまで」と鳴いてゐた。其聲は雲に響くかと思はれるほど高く、人々は眠りを覺まされ、聞く者は誰れしも嫌ひ恐れぬはなかつた。そこで公卿達は相談をして、源氏の人々の中に誰れか射落す者はないかと尋ねたが、射はづしたら生涯の恥だとでも思つたのか、私が射落さうと申出る者がなかつた。

「では上北面(一一)の侍の中に、誰れか自信のある者がないか。」と御尋ねになつた所、

「二條關白左大臣殿が召かゝへてゐられる隱岐次郎左衛門廣有と云ふ者ならやりとげませう。」

と申上げたので、直ぐさま廣有を呼び出された。廣有は詔を承つて鈴間(一二)の邊にひかへてゐたが、此鳥が若し蚊の睫(まつげ)に巣くふといふ蟯螟(せうめい)のやうに小さくて矢も立たぬか、又は大空の外に翔り飛ぶものならば致方もないけれど、目に見える程の鳥で、矢の立つものであるならば、どんな事があつても射外しはすまいと思つたので、直ぐさま御受をした。

さて廣有は召使に持たせてゐた弓矢を取り寄せ、孫廂(一三)の陰に匿れて此鳥の有様をそつとみると、八月十七夜の月がよく晴れて、大空は明るいのに、御所の上だけに黒雲がかかつてゐて、其あたりでしきりに鳴き立てる。鳴く時は口から火炎を吐き出すらしく、聲と同時に稲光りがして、其光が御簾の中までさし徹した。廣有は此鳥の居る所をよく見とどけておいて、弓を張り、弦をしぼり、鏑矢(かぶらや)を番へて立ち向つた。

天皇は紫宸殿へお出ましになつて御覽になられ、文武百官の人々もどうなる事かと固唾を呑み、手を握りしめて之を見てゐた。廣有は二人張(一四)の弓に十二束二伏の矢を番へ、きりきりと引きしぼつて容易には放さず、鳥の鳴くのを待つてゐた。鳥は何時もより飛び下つて、紫宸殿の上二

十丈程の所で鳴いたのを聞き澄して後、弦音高くひやうと放つた。鏑矢は紫宸殿の上を鳴り響かし、雲の間に手答へして、何かは知らず、大磐石の落ちるやうな音がして、仁壽殿の軒の上から竹臺の前へ落ちてきた。見物一同の感心する聲は、半時(一五)程の間どよめいて靜まらなかつた。

松明を高くかゝげさして之を御覽になると、頭は人のやうで身體は蛇の形である。嘴の先が曲つて、齒が鋸のやうに生へてゐた。兩方の足には長い距(けづめ)があつて、劍のやうに鋭くなつてゐる。羽先を延べて見ると、長さは一丈六尺あつた。天皇はひどく御感心遊ばされて、其夜すぐさま廣有を五位に任ぜられ、翌日因幡國の大莊二箇所を賜つた。これに武士の名譽であり、又後々までの語り草でもあつた。

神泉苑の事

戰爭の濟んだ後までも、妖しい物の怪は引續き禍ひをした。それを銷すのには眞言祕密の法による外はないと、俄に神泉苑を修造遊ばされた。

神泉苑は龍王を請じた雨乞の靈場であるが、建保頃から荒び始め、承久の亂後は穢らはしい男女が出入するのさへ制止する事もなく、牛馬は遠慮もなく水草を求めて往來する有様であつ

た。それを龍王が怒つてゐるのだから、早く修理をしなければならぬ、修理が出來れば龍王の怒りも解けて、自然に國土はうまく治まるといふのが修理の動機であつた。

兵部卿親王流刑の事

兵部卿親王は征夷將軍の職に在られたが、足利治部高氏を討ち亡ぼされようと、强弓を射る者や大太刀を使ひこなす者を召しかゝへられ、兵を集め、武術を磨かせられてゐた。それは官軍が六波羅を攻落した時、殿法印の手の者が京中の土藏を破つて財寶等を取り出したので、高氏はそれらの人々を捕へ、二十餘人の首を斬つて六條河原へ懸け、其高札に、

「大塔宮の家來殿法印良忠の手の者共が、晝强盜を働いた爲めに切つた。」

と書いた、それを兵部卿親王がきかれて御怒りになつたのである。

親王は高氏を討たうものと、內々諸國へ令旨を廻して、兵士を集めてゐられた。高氏は其事をきいて祕に繼母であられる准后にとり入り、

「兵部卿親王は帝位を奪ひ奉らうとして、諸國の兵を集めてゐられます。其證據は明らかでございます。」

とて、國々へ廻し下された令旨を御覽に入れたので、天皇はひどく御怒りになられ、「宮を流罪にせよ」と、欺いて呼び出され、捕り奉つて馬場殿へお押籠め申し上げた。やがて五月三日足利直義にお渡しになられたので、直義は數百騎の軍勢で途中を警固し、鎌倉へ下し奉つて、二階堂の谷に土牢をつくり、其中へ御入れ申してしまつた。

註

(一)宮中に公事ある時の奉行の主役。
(二)東大寺、興福寺、延曆寺、園城寺。
(三)用度の料に充てた國。
(四)承明門內で諸事を辨ずる第一の大臣。
(五)門外で諸事を辨ずる第二の大臣。
(六)紫宸殿の前庭。
(七)射場に笠をかけ遠矢を騎射すること。
(八)騎射の一。犬を追ひかけ蟇目の矢で馬上から射て勝敗をきめるもの。
(九)所有者のなき土地。
(一〇)三密は身、口、意の祕密。瑜伽は相應の義で、行者の身、口、意の三密が能く如來の三密と相應

して離れぬ事。それが卽身成佛の義を成ずる事に云ふので、三密相應の行を修める道。

(一一)院の御所を守護する武士で、上下があつた。

(一二)清涼殿の中にある間、鈴をかけたるより云ふ。

(一三)母屋の周圍の廂の間の外に更に添へた板廂。

(一四)一人が押し撓めて、一人が弦をかける弓。

(一五)今の一時間。

卷第十三

龍馬進奏の事

佐々木鹽冶判官高貞の許から、龍馬だと云つて、月毛の馬の四尺三寸ほどのものを献上した。其姿形は如何にも普通の馬とは違ひ、骨格逞しく、筋太く、しかも肥えてはをらず、頸は鷄のやうで、須彌(一)の髪は膝の下まであり、背は龍のやうで四十二のつむじ毛を卷いて背筋へつらなつてゐる。二つの耳は竹をそいだやうに眞直に天を指し、兩方の眼は鈴をつけたやうで地に向つてゐる。

朝の六時頃に出雲の富田を出發して、夕方の六時頃に京都へ着いた、其道のりは七十六里であるが、乘つてゐるのに少しも動搖をせず、まるで坐つてゐるやうであつた、けれどもつむじ風が

顔に吹きつけて堪へられない程であつたと言上した。そこで左馬寮へ預けられ、朝は御所の池で水を與へ、夕方には立派な厩で秣を與へた。其頃天下一の馬乘と云ふ評判の高かつた本間孫四郎を呼び出して乘らせた所、勇んでおどり上る有樣がなみ〳〵でなかつた。四足を縮めると雙六盤の上にも立つが、一鞭當てると十丈もある堀さへ樂々と飛び越えた。誠に天馬でない限りこのやうな駿足は珍らしいと、天皇は此上もなく御感心遊ばされた。

或時天皇は洞院の相國に向つて、

「我御代になつて、求めもしないのに此馬が現れたといふ事は、其吉凶如何であらうか。」

と御尋ねになられたので、相國は、

「これは全く聖德による事と信じます。それでなくて天がどうしてこんなよい前兆を下しませう。昔支那で虞舜の世には鳳凰が現れ、孔子の時には麒麟が出たといふ事でございますが、陛下の御代に天馬が現れたのは、それらを超えてよい前兆でございます。此龍馬が來た事は、佛法及び政道の繁昌、皇位長久のめでたい兆に相違ございませんぬ。」

と申上げたので、天皇を始め一座の人々も皆その說に感心し、喜び合はない者はなかつた。

暫くたつて萬里小路中納言藤房卿が來られたので、天皇は藤房卿に向つて天馬の吉凶をお問ひ

になられた。と、藤房卿は、

「天馬が我國に來た事を、私は吉事とは思ひませぬ。支那ではこれを捨てた時は榮え、愛した時は衰へたといふ例がございます。大亂の後、民は尙ほ疲れ苦しんで居り、天下は決して安らかになつて居りません。臣たる者は御諫め申すべき時であります。然るに群臣は皆媚びへつらつて、公平な政治が行はれず、無私な恩賞が施されないのに、大內裏の造營をすると云つては諸國の地頭に稅を課するなど、誠に以て悲しむべき事でございます。何卒奇物の御もてあそびを止められて、仁政をおしき遊ばされるやうにお願ひいたします。」

と、至誠を披瀝して御諫め申上げた。

藤房卿遁世の事

其後藤房卿は何度も御諫め申したが、一向用ひられないので、「臣としての道は十分に盡した。此上は身を退く外はない。」と決心して居られた。

三月十一日は岩淸水八幡宮へ行幸の日である。藤房卿はこれが最後のお供だと思つたので、供奉の役人達が驚く程に殊更着飾り、四圍を壓して出で立たれた。

御神拜は一日で終つた。藤房卿は辭職をする爲めに參內し、天皇に御目にかゝる好機會は今日をはづしては、何時あるとも知れないと思はれたので、それとなく御前に侍つて、龍逢比干が諫死した事、伯夷叔齊の淸い行ひについて、夜通し御話申上げ、明け方近く退出せられると、皇居の月も涙に曇つてかすかであつた。宮中の陣の前から車は家へ返し、一人の侍を召しつれて北山の岩藏といふ所へ行かれた。ここで不二房といふ僧を戒師に招き、遂に長年の役人生活をやめ、僧の姿とおなりになつた。

天皇は此事をお聞き遊ばされて、非常に驚かれ、「そのありかを急いで探し出し、又政道を輔佐してくれるやうに傳へよ」と、父の宣房卿に仰せられたので、宣房卿は泣く泣く車を飛ばして岩藏へ尋ねて行かれた所、中納言入道は其朝まで此處にゐられたが、此處は都に近いから俗人達が訪問して來ようと、岩藏をさへ嫌はれて、何處といふ當もなく、足にまかせて出て行かれた後だつたので、宣房卿は致し方なく、涙を流しつゝ都へお歸りになつた。

北山殿の謀叛の事

北條氏と特別の關係があつた西園寺公宗卿は、故高時の弟四郎左近大夫入道を還俗せしめ、刑

部少輔時興と名を替へさせて、諸國の軍勢を集め、謀叛の計畫を進めてゐた。先づ時興を京都の大將、其甥の相模次郎時行を關東の大將、又名越太郎時兼を北國の大將として、各〻合圖を定めて後、公宗卿は俄に湯殿を作り、そこへ一枚の板を蹈むと落ちるやうにしかけておいて、天皇に、

「北山の紅葉御覽の爲め、御臨幸遊ばされたい」と申上げた。そこで天皇は翌日正午頃行幸あるべき由を仰せ出されたが、其夜うと〳〵とせられた所、一人の女が來て、

「明日の行幸はおやめになられたがよい。」

と申上げたので、天皇は、

「お前は何處から來た。」

とお尋ねになると、

「神泉苑の邊に長年住んでゐる者でございます。」

とお答へして歸つて行つた。

御夢覺めて、天皇は怪しい事に思はれたが、決定してゐる臨幸を今更取りやめる事は出來ぬと、御乘物を進めさせられた。然し夢のお告げがあやしいと先づ神泉苑へ行幸遊ばされ、龍神に御手向けなされた所、池水が俄に變つて、風も吹かないのに白浪が立つて、盛んに岸へ打ちつけ

た。天皇はこれを御覽になつて、いよ〳〵夢のお告げを怪しく思はれ、暫くの間御乘物をとめて御考へになつていられた所へ、竹林院の中納言公重卿が驅けつけて來て、

「西園寺大納言公宗卿が謀叛の企てをしてゐると告げた者がございます。」

と申上げたので、夢の知らせといひ、池水の變化といひ、成程樣子がありさうだと、其儘還幸遊ばされた。

やがて西園寺大納言公宗卿を召捕り、伯耆守長年に命じて出雲國へ流される事に定まつた。其夜、公宗卿の奧方は、泣く泣く忍んでおとづれて、御對面になつた。大納言は御懷胎の奧方に生れる子供の事をたのみ、形見の品々を御渡しになられた。其中長年が甲冑をつけた二三百人の武士をつれて、大納言をうけ取りに來た爲め、奧方は竹垣の中へ隱れて御覽になつてゐると、いよいよ御乘物にのられようとする時、中院の中將定平朝臣が長年に向つて「早く」と云はれたので、長年は大納言に走りかかり、鬢の髮をつかんでうつ伏しに引き倒し、腰の刀を拔いて御首を切り落してしまつた。

其後奧方は仁和寺の傍に小さい住家をさがし出して移り住み、丁度大納言の百箇日の日に無事に若君を御產み落しになり、母君の手一つで大切に育て上げられた。

中前代蜂起の事

朝敵の餘黨がまだ〳〵東國にゐたので、鎌倉に探題を置かねばなるまいと、今上天皇の第八の宮を征夷將軍になし奉つて鎌倉へ下され、足利左馬頭直義に其執權として東國の政を司らせた。名越太郎時兼はまもなく六千餘騎となり、相模次郎時行は五萬餘騎となつたので、時行は其軍勢をひきつれて鎌倉へ攻め上つた。直義は急な事とて用意の兵も少かつた爲め、將軍の宮をおつれ申して、七月十六日の曉に鎌倉を逃げ出してしまつた。

兵部卿宮薨御の事

左馬頭直義は山の內を通り過ぎる時、淵邊伊賀守を近く呼んで、

「身方が無勢の爲め、一度は鎌倉を引退いたが、美濃、尾張、三河、遠江の軍勢を集めて、又鎌倉へ押し寄せたならば、相模次郎時行を滅すには手間がいらぬ。それよりも我家にとつて、常に邪魔となるのは兵部卿親王である。此方を死罪に行へといふ天皇の御許しはないが、此序にお殺し申さうと思ふ。お前は急いで藥師堂谷へ馳せ歸り、宮を刺殺し申せ。」

と命令したので、淵邊は山の内から主從七騎で引返し、宮のゐられる牢の御所へ來て、暗い牢の中で、朝になつたのも御存知なく燈をかかげて御經をよんでゐられる宮に、淵邊がお迎へに參つたと申上げて、御乘物を庭へ置いたのを御覽になつて、

「お前は私を殺さうとする使であらう、よしよし。」

と仰せになり、淵邊の太刀を奪ひ取らうと走りかゝられたので、淵邊は持つてゐた太刀を取り直し、御膝の所を强く打ち奉つた。宮は半年程の間牢の中に屈んでゐられたので、御足の働きも十分でなかつたと見え、御心はます〳〵猛くあられたが、うつ伏しに打ち倒されて、起き上らうとせられた所を、淵邊が御胸の上にのりかゝつて、腰の刀を拔いて御頸を斬らうとしたら、宮は御頸を縮めて刀の尖をしつかりとおくはへになられた。淵邊は力が强かつたので、刀を奪はれまいと引合つてゐた所、刀の鋒が一寸あまりも折れてしまつた。淵邊は其刀を投げ捨てゝ脇差の刀を拔き、先づ御胸元の邊を二刀刺した。刺されて宮の少しお弱りになられた所を、御髮を攝んで引上げ、御首をかき落した。淵邊は牢の前に走り出て、明るい所で御首をみると、喰ひ切られた刀の鋒がまだ御口の中に殘つて居り、御眼は生きてゐる人のやうであつた。淵邊はこれをみて側の藪の中へ投げ捨てゝ置いて歸つた。

宮の御世話をする爲め、御前につかへてゐた南の御方は此有樣を見て、恐ろしさと悲しさとに身がすくみ、手足も立たない有樣であつたが、やがて心を取り直して、藪の中に捨てられた御首を取上げた所、御膚は尙ほあたたかく、御眼もまだ塞いでゐられず、元のまゝの御顏色であつたから、若しや夢ではなからうか、夢ならば覺めてくれと、泣き悲しまれた。やがて此御方は御髮を剃り落されて、泣く〳〵京都へ上つて行かれた。

足利殿東國下向の事附時行滅亡の事

鎌倉を逃げ出した足利直義は、途中駿河國の入江莊の地頭入江左衞門尉春倫の好意で、矢矧宿に陣を取つて、京都へ急使を立てた。

京都では足利宰相高氏を討手に向けゐる事に決定し、敕使を立てて此事を高氏に仰せ出された所、高氏は征夷將軍の位と關東八箇國の管領とをお許し下された上、直ちに軍勢の恩賞を行ふ事に差支へがないならば、直ぐさま朝敵を退治致しませうとお答へ申上げた。天皇はこれを無造作にお許しになられたが、征夷將軍の位は關東が靜まつたならば、其功によつて與へよう、關東八箇國の管領となる事は大體差支へないとおつしやられて、綸旨をお下しになられた。其上恐れ多

い事に天皇の御諱の一字を下されて、高氏の「高」を「尊」の字に改めさせられた。

そこで尊氏は直ぐさま關東へ下り、弟の直義と一所になつて、五萬餘騎で鎌倉へ向ひ、途中で迎へ討たうとしてゐた相模次郎時行の軍勢を攻め破り、またたく間に關東は平定した。

註

(一)鬣。

(二)大臣。

(三)龍逢は夏の桀王を諫めて斬られ、比干は殷の紂王を諫めて斬られた。

(四)殷の兄弟の忠臣。

(五)衛士の詰所。

(六)授戒の法師。

卷第十四

新田足利確執奏狀の事

足利宰相尊氏は相模次郎時行を亡ぼし、關東が靜まつたからといつて、まだ宣旨も頂かないのに勝手に足利征夷將軍と名乘つてゐた。又關東八箇國の管領となる事は天皇から御許しを得てゐると、今度箱根、相模河の合戰の時忠義のあつた人々に恩賞を與へ、以前新田義貞の一族の人々が頂いてゐた關東の領地をすべて取り上げ、これを自分の一族の者や家來達に分け與へた。義貞はこれを聞いて怒り、其代りに自分の領地である越後、上野、駿河、播磨等にある足利一族の領地を取り上げて、自分の家來達に與へたので、新田と足利とは、ここに確執を生ずるに至つた。

所が今度尊氏は、相模次郎時行を亡ぼして關東を平らげてから、謀叛の企てをしてゐるといふ

噂が天皇の御耳に入つたので、天皇はひどくお怒りになられて、公卿達と御相談の結果、關東へ人をやつて様子を聞き糺さうとしてゐられた所へ、尊氏から新田義貞を討ち亡ぼしたいといふ奏狀を捧げた。これを聞いて義貞も亦、尊氏の弟直義は兵部卿親王をお殺し申した上、天下を奪はうとしてゐる、この際是非尊氏を討ち亡ぼしたいといふ奏狀を奉つた。

そこで天皇は公卿達を集めて御相談をせられた所、坊門宰相清忠が、

「今少しの間待つて、關東の噂が事實か否かを確め、然る後に尊氏の罪を定めるべきである。」

と申上げたので、皆それに賛成した。其處へちやうど大塔宮の御世話をしてゐた南の御方が鎌倉から歸つて來られ、宮の最後の有様を目に見るやうに申上げた。又四國や西國の者から、足利尊氏が下した軍勢催促の敎書(一)數十通を御覽に入れたので、いよ〳〵尊氏の謀叛は疑ふ餘地がないと、一の宮中務卿親王を關東の管領に任命せられ、新田左兵衛督義貞を大將軍と定め、諸國の大名達をそれに副へて、足利討伐に向はしめられる事になつた。

節度使下向の事

新田左兵衛督義貞は朝敵追伐の宣旨を賜はつて、兵をひき連れて宮中に參内した。宮中では中(二)

儀の節會を行はれて、義貞に節刀(三)を下された。義貞はそれをうけて二條河原へ押し出し、尊氏の宿所である二條高倉へ軍勢を向け、鬨の聲を三度あげ、鏑矢を三本射させて、中門の柱を切り落した。これは嘉承年間義親追伐の例によつたものだといはれる。

さて義貞は一の宮中務卿親王を戴き、弟の脇屋右衛門佐義助を始め、源氏の一族及び他家の大名達六萬七千餘騎を東海道より、又一萬餘騎を東山道より、同時に鎌倉へ攻め寄せようと勇み立つて京都を出發した。

鎌倉では左馬頭直義を始め、仁木、細川、高、上杉らの人々が尊氏に向ひ、

「敵に要害の地を通過されては、如何に防戰しても勝てますまい、急いで矢矧、薩埵山の邊へ馳せ向つて防ぎませう。」

と云つた所、尊氏は、

「自分は長年の望みであつた征夷將軍の職につき、位は從上三品となつた。これは自分のわづかな功による事ではあるが、天皇の厚恩でないものはない。恩を受けてそれを忘れるのは人の道ではない。今天皇が御怒りになられた理由は、兵部卿親王をお殺し申した事と、諸國へ軍勢召集の敎書を出した事との二つである。この二つはどちらも尊氏のした事ではない。此事を詳しく申し

ひらきをしたならば、御怒りも必ず解けるであらう。貴殿達はとにかく各〻身の處置をつけられよ。尊氏は天皇に向ひ弓を引き矢を放つ事はしない。それでも尙罪の御許しがないならば、出家して天皇に對し不忠の考へを持つてゐない事を、子孫の爲に證明するつもりだ。」

と、顏色を變へて云ひ放ち、內へ入つてしまつた。

かうして一二日過ぎた所へ、新田の軍勢が三河、遠江まで近づいたといふので、上杉、細川らは左馬頭直義の所へ行き、長相談の結果、尊氏は鎌倉へ殘して置き、直義を大將として打ち向ふ事に決した。其處で直義は二十萬七千餘騎の軍勢をひきつれて十一月二十日に鎌倉を出發し、二十四日に三河國矢矧の東の宿に到着した。

矢矧、鷺坂、手越河原闘ひの事

新田左兵衞督義貞は脇屋右衞門佐義助と共に、六萬餘騎で矢矧河に押寄せ、敵を欺き近づけて置いて打ち破つた。足利方は其夜の中に矢矧を退いて鷺坂に陣を取つたが、勝につけこんで追跡してきた官軍の爲め、此鷺坂も直ぐさま攻め破られてしまつた。そこで此處をも退いて左馬頭直義の兵二萬餘騎の新手を加へ手越に陣を取つた。義貞は逃げ行く敵を追ひかけ、手越河原で敵の

軍勢に夜討をかけて攻め破り、尙逃げ行く敵を追ひかけて伊豆の府まで押し寄せた。足利方の軍勢は度々の合戰に破れ續けて、鎌倉へ逃げ歸つてきた。

足利左馬頭直義は鎌倉へ歸つて合戰の樣子を告げようと、將軍尊氏の屋敷へきてみると、四門は閉めきつてあつて、人は誰れも居ない。荒々しく門をたたいて、「誰れも居らぬか」と問うた所、須賀左衞門が出てきて、

「將軍は矢矧の合戰の事をお聞きになつて以來、建長寺へおはいりになり、出家をせられようと云はれたのを、皆でおとどめ申しておきました。本結は切られたが、まだ僧侶の姿にはなつてをられません。」

と申上げた。これを聞いた直義を始め高、上杉の人々は驚いて色々と相談の結果、賢の綸旨十通餘りを作り、それに足利一門の者はたとへ遁世して出家したものでも、さがし出して殺せよと書き、直義がそれを持つて建長寺へ行き、尊氏にこれを見せて、出家を思ひとどまり、足利一族の沒落を助けてくれるやうにと賴んだ所、尊氏は其綸旨を見て、

「それでは仕方がない。尊氏も貴殿達と共に武士の道に進み、義貞と一所に死なう。」

と云つて、法衣を脫ぎすて、錦の直垂を着けた。これで今迄の敗戰に萎れてゐた兵士も元氣をと

りもどし、一日もたたない内に三十萬騎の軍勢が馳せ集つてきた。

箱根竹下合戰の事

左馬頭直義は箱根路を防ぎ、將軍足利尊氏は竹下へ向ふといふ手筈が定められた。新田勢は伊豆の府を出發して今夜野七里山七里を越すと云ふ事であつたから、足利勢はわづかの軍勢で竹下へ向つてゐた。やがて夜が明けると、尊氏は十八萬騎をひきつれて竹下へ着き、直義は六萬餘騎で箱根峠へ着いた。

官軍は竹下へは、中務卿親王に公卿殿上人をはじめ、脇屋右衞門佐義助を副將として、七千餘騎で搦手の軍勢として立ち向ひ、箱根路へは新田義貞を始め重立つた一族の者二十餘人に國々の大名三十餘人を合せ、都合七萬餘騎で大手の軍勢として立ち向つた。大手搦手、敵身方、共に鬨の聲を上げて山川をゆるがし天地をとどろかし、わめき叫んで攻め戰つた。菊池肥後守武重は箱根の戰の先がけをして足利勢の三千餘騎を遠く頂の方へ追ひ立てゝ一休みしてゐた。これを見て身方の軍勢は、一軍づゝ陣を取つては攻め上り攻め上りしてわめき戰ひ、又大將義貞が一段高い所で諸軍勢の振舞を見てゐるので、皆勇み進んで戰つたから、足利勢は防ぎかねて退却した。

竹下へ向はれた中務卿親王の軍勢は、五百餘騎で錦の御旗を先に立てゝ押し寄せたが、一度に攻めかかつてきた敵を眞上にうけて、一たまりもなく一戰もせずに引き退いた。これを見た副將の脇屋義助は七千餘騎を一軍として馬の頭を並べて攻め入つたが、敵は少しもひるまず、東西南北、四方八方に攻め合ひ、一人も退かず互ひに討ちつ討たれつして戰つた。脇屋義助の子で今年十三歳の式部大輔は、敵身方が引き分れた時、どうして紛れたか敵の中へ殘つてしまつた。この人は幼いが敏捷な人であつたので、笠符（かさじるし）を投げすて、髪を亂して、敵に見知られぬやうにと落着いてゐた。父の義助はそれを知らず、討死をしたか生捕られたか、二者の中一つに定まつてゐる、子の生死を知らないでどうしようと、敵の大軍中に攻め入つた。それを見て義助の兵三百餘騎もつづいて攻め入り、敵を追ひ散らしてしまつた。式部大輔義治は父の軍勢と見て引返し、馬を走らして父の陣中へかけ入つた。義助はこれを見て、死んだ者が生きかへつたやうに悅び、暫くの間人馬を休めようと、又元の陣へ引返した。

さて新手を入れかへて戰はうとした所、千餘騎で後に控へてゐた大友左近將監、佐々木鹽谷判官の二人が、足利勢に加つて官軍に向ひ射かけ始めたので、官軍はたまりかねて佐野原へ引き退き、ここにも止まり得ず、伊豆の府でも防ぎきれず、搦手の寄手三百餘騎は東海道を西の方へと

先を爭つて逃げて行つた。

官軍箱根を引退く事

箱根路の合戰は官軍が戰ふ度に勝ち、漸く持ちこたへてゐる直義を追ひ散らして、鎌倉へ攻め入るのももう直ぐだと勇み立つてゐた處へ、搦手の合戰に官軍が皆敗けて追ひ散らされたといふので、これまで勇み立つてゐた軍勢は忽ち先を爭つて逃げ出し、立錐の餘地もなく滿ち〳〵てゐた箱根山の陣も、見る〳〵中に人影がなくなつてしまつた。義貞は仕方なく百騎程の軍勢で箱根山の陣を引き退き、途中であちらこちらに退いてゐる身方の軍勢を集め、行手を遮る敵を攻め破り攻め破り、道を開いて、負傷者を助け合ひ、おくれた者を待合はして、十二月十四日の夕方に天龍河の東の宿へ着いた。丁度雨の降つた後で河水が岸まで浸してゐたので、俄に民家を壞して浮橋を渡し、數萬騎の軍勢を一日の中に渡してしまつた。逃げ腰となつた軍勢の常として、今一戰をしようと思ふ者もなく、矢矧で一日逗留してゐる間に昨日まで二萬騎もあつた軍勢は、めいめいに四方へ逃げ散らばつて十分の一にも足りなくなつてしまつた。義貞は宇都宮治部大輔を始め諸大將の意見に從ひ、都遠い處に長居をしてゐるのはよくないと、其日に天龍河を出發して尾張

國まで退いた。

諸國の朝敵蜂起の事

十二月十一日讃岐から高松三郎賴重が京都へ急使を出して、

「足利の一族である細川卿律師定禪が兵を擧げ、賴重一族の者は戰ひ敗れて討死してしまつた爲め、敵の軍勢は三千餘騎となり、近日中に京都へ攻め上らうとして居る。」

と知らして來た。又備前國の兒島三郎高德の許からも急使が來て、

「佐々木三郎左衞門尉信胤、田井新左衞門尉信高らが、細川卿律師定禪の誘ひに同意して福山城へ立籠つたので、其國の目代が攻めようとしたが、國中の軍勢は追々賊に身方をしたので、備前國の守護や武家達が集つて攻めたが、官軍は負けて退き、其後賊に身方する者多く、官軍は全く沒落してしまつた。」

と告げた。更に又丹波國からは、碓井丹波守盛景が急使を立てゝ、

「久下彌三郎時重、波々伯部次郎左衞門尉、中澤三郎入道らが、守護の屋敷へ押寄せ、身方は負けたので、赤松入道圓心に使を出して援けを賴んだら、圓心は野心を抱いてゐるのか返答もせ

ず、其上將軍の教書だと云ふものを國中に廻して、軍勢を集めて居るといふ噂である。」と知らし、能登石動山の僧侶達からも急使が來て、

「越中の守護普門藏人利清を始め、井上、野尻、長澤、波多野の者共が謀叛を企て、國司の中院少將定清は當山に立籠つたが、賊の爲めに攻め破られて討死を遂げ、寺は燒けてしまつた。」

と知らして來た。

此他、加賀に富樫介、越前に尾張守高經の家來、伊豫に河野對馬入道、長門に厚東一族、安藝に熊谷、周防に大內介の一類、備後に江田、弘澤、宮、三善、出雲に富田、伯耆に波多野、因幡に矢部、小幡ら、日本國中殘る所もなく朝敵が起つたといふ報告があつたので、天皇を始め朝廷の官人達は皆驚いてしまつた。

そこで匹他九郎を敕使として、尾張に滯つてゐた新田義貞に、急いで上京せよとの大御心を傳へた。義貞は詳しい事情を聞いて敕使と一所に尾張國を出發して上京した。

將軍御進發大渡山崎等合戰の事

足利尊氏は八十萬騎の軍勢を引きつれて美濃尾張へ着いた。四國の敵も近づき、山陰道の敵は

大江山へ懸つたといふ事が知れたので、義貞は軍勢の手分けをして、勢多へは伯耆守長年に出雲、伯耆、因幡の軍勢二千騎をつけてさし向け、宇治へは楠判官正成に大和、河內、和泉、紀伊の軍勢五千餘騎をそへてさし向け、山崎へは脇屋右衛門佐を大將として洞院按察大納言、文觀僧正らの七千餘騎をさし向け、大渡は新田左兵衛督義貞を總大將として里見、鳥山、山名、桃井らの兵一萬餘騎で固めた。

足利尊氏は正月七日に近江國伊岐洲の社に立籠つてゐた山法師成願坊を攻め破つて、八日に八幡の山下に陣を取つた。細川卿律師定禪は四國中國の軍勢をひき連れて、正月七日に播磨の大藏谷に着いた。ここで赤松信濃守範資の兵を合し、總勢二萬三千餘騎となり、正月八日に芥河の宿に陣を取つた。久下彌三郎時重、波々伯部二郎左衛門爲光、酒井六郎貞信らは、但馬丹後の軍勢を合せて六千餘騎をひき連れ、二條大納言殿が西山の峯堂に陣を取つてゐたのを攻め破つて、正月八日の夜半に大江山の峠に篝火をたいて陣をしいた。

京都に殘つてゐた新田一族の軍勢は、大江山の敵を追ひ拂はうと、江田兵部大輔行義を大將として、三千餘騎で正月八日の朝早く桂河を渡り、朝霞に紛れて大江山へ押し寄せ、またたく間にここの敵を追ひ散らしてしまつた。

尊氏は八十萬騎の軍勢で大渡の西の橋の杙に押し寄せ、筏を作つて河を渡らうとしたが、河の底に打つてゐる杭の爲めに渡る事が出來ず、橋桁を傳つて渡らうとしたが、中途で折れて果さず、河を前にして攻めかねてゐた。

山崎の合戰では播磨の紀氏の軍勢が拔けがけをして一番に攻め寄せたが、官軍の爲めわけもなく追ひ立てられ、二番には坂東坂西の兵共が二千餘騎で押し寄せた。城中では大將脇屋右衞門佐義助及び宇都宮美濃將監泰藤の軍勢二千餘騎で打ち出し、互に追ひつ追はれつして半時程の間攻め戰ひ、まだ勝負の決せぬ中に、四國の大將細川卿律師定禪が六萬餘騎、赤松信濃守範資が二千餘騎をそれぞれにひきつれ、二手に分れて押し寄せたので、官軍は引返して城の中へ立籠つた。寄手は調子に乘つて何處までも攻め入つて來たので、官軍の兵士は先を爭つて降參をした。城中の官軍はそれに力を落して防ぎきれず、大渡の軍勢と一所になるつもりで逃げ出したので、山崎の陣は散々に破られてしまつた。

新田義貞は、

「此分では、敵は皇居に亂入するかも知れない。天皇を先づ比叡山へ御遷し申し上げてから、安心して戰はう。」

と大渡を捨てゝ京都へ歸つた。義貞義助が一軍となつて退くと、細川卿律師定禪が六萬餘騎で追ひかけて來た。それを途中で新田越後守義顯が引返して防ぎ、義貞が皇居へ行つたらうと思はれる頃を見はからつて、敵の大軍の中へ攻め入り、四方八方に切りまくり、重傷を全身にうけて、半死半生の姿でやつと京都へ歸つて來た。

主上都落ちの事附勅使河原自害の事

山崎、大渡の官軍が敗れたといふので、天皇は三種神器を御身につけ、武士に御乘物の前後を舁せて、比叡山へ行幸遊ばされようとした。其處へ吉田內大臣定房公が車を飛ばして驅けつけ、御所の中をあちらこちらと見て廻られた所、明星、日の札、二間の御本尊などが捨てられてあつた。內大臣は落着いてそれらを若侍に持たせて天皇に從つた。供奉の者は三四人の公卿が衣冠を正してゐる外は、皆甲冑を着け武器を持つてゐた。又義貞、義助を始め、一族の者、諸國の大名の軍勢二萬餘騎が、御乘物の後を守つて東坂本へと馬を早めた。

信濃國の住人勅使河原丹三郎は大渡の軍勢の中にゐたが、宇治も山崎も破れ、天皇はもはや何處へとも知らずお逃げになられたと云ひ傳へられたので、不義の逆臣には從はないと、三條河原

から父子三騎で引返し、鳥羽の作路羅城門の邊で腹かき切つて死んでしまつた。

長年歸洛の事附内裏炎上の事

名和伯耆守長年は勢多を守つてゐたが、山崎の官軍が破れ、天皇は東坂本へお逃げになられたと聞いて、今一度御所へ伺はないで、このまま直ぐ坂本へ逃げて行つては、後日難儀がふりかかつて來るであらうと、三百餘騎の軍勢をひき連れて、群がる敵を打ち破り打ち破り、百騎ほどとなつて十日の夕方に京都へ歸り、御所の置石の邊で馬から下り、兜をぬいで南庭にひざまづいた。天皇が東坂本へ臨幸遊ばされて、數刻後の事であつたから、四門はすべて閉ぢ、宮殿は普もなくさびれてゐた。もう人々が亂入したと見えて、あたりがかき亂されてゐた。長年は其有樣をつくづくと見て、さしも勇猛な武士の心にも物の哀れが感ぜられたか、兩眼から溢れ落つる涙が鎧の袖をぬらした。やがて敵の鬨の聲が近づいたので、陽明門の前から馬にのつて、北白川を東の方へ、今路越にさしかゝり、東坂本へと落ちて行つた。

其後四國西國の軍勢が京都へ亂入して、行幸の御供をしてゐる人々の家や、屋敷々々に火をつけたので、つむじ風が烈しく吹き起り、諸所の御殿、御所を燒き、猛火は皇居に燃え移つて、さしも立派な大宮殿も一時の間に灰となつてしまつた。

將軍入洛の事附親光討死の事

正月十一日、足利尊氏は八十萬騎をひきつれて京都へ入つた。

結城太田判官親光は後醍醐天皇の御信賴があつく、行幸の御供をしようとしたが、こんな風では出世もはかばかしくはあるまいと考へ、何とかして尊氏を討ちはたさうと、わざと京都に止まつて、尊氏に降參を申し入れた。尊氏は之を聞いて誠の降參ではなく、自分を欺かうとしてゐるものだと見破り、詳しい樣子を聞かせる爲めに、大友左近將監を遣はした。親光は大友の話振りで、尊氏に心中を見破られた事を知り、不意に太刀を拔いて大友をさし殺し、一族の者十七騎と共に大友の軍勢の中に攻め入り、敵と取り組んで、刺し違へ刺し違へして討死してしまつた。

坂本御皇居並御願書の事

天皇は東坂本に臨幸遊ばされ、大宮の彼岸所においでになられたが、御身方に來る僧侶は一人もないので、僧侶まで心變りをしたかと御心配になられてゐた所へ、藤本房英憲僧都が來て、言

薬もなく大床(七)の上に畏つて涙を流した。天皇は御手づから御筆を取つて御願文をものせられ、「これを大宮の神殿に納めよ。」と仰せられたので、英憲は右方權禰宜行親を通してこれを納め奉つた。

暫くすると、圓宗院法印定宗が五百餘人をひき連れて御身方に參つた。天皇はひどく悦ばれて大床へお呼び出しになられた所、定宗は天皇に御安心遊ばされるやう申上げて、二十一箇所の彼岸所は勿論、坂本、戸津、比叡辻などの坊舍や家々に札をはつて諸軍勢の宿所に充てた。其後諸坊の僧侶達が次々と御身方に集り、軈て一山三千の僧侶達が皆甲冑をつけて馳せ集つてきた。又官軍の兵粮にと云つて、金錢米穀をたくさん積んで來たりしたので、敗軍の兵士達は皆力强い思ひをした。

註

(一)將軍の下し文。
(二)宮中の儀式に大中小とあつて、元日の宴、新嘗祭の如きは中儀である。
(三)將軍が敕命を受けて征討に出る時、天皇より賜りし刀。
(四)國司の不在の時、代理して事務を扱ふ役。

(五)毎日の役人(殿上人)の當番の名を記した札、日給の簡とも云ふ。
(六)中方の衆が會合して法談し、衆を勸めて涅槃の岸に到らしめる所。
(七)廣縁。

卷第十五

園城寺戒壇の事

比叡山の僧侶達は二心なく後醍醐天皇を護衛して、北國や奥州の軍勢が到着するのを待つてゐるといふ事を聞いて、足利尊氏は多くの軍勢が義貞に集まらぬ前に東坂本を攻めようと、細川卿律師定禪、同刑部少輔、及び陸奥守を大將として、六萬餘騎を三井寺へさし遣はした。此三井寺は何時も比叡山に敵對するので、尊氏はここの僧侶達には二心があるまいと信頼した爲めである。そこで僧侶達が若し忠義をつくしたならば、戒壇造營の事について武家は特に力添へをしてやらうといふ教書を下した。

此園城寺の戒壇は、以前に敕許を得、又武家の支持をも得て取り立てられたが、比叡山の僧侶

達が黨をくんで訴へた爲め戰爭になり、度々火災にかかつたものである。其確執は三井寺の開祖である智證大師の御弟子と慈覺大師の御弟子とが仲違ひをした事に始まり、其後代々爭ひつづけて來たので、三井寺は機會あれば戒壇の事を天皇に申上げて其望みを達しようとし、比叡山は又其度に黨をくんで訴へるのを例として、無理矢理にそれを取り除けようとした。

今、足利尊氏が僧侶達を身方に引入れよう爲め、比叡山の怒りも顧みず輕卒にも勝手に教書を下したので、これこそ法滅の因緣だと、驚きあきれぬ者はなかつた。

奥州勢坂本に著く事

先に義貞が討手の大將を仰せつかつて關東へ向つた時、奥州の國司北畠中納言顯家卿へ合圖の時を違へず攻め合せよといふ綸旨を下されたが、大軍を集めるのが容易でない上、途中の戰ひに日數を重ねたので、鎌倉の合戰には間に合はなかつた。けれども鎌倉へ入つて見ると、尊氏は早や箱根竹下の合戰に勝つて上京したので、其後を追つて上京しようと、途中で諸所の軍勢を集め、五萬餘騎を以て、晝夜休みなく前進を續け、正月十二日に近江の愛智河の宿につき、急使を出して坂本へ其事を申上げたので、天皇を始め奉り、士卒達は皆喜び、道場坊の助註記祐覺に仰

せつけられて、湖上の船七百餘艘を集め、志那濱から一日の中に全軍を渡してしまつた。

三井寺合戰の事

東國の軍勢も坂本に着いたので、顯家卿や義貞や、其他重立つた人々が會合して合戰の相談をした。一同の者は大館左馬助の意見に從ひ、今夜の中に志賀唐崎の邊まで打つて出で、明日の夜明け前に三井寺へ攻め寄せようと、諸大將に云ひ渡して、宵の中からそれぞれ準備をして待つてゐた。

三井寺の大將細川卿律師定禪、高大和守は京都へ使を走らして、東國の軍勢が坂本へ着き、明日攻め寄せてくるとの事故、急ぎ援軍を出されたいと三度までも云ひ送つたが、尊氏は東國勢を馬鹿にして少しも驚かず、三井寺へは一人もさし向けてやらなかつた。

夜明け近くなると、源中納言顯家は二萬餘騎、新田左兵衛督義貞は三萬餘騎、脇屋、堀口らは一萬五千餘騎で押し寄せ、大津の西の浦、松本の宿に火をつけて鬨の聲を上げた。三井寺の軍勢も用意してゐた事とて、盛んに應戰した。寄手は一番に千葉介、二番に顯家卿、三番には結城上野入道、伊達、信夫などの軍勢と入れ替り入れ替り城中へ攻め入つたが、皆討たれて引き退いた。

勝につけこんだ敵は六萬餘騎を二手に分けて濱邊へまで攻め出して來た。そこで身方は三萬餘騎を一隊として敵に當り、攻め破り、追ひ散らして、逃げ行く敵に追ひすがり、城中へ攻め入らうとしたが、三井寺の僧兵に防がれて其目的を達しなかつた。城中では木戸を下し、堀の橋を落してしまつた。

義助はこれを見て、

「栗生、篠塚は居らぬか。あの木戸を打ち破れ、畑、亙理は居らぬか、切り込め。」

と命令した。栗生、篠塚の二人はこれを聞いて走り出し、堀の側の塚の上に大卒塔婆が二本あつたのを難なく引きぬき、向岸へ倒しかけて橋とした。又畑六郎左衛門、亙理新左衛門の二人は、

「貴公達は橋渡の判官になられい。我々は合戰をしよう。」

と戲れて、橋を走り渡り、堀の上の逆茂木を取りのけて、木戸の側までやつて來た。此處を防いでゐた兵共は三方の土矢間から槍や長刀を差出し差出し突き立てたのを、亙理新左衛門は十六本も奪ひ取つて捨てた。畑六郎左衛門はこれを見て、

「のけよ亙理殿、其塀を引きくづして、人々にたやすく合戰をさせよう。」

と云ひつつ走り寄つて右の足を昂げ、木戸の闕の木を踏み折つてしまつた。かうして一の木戸を

打破つた新田の軍勢三萬餘騎は、城の中へなだれ込んで合圖の火を上げた。これを見て比叡山の僧侶二萬餘人は、搦手から堂舍佛閣に火をつけては、わめき叫んで攻め込んだ。火は東西南北に燃え擴がり、もはやかなはないと思つたか、三井寺の僧侶達は皆猛火の中で腹を切つて果てた。まして方角のわからぬ四國西國の兵共は火の中に逃げまどひ、此處彼處で自害をした。

建武二年正月十六日合戰の事

三井寺の敵をわけなく攻め落したので、顯家卿は一先づ坂本へ引き返された。そこで義貞も坂本へ歸らうとしたが、船田長門守經政の意見に從ひ、三萬餘騎の軍勢で逃げて行く敵を追ひかけた。逃げる敵は大軍で遲く、追ふ身方は小勢で早かつた爲め、山階邊で追ひついたが道が廣くて敵が容易に引き返して來られる所では、そんなにひどく追はず、遠くから矢を射かけ射かけ鬨の聲を上げるばかりであつたが、道が狹くなつたり、敵の行先が嶮しい山路になつたりすると、烈しく追ひ立て、休みなく射落し、切り伏せたので、敵は一度も引き返す事が出來ず、先を爭つて逃げて行つた。

尊氏は三井寺で合戰が始まつたと聞き、援軍を出さうと三條河原で勢ぞろひをしてゐる所へ、

はや四五萬騎の軍勢が逃げてきた。追ひかけてきた新田左兵衞督は二萬三千餘騎を三手に分け、一手は將軍塚の上へあげ、一手は眞如堂の前から出し、一手は法勝寺を後に二條河原へ出して置いて、合圖の煙を上げた。義貞自身は花頂山に上つて敵の陣を見廻してから、互ひに知合つてゐる侍五十騎づつを一團とした二千餘騎を敵中へ紛れ入らしめ、合圖が始まると直ぐ敵の陣中をかけ廻らさせる計略を立てた。

尊氏はそんな事とは知らず、

「新田はいつも平野の戰を好むと聞いてゐたが、山を後にして一向仕懸けて來ないのは、小勢を敵に見せまいとしてゐるに違ひない。師泰、將軍塚の上の敵を追ひ散らせ。」

と命令した。師泰は二萬餘騎をひきつれ、二手に分れて攻め上つたが、此處には脇屋、堀口らがゐて、攻め上る敵を、大山の崩れかかるが如く、眞逆樣に攻め下したので、師泰の軍勢は一たまりもなく五條河原へ退却した。搦手で戰が始まると、大手でもそれに應じて鬨の聲を上げた。卽ち官軍の二萬餘騎と尊氏の八十萬騎とが入れ替り入れ替り戰ひ合つた。

寄手は小勢ではあるが、心が一つに合つてゐて、攻め込む時は一度にさつとかかつて敵を追ひまくり、退く時は負傷者を中に守つて靜に退いた。京勢は大軍ではあるが人の心が一致せず、攻

め込む時も揃はず、退く時も助け合はず、思ひ〳〵に闘つた爲めに、六十餘度の合戰は何時も官軍の勝ちであつた。けれども尊氏方は多勢故、討たれても軍勢はへらず、逃げても遠逃げはせず、唯だ一所に支へてゐた。其時、最初敵中へ紛れ込んでゐた官軍が、尊氏の前後左右から起つて亂れ合つて戰つた爲め、いづれが敵いづれが身方とも分らず、同士打を始めたので、高、上杉らは山崎へ、尊氏、吉良、仁木、細川らは丹波路へ逃げて行つた。官軍は勝につけ込んでいよいよ烈しく追ひかけたので、尊氏は途中で三度も自害をしかけたが、日が暮れて官軍は桂河から引返した爲め、暫くの間松尾葉室の間で休息して、渴をいやした。

細川卿律師定禪は四國の軍勢に向ひ、

「今日の敗戰は三井寺の合戰に負けた事が原因だが、それは我々の責任だから、人の嘲りは到底まぬがれない。此上は他の軍勢を交へず、我々だけで花々しい一戰をして、天下の人々の惡口をやめさしたい。今から北白河へ廻つて、下松にゐる赤松筑前守と一所になり、新田の軍勢と一戰して見よう。」

と云つて、伊豫、讃岐の軍勢の中から三百餘騎を選り出して北白河へ廻り、糺の森の前で三百餘騎を十方に向け、下松、藪里、靜原、松崎など、三十餘箇所に火をつけておいて、一條から三條の

間の三箇所で鬨の聲を上げた。官軍は京、白河の間に分散し、一所に集つた軍勢が少なかつたので、義貞、義助は一戰で負け、坂本をさして引き返して行つた。

正月二十七日合戰の事

去年搦手の東山道より鎌倉へ攻め下つた大智院宮の軍勢は、竹下箱根の合戰に合圖が違つて逢へなかつたが、諸國の軍勢を加へて大軍となつたので鎌倉に向つた所、新田は負けて引返し、尊氏がそれを追つて上京し、其後奥州の顯家卿も亦尊氏の後を追つて攻め上つたといふ事だつたので、又々、其後を追つて上り、二萬餘騎の軍勢は正月二十日の夕方に東坂本へ到着した。官軍はそれに力を得て、二十七日に合戰をしようと相談をきめた。

其日になると、楠、結城、名和は三千餘騎で下松に、顯家卿は三萬餘騎で山科に、洞院左衞門督は二萬餘騎で赤山に、又比叡山の僧侶一萬餘騎は鹿谷に、新田左兵衞督兄弟は二萬餘騎で北白河に、それぞれ陣を取り、大手搦手の軍勢合せて十萬三千騎は、皆宵の中から押寄せてゐたが、敵に知られないやうにと篝火はわざと焚かなかつた。

さて氣の早い僧侶達は先づ拔け懸けをして、神樂岡の宇都宮紀清兩黨の陣へ攻め寄せ、互ひに

入れ替り立ち替り烈しく戰ひ合つたが、僧侶達は遂にこれを攻め破り、宇都宮勢は退いて二條の軍勢に加はつた。

又楠判官、結城入道、名和伯耆守は三千餘騎で糺の森の前から押し寄せ、出雲路の邊へ火をかけた。ここでは上杉伊豆守、畠山修理大夫、足利尾張守らが五萬餘騎で防いだが、楠の謀に惱まされ、わづか五百餘騎の軍勢に攻め立てられて五條河原へ引き退いた。

奥州の國司顯家卿は二萬餘騎で粟田口から押寄せ、車大路に火をつけた。尊氏はこれを見て、自ら五十萬騎をひきつれて馳せ向ひ、追ひつ追はれつ、入れ替り入れ替り烈しく戰つたが、兩軍共に戰ひ疲れて一休みしてゐる所へ、新田義貞、脇屋義助らが三萬餘騎を三手に分けて、二條河原に雲霞の如く集つてゐる敵の眞中を眞横に通り、敵の後を絶たうと京中へ攻め込んだ。敵はこれを見てあわて騒ぎ、四方八方へ逃げ出したので、義貞はわざと鎧をぬぎかへ、馬を乘り替へ、唯だ一人敵の中へ攻め入り攻め入り尊氏をさがしたが、遂に見出す事が出來なかつた。其内日も暮れたので、楠判官の意見に從ひ逃げ行く敵を長追ひせず、そのまゝ坂本へ引き返した。

尊氏は今度も丹波路へ退かうと、寺戸の邊まで來た所、京都の中には敵が一人も殘つてゐないと聞いて、再び京都へひきかへしてきた。

將軍都落ちの事附藥師丸歸京の事

楠正成は比叡山へ歸り、翌朝律僧二三十人を作り立てゝ京へ下し、此處彼處の戰場で死骸をさがさせた。足利勢は不思議に思つて其理由を問ふと、此僧達は悲しみの涙を押へて、

「昨日の合戰に新田左兵衛督殿、北畠源中納言殿、楠判官殿以下重立つた人々が七人も討死されたので、供養の爲めに其死骸を探して居ります。」

と答へた。又同日の夜半頃、楠正成は下男達に松明二三千を並べ燃させて、小原、鞍馬の方へ下らした。京都の軍勢達はこれをみて、

「さてこそ、比叡山の敵は大將を討たれて今夜方々へ逃げて行くらしい。」と告げたので、尊氏は、

「それでは逃がさぬ樣に方々へ軍勢をさし向けよ。」

と、鞍馬路、小原口、勢多、宇治、嵯峨、仁和寺等へ、それぞれ軍勢をさし向けて固めさせた。これが爲め京都にゐた大軍は半ば減じ、其上殘つてゐる兵士達は油斷して用心することを怠つてゐた。

さて官軍は宵から西坂を下り、八瀬、藪里、鷺森、下松に陣を取り、諸大將は皆一つになつて

二條河原へ押寄せ、あちらこちらの民家に火をつけ、三箇所で鬨の聲を上げた。

京都の軍勢は敵が押寄せて來ようとは夢にも思はなかつたので、あわて騒いで、丹波路を指して逃げる者もあれば、山崎に向つて逃げる者もあり、又僧となるものもあり、官軍はさう遠くまでは追はないのに、後から逃げてくる身方を追ひかけてくる敵だと考へ、久我畷、桂河の邊では、自害をした者が數へ切れない程あつた。

尊氏は丹波の篠村を通り、内藤三郎左衞門入道道勝の屋敷へ着いた。やがて兵庫湊河に逃げ集つた軍勢から丹波へ急使を出して尊氏を迎へたので、尊氏は二月二日に丹波を立つて攝津へ着いた。

此時熊野山の別當四郎法橋道有の子孫で、藥師丸といふ稚兒姿の者がお供をしてゐたのを、尊氏は呼び出して、

「今度京都の合戰に何時も敗れたのは、尊氏が朝敵である爲めである。それ故何とかして持明院殿の院宣を賜つて合戰をしたいと思つてゐる。お前は日野中納言に緣故があると聞いてゐる、これから京都へ歸つて院宣のお下渡しを御願ひしてみよ。」

と云はれたので、藥師丸は承知して京都へ上つて行つた。

大樹攝津國豐島河原合戰の事

尊氏が湊河に着くと、方々から軍勢が集つてきて、間もなく二十萬騎にもなつたが、湊河の宿でぐづ〳〵と三日も逗留してゐる間に、宇都宮を始め多くの軍勢が官軍に降參して義貞についた爲め、官軍はいよ〳〵大軍になつた。

二月五日に顯家卿と義貞とは十萬餘騎で京都を出發し、攝津國の芥河に着いた。尊氏はこれを聞いて弟の左馬頭に十六萬騎をつけて攻め上らした。兩軍は二月六日に豐島河原で行き合ひ、互ひに入れ替り入れ替り烈しく戰つたが勝負がつかず、其日一日は戰ひ暮した。所がおくれて馳せつけてきた楠正成は、合戰の樣子を見て、正面からは攻めかゝらず、神崎を廻つて濱の南から攻め寄せたので、左馬頭の兵は終日の合戰に戰ひ疲かれた上、敵に後ろを圍まれまいとの懸念もあつた爲め、一戰もせずに兵庫をさして引き揚げた。

義貞はこれを追駈けて西宮へ着くと、直義は湊河に陣をとつてこれを防いだ。そこへ大友、厚東、大内介が足利方へ、伊豫の土居、得能が官軍方へ、それぞれ船を漕ぎつけて加つたので、お互ひに新手の軍勢を先立てて又烈しく戰ひ合つたが、左馬頭は攻め破られて兵庫へ退却した。

尊氏は何度戰つても攻め破られたので、もはや疲れた樣子が見えた。そこで大友の意見に從ひ其船に乘つて逃げ出し、筑紫をさして海上に漂ひ出たので、義貞は花々しく京都へ凱旋して來た。

主上山門より還幸の事

逆賊が京都を逃げて行つたので、二月二日に天皇は比叡山より還幸遊ばされて、花山院を皇居と定められた。同じ月の八日には義貞が豐島、打出の合戰に勝つて京都へ歸つて來た。其度々の合戰の模樣を天皇は特に御感心遊ばされ、臨時の式を擧げて義貞を左近衛中將に任ぜられ、義助を右衞門佐に任ぜられた。又建武の年號は朝廷の爲め不吉であると云ふので、二月二十五日に延元と改められた。

賀茂の神主改補の事

賀茂の神主職貞久を罷めて、尊氏はそれに基久を任命したが、今度また天下の政治が覆つたので、朝廷の命令として元の貞久が復活させられた。

此事は今度に限つたわけでなく、天下の亂の爲め、基久貞久は兩院の御治世の變る度に常にかへられ、三四年の間に三度も改められたので、基久は遂に世をはかなみ、一首の歌を詠み殘して、出家遁世の身となつてしまつた。

註

(一)戒を授受する境場。

(二)行幸の時檢非違使の判官が浮橋を作つて渡したので此稱あり。

卷第十六

將軍筑紫へ御開きの事

建武三年二月八日に兵庫を逃げ出した尊氏の軍勢は、散り〴〵ばら〳〵になつて、今は高、上杉、仁木、畠山、吉良、石堂の人々と、武藏、相模の軍勢とが從ふばかり、筑前國多々良濱の湊に着いた日は、五百人にも足りない人數になつてゐた。

其處へ宗像大宮司が使をさし向けて迎へに來たので、尊氏は宗像の屋敷へはいり、翌日少貳入道妙慧の所へ南遠江守宗繼、豐田彌三郎光顯の二人を使として、賴りにしてゐる旨を云つてやつたので、少貳入道は直ぐさま長男の太郎賴尙に三百騎を添へて行かしめた。

少貳菊池と合戰の事附宗應藏主が事

菊池掃部助武俊は元から官軍方であつたが、少貳が尊氏に身方すると聞いて、途中で討ち取らうと水木の渡しへ馳せつけ、少貳太郎の軍勢を大半討ちとつた。菊池は最初の合戰に勝つて悅び、其軍勢をひきつれて少貳入道妙慧が立籠つてゐる內山の城へ押し寄せたが、城は要害の場所にあるので、新手を入れ替へ入れ替へ數日間攻め立てたが落ちなかつた。所が少貳の一族の中に裏切者が現はれたので、妙慧は腹を搔き切つてしまつた。

此少貳の末の子に宗應藏主といふ僧があつたが、父の死を弔うて、骸を火葬に附した。そして其火葬の火の中へ飛び込んで、自分も同じく死んでしまつた。

多々良濱合戰の事附高駿河守例を引く事

少貳の城を攻め落した菊池は、大軍を擁して多々良濱へ攻め寄せた。尊氏は香椎宮に上つて敵の軍勢を見廻し、無理な戰をして名もない者に討たれるよりも腹を切らう、と云ひ出したのを左馬頭直義が堅く諫めて、合戰の勝敗は大勢小勢によるものではない。先づ直義が馳せ向つて一戰

して見ませうと、云ひ捨てゝ立ち出たので、仁木、細川、高、大高、南、上杉、畠山、其他の軍勢二百五十騎がこれに從つた。

敵身方の軍勢が互ひに近づいた所へ、菊池の兵が唯だ一騎拔けがけして來たのを、眞先に進んでゐた曾我左衛門、白石彦太郎、八木岡五郎の三人がいきなり討ち取つたので、これに元氣を得た軍勢は心を一つにして敵の大軍の中へ斬込んだ。それが爲め、菊池の大軍はわづかな軍勢に攻め立てられて、多々良濱の遠干潟を二十餘町も引き退いた。又搦手へ廻つた松浦、神田の兵達は、三百騎にも足りない足利勢を二三萬騎にも見て俄に降參してしまつた。菊池はこれを見て、急いで肥後の國へ引返して行つた。尊氏は一色太郎入道道猷、仁木四郎次郎義長の二人をさし向けて、菊池の城を攻めさした所、一日も持ちこたへられず、深山の奥へ逃げこんでしまつた。

其後各所の官軍を次々に攻め滅したので、九州、豐岐、對馬はすべて尊氏につき從ふ事となつた。

松浦、神田の兵共は足利の小勢を大軍と見て降參したといふので、尊氏は上杉の人々に向ひ、「松浦、神田が一戰もせずに降參したのは、何か野心を懷いてゐての仕業かも知れない。殊に身方の小勢を大軍と見た事は疑はしい。各〻方決して油斷をしてはならぬ。」

と云つた所、高駿河守が進み出て、人の心中の知りがたい事は天よりも高く地よりも厚いとは云ふが、こんな重大な時には、餘り人の心を疑つては大功が成就しない。身方の軍勢が大軍に見えたといふのは、決して例のない事でもないと、日本や支那の例を引いて話し、これは全く我々の武運が天の心に叶つたのであると說いたので、尊氏を始め一同は互ひに喜び合つた。

西國蜂起官軍進發の事

筑紫へ逃げのびた尊氏の追討を、義貞がぐづ〳〵して躊躇つてゐる中に、丹波國では久下、長澤、荻野、波々伯部の手の者が、仁木左京大夫頼章を大將として高山寺の城に立籠り、播磨國では赤松入道圓心が白旗峯に城を作つて討手の軍勢を待ちうけ、美作では菅家、江見、弘戸の人々、備前では田井、飽浦、內藤、頓宮、松田、福林寺の人々、備中では庄、眞壁、陶山、成合、新見、多地部の人々が起り、これより西の備後、安藝、周防、長門は勿論、四國、九州も凡て尊氏の身方となつてしまつた。京都ではこれをきいて、東國が敵になられては叶はないと、北畠源中納言顯家卿を鎭守府將軍として奥州へ下された。新田左中將義貞には十六箇國の管領をお許しになり、尊氏追討の宣旨をお下しになられた。義貞は天皇の命をうけて、先づ江田兵部大輔行義、大館左

馬助氏明の二人に二千餘騎をつけて播磨國へ差し向け、二人は三月六日に書寫坂本へ着き、そこへ押寄せた赤松の軍勢を先づ打ち破つた。

新田左中將赤松を攻めらるる事

義貞は五萬餘騎をひきつれて京都を出發し、行く〳〵諸所の兵士を併せて六萬餘騎となつた。そこで赤松の城を攻め落さうと、斑鳩の宿まで押寄せた時、赤松圓心は義貞に使を出して、

「播磨國の守護職に補せられる綸旨に御辭狀を副へて賜はつたならば、元の如く御身方になつて忠義を盡したい。」

と申し出たので、義貞は京都へ急使を立てて、守護職補任の綸旨を下されるやうにとりなした。所が其使の往復の間に、圓心はすつかり城を造り上げて、

「此國の守護國司は將軍尊氏殿から頂いてゐます。手の裏を覆すやうな綸旨が何にならう。」

と嘲弄して綸旨を返して來たので、義貞は、

「よし、其考へならば、縱へここで數ヶ月を費しても、城を攻め落さずには置けない。」

と、六萬騎の軍勢で白旗の城を百重千重に取圍み、五十餘日の間、夜晝休みなく攻め立てたが、城

はなか〳〵堅固で落ちなかつた。そこで脇屋右衛門佐の意見に從ひ、軍勢を分けて宇都宮菊池とともに二萬餘騎をつけ、伊東大和守、頓宮六郎の二人を案内役として、船坂山へさし向け、其處の敵にあたらせた所、船坂山は山陽第一の要害地故、皆攻め上りかねて、山を見上げて日を過すのみであつた。

兒島三郎熊山に旗を擧ぐる事附船坂合戰の事

備前國の兒島三郎高德は、去年の冬、細川卿律師が四國から攻上つた時、備前備中の數箇度の戰に負け、山林に身を隱してゐたが、官軍が船坂山を越えかねてゐると聞き、こつそり使を新田の所へ出して、手筈を打合せ、合圖を定めて置いて、四月十七日の夜半頃、自分の屋敷へ火をつけ、近邊にゐた親類の者共と二百餘騎で、熊山に立籠つて兵を擧げた。豫想通り三石船坂の賊兵は先づ熊山へと押寄せてきた。其敵を防いで高德は一日中戰ひ暮し、わざと時を過してゐた。所が夜になつて思ひもよらぬ所から敵が攻めこんで來たので、僅かの軍勢で其敵と烈しく戰つてゐる中、高德は內兜を突かれて馬から落ちた。それが重傷である上、馬から落ちる時馬に胸板を强く踏まれて息が絕えてゐたのを、父の備後守範長が元氣づけたので漸く息を吹き返した。そこで

一同は敵を追ひ散らし、暫くは兩軍共に守り合つて戰もしなかつた。

合圖の日になると新田勢は三手に分れて、船坂の前後へ嶮しい道を分けて進み、東西に火をつけ鬨の聲を上げて攻め入つた。城中では大半の兵を熊山へさし向けた後の事とて、驚きあわてて逃げ廻り、逃げ場を失つた者は其處此處で自害をしたり、生捕られたりした。其數は實に夥しかつた。

さて船坂を攻め落した江田兵部大輔は美作國へ攻め入り、奈義、能仙、菩提寺の諸城を落し、脇屋右衞門佐義助は三石の城を攻めた。又大江田式部大輔は備中國へ押寄せ、福山城に陣を取つた。

將軍筑紫より御上洛の事附瑞夢の事

多々良濱の合戰の後は、九州一圓尊氏に從はない者はなかつたが、中國には敵が充滿し、東國には身方が少かつたので、たやすく京都へ攻め上る事は出來まいと、春の敗北に懲りて皆恐れてゐた所へ、赤松入道の三男則祐律師が筑紫へ馳せつけ上京を勸めたので、尊氏は仁木四郎次郎義長を大將として大友、少貳の二人を九州へ殘し、四月二十六日に太宰府を出發し、急いで上京の途

についた。五月一日には安藝の嚴島へ立ち寄つて三日間參籠をした。其最終の日に京都から下向した三寶院の僧正賢俊が持明院殿から下された院宣を奉つた。尊氏はこれを拜覽して悅び、四國中國の軍勢を加へて五日に嚴島を出發し、輌の浦からは左馬頭直義を大將に、二十萬騎の軍勢を分けて陸路を進ましめ、尊氏は一族の者、高、上杉らの一類をひきつれ、兵船七千五百餘艘を漕ぎ竝べて海路を進んだ。

輌の浦を出發する時に一つの不思議な事があつた。尊氏が屋形の中で一寸の間うと〳〵としてゐると、南方から光り輝いた觀世音菩薩が飛んで來られて、船の舳へ立たれ、眷屬の二十八部衆が各〻弓矢や武器を持つてそれをお守りした。尊氏は夢がさめて見ると、山鳩が一羽船の屋形の上にゐた。これは觀世音がお守り下さつて、勝戰をする夢のお告げだと、杉原の紙を短冊の廣さに切らせ、自ら觀世音菩薩と書いて船の帆柱毎につけさせた。

備後福山合戰の事

五月十五日の宵から、左馬頭直義は三十萬騎の軍勢で、官軍の立籠る福山城を取圍んで攻め立てた。城中の大將大江田式部大輔はよく防いだが、衆寡敵せず、四百餘騎に討ちなされた軍勢を

集め、一方を打ち破つて五月十八日の朝早く三石の宿へ落ちて行つた。

脇屋右衛門佐は三石から新田左中將に使を出して、福山合戰の樣子を詳しく報告した所、義貞は西國の戰を止め、急いで攝津國まで引き退き、京都を後にして合戰をしようと云つて來たので、官軍は皆三石をすてて退いた。

和田備後守範長、息子の三郎高德は、西川尻に陣をとつてゐたが、福山城が落ちたと聞いて三石へ馳せつけた所、脇屋は播磨へ退いた後だつたので、三石の南の山路を夜通しに越えて、佐越(さごし)の浦まで出てきた。息子の高德は此前の合戰で受けた傷がまだ癒えてゐないので、目がくらんで馬に乘る事が出來ない、佐越の近くに知合の僧のあつたのを探し出して預けてゐる間に、赤松入道圓心がこれを聞きつけて、三百餘騎をさし向けて那波邊で待伏せしてゐた。備後守は赤松勢と山陰で出合ひ、八十三騎の者が三百餘騎の中へ懸け入つて、濱路を東へと逃げて行つた。赤松の軍勢は附近の野武士達を誘つて散々に射かけたので、備後守は那波から阿彌陀が宿までの間に十八度も戰つて、主從は僅かに六騎に討ちなされた。備後守は或辻堂の前で馬を駐め、

「範長の討死すべき時が來た。今はもう遁れる事が出來ない。」

と云つて、馬から飛び下り、辻堂の中へ走りこんで念佛を唱へ、腹一文字に掻き切つて其刀を口

にくはへ、うつぶしになつて死んでしまつた。

新田殿兵庫を引かるる事

新田左中將義貞は備前美作の軍勢を待つて陣容を整へようと、賀古川の西にある岡に陣をとつて二日間逗留してゐた。丁度五月雨が降り續いて河の水が增したので、馬の弱い軍勢や負傷者達を段々に渡して行つたが、水は一晩の中に減じ、又備前美作の軍勢も馳せつけたので、馬筏(いかだ)を組んで六萬餘騎を一度に渡してしまつた。

然し義貞の軍勢は足利兄弟の上京ときいて段々に逃げ失せ、五月十三日に兵庫へ着いた時は、二萬騎にも足りない程になつてしまつた。

正成兵庫に下向の事

尊氏、直義は大軍を率ゐてゐるから、義貞は要害の地で戰はうと兵庫まで退いた旨を、急使を立てゝ皇居へ御報告申上げたので、天皇は一方ならず驚かれて楠判官正成を呼び、「急いで兵庫へ下り、義貞と力を合せて合戰をせよ」と仰せ出された。そこで正成は畏まつて、天皇は比叡山

へ行幸になり、義貞を呼び返して、尊氏を京都に入らせ置き、四方から攻め立てゝこれを滅ぼさうといふ謀を申上げたが、坊門宰相清忠の反對によつて其謀が用ひられず、五月十五日、京都を出發して五百餘騎で兵庫へ下つた。

正成は心中、これが最後の合戰であると思つたので、今年十一歳になる長男の正行を櫻井の宿から河内に歸すことに決め、さて正行に向つていふには、

「獅子は子を產んで三日たつと、數千丈の石壁から其子を投げ落す。其子に獅子の意氣込みがあるならば、敎へなくとも跳ね返つて死ぬる事はないといふ。ましてお前はもはや十歳を過ぎてゐる。一言耳に留まつたならば、父の此誡めに違つてはならぬ。今度の合戰は天下の分れ目、今生でお前の顏を見るのはこれが最後だと思ふ。正成がもはや討死をしたと聞いたならば、天下は必ず尊氏のものとなつたと考へてよい。ではあるが暫しの命を惜んで多年の忠義を失ひ、降參するやうな事があつてはならぬ。一族の者や若武者達が一人でも生き殘つてゐる間は、金剛山に立籠り、敵が攻め寄せて來たならば、命を養由の矢さきに託し、義を紀信の忠に比べよ。これがお前の第一の孝行だ。」

と、泣く〳〵云ひきかせて、各〻東西に別れた。

正成は兵庫に着いて、新田左中將と對面した。義貞は天皇の御考への模樣を尋ね問ひ、正成は自分の考へと天皇の仰せとを詳しく話し、夜通しの物語に數杯を傾け興じた。

兵庫海陸寄手の事

五月二十五日の朝八時頃、沖の霞の晴間から、廣々とした海面十四五里の間を漕ぎ連ねて夥しい兵船が近づき、陸路は須磨の上野と鹿松岡、鵯越の方から五六百本の旗をさし並べて雲霞の如き大軍が攻め寄せて來た。海上の兵船、陸路の軍勢は聞きしにもまさる大軍であつたが、義貞、正成は少しも恐れる樣子がなく、靜かに手分けをして、一方、脇屋右衞門佐義助を大將に五千餘騎を經島へ、他方、大館左馬頭氏明を大將に、三千餘騎を燈爐堂の南の濱へ、又一方、楠判官正成がわざと他の軍勢を交へず、七百餘騎で湊川の西の宿に控へて、陸路の敵に向つた。左中將義貞は總大將であるから、三萬五千餘騎で和田御崎に幕をひかせて控へてゐた。さて海上陸路の兩陣は互ひに攻め寄せてきて、先づ沖の船から太鼓を鳴らして鬨の聲を上げると、陸路の敵がそれをひきとつて聲を合した。之に對して官軍の軍勢が、又鬨の聲を上げた。

本間孫四郎遠矢の事

新田、足利の兩大將が互ひに近よつて未だ戰ひを始めない間に、新田勢の中から本間孫四郎重氏が唯だ一人進みいで、敵身方の共に見まもつてゐる中で、波の上に下りた鵜(みさご)が魚をくはへて沖の方へ飛んで行くのを、鏑矢をつがへて見事に射落した。本間はわざと生きたまゝを射落さうと思ひ、片羽を切つたばかりであつた爲め、鏑は大内介の船の帆柱に立ち、鵜は大友の船の屋形の上へ落ちかゝつた。

これを見た尊氏は名字を承りたいと問はした所、本間はこの矢で名字を御覽あれと、三人張の弓に十五束三伏の矢をつがへて遠矢に射た。其矢は六町餘りを越えて、尊氏の船と雙んでゐた佐々木筑前守の船の屋形に乘つてゐた兵の鎧(よろひ)の草摺を裏まで通して突き立つた。尊氏が其矢を取りよせてみると、相模國住人本間孫四郎重氏と小刀の先で書いてあつた。

本間は扇を上げて沖の方をさし招き、

「合戰最中の事故矢の一本さへ惜しまれる。其矢を此方へ射返して下されい。」

と云つたので、尊氏は、佐々木筑前守顯信に、それを射返さしめようとした。佐々木は固く辭退を

したが許されず、自分の船にかへつて、弓の弦をくひしめ、將に射返さうとした所へ何といふ出しやばりの馬鹿者だ、讃岐の軍勢の中から鏑矢を一本射た者があつた。其矢はしかし二町も射とどかず、波の上へ落ちてしまつたので、本間の軍勢ではしばしの間笑ひやまなかつた。そこで佐々木は遠矢をやめてしまつた。

經島合戰の事

遠矢を射そこなつて敵身方に笑はれた者は、船一艘に二百餘人も乘込んで經島へ漕ぎよせ、磯に飛び下りて攻めかゝつたが、脇屋右衞門佐の軍勢は一人も殘らずそれを討ち取つてしまつた。細川卿律師はこれを見て、

「續く者がなかつた爲めに討たしてしまつた。下場(おりば)の良い所へ船をつけて、馬を追ひ下し追ひ下し打つて上れ。」

と命令したので、四國の兵船七百餘艘は紺部(こんべ)の濱から上らうと、磯に沿つてのぼつて行つた。兵庫島の三箇所にゐた官軍は、船の敵を上げまいと漕ぎ行く船について海岸を東へと進んだ爲め、新田左中將と楠との間は遠く離れ、兵庫島の船著場には防ぐ軍勢もなかつたので、九州中國の兵船

六十餘艘は和田御崎へ漕ぎよせて上陸してしまつた。

正成兄弟討死の事

楠正成は弟の正季に向ひ、

「敵が前後を遮つて、身方は陣を隔てられてしまつた。今はもう逃げる事が出來ない。さあ、前の敵を一散らし追ひまくつて、後の敵と戰はう。」

と云ふと、正季も「さう致しませう」と答へて、七百餘騎を前後に立てゝ大軍の中へ攻め入つた。左馬頭の兵はこれを取り圍んで討たうとしたが、正成、正季は東西南北に追ひ散らして烈しく攻め立て、二人は左馬頭に近づき、組んで討ち取らうと、七度出合つて七度分れた。左馬頭の軍勢五十萬騎は、楠の小勢に攻め立てられて須磨の上野の方へと引き返した。直義は危ふく討たれようとしたのを、家來に助けられて漸くに逃げのびた。

尊氏は此有様を見て、「新手を入れ替へて直義を討たすな。」と命令したので、吉良、石堂、高、上杉らの人々が六千餘騎で湊河の東に出で、正成の後を遮らうと取りまいた。正成、正季は取つてかへして、今度は此敵に向ひ、烈しく攻め戰つた爲め、軍勢は追々討たれてわづかに七十三騎

となつてしまつた。これだけの軍勢でも攻め破つて逃げようと思へば逃げられたのに、正成は京都を出た時からこれが最後だと決心してゐたので一足も退かず、もはや戰ひ疲れたので、湊河の北に一村の民家のある中へ走り込んで、腹を切らうと、鎧を脱いで身體を見ると、斬傷を十一箇所も受けてゐた。七十二人の人々も皆傷を受けてゐない者はなかつた。やがて楠の一族の者十三人と家來の者六十餘人は客間へ二列に竝び、念佛を十ぺんばかり同時に唱へて、一度に腹を切つた。

正成は上座にゐて弟の正季に向ひ、

「死際の心一つで、次の世に善くも惡くも生れるといふが、九界の中お前は何に生れかはりたいと思ふか。」

と問うた所、正季は笑ひながら、

「七度同じ人間に生れてきて朝敵を滅したいと思ひます。」

と答へたので、正成は事の外うれしさうな様子で、

「罪深い願ひだがわしもさう思ふ。さあ、それでは生れかはつて此望みを達する事にしよう。」

と契つて、兄弟互に刺し違へ、同じ枕に死んでしまつた。

新田殿湊河合戰の事

楠が討死したので、尊氏と直義とは一所になつて、新田左中將に攻めかゝつた。義貞はこれを見て、生田の森を後にして四萬餘騎の軍勢を三手に分け、三方に敵をうけた。二手の軍勢は入れ替り立ち替り烈しく戰ひ合つたので、暫くの間東西に分かれて人馬の息休めをしてゐた。これを見てゐた義貞は、もはや自分の出るべき時だと二萬三千餘騎を左右に從へて、尊氏の三十萬騎に正面から向ひ、兩軍共に命を惜しまず攻め戰つたが、官軍は小勢の爲め大軍に攻め立てられ、わづかに五千餘騎となつて生田の森の東から丹波路をさして逃げて行つた。

義貞は追ひかけてくる敵に馬を射倒され、求塚で馬から下りて乘かへの馬を待つてゐたが、身方はそれに氣がつかなかつた。敵はこれを見て取圍んで討ち取らうとしたが、近づく事が出來ず、ぐるりから遠矢を射かけたので、義貞は矢を十六本も切り落した。小山田太郎高家は遠くの山上からこの有樣をみて馳せつけ、自分の馬に義貞を乘せ、追ひかけてくる敵を支へ、大軍に取圍まれて遂に討死をした。其間に義貞は身方の軍勢の中へ馳せ入つて危ふい命を助つた。

小山田太郎高家青麥を刈る事

小山田は義貞を自分の馬に乘せ、敵に圍まれて討死をしたが、元をたゞせば僅かの人情に惹かれたのであつた。去年義貞が西國の討手を承つて播磨へ到着した時、兵は多く、糧が少かつたので、若し軍に掠を作らなかつたならば、諸卒の亂暴が絶えないであらうと、一粒でも刈りとり、一民家でも掠め取つた者は、直ぐさま斬り捨てるといふ事を大札に書いて道の辻々へ立てさせた。

所が高家は敵陣の近くへ行き、青麥を刈らせて歸つてきたので、侍所の長濱六郎左衞門尉は高家を呼び出し、仕方なくこれを斬らうとした。義貞はこれをきいて、

「まさか青麥の爲めに身を亡ぼさうとは思ふまい、敵陣であると考へ違ひをしたか、兵糧を得る方法がなくなつて、重い掟を忘れたか、二者の中のどちらかであらう。彼れの役所を見よ。」と使をやつて調べさした所、食物の類は一粒もなかつた。使者が此事を義貞に告げると義貞はひどく恥ぢて、

「高家が掟を犯したのは戰の爲めに罪を忘れたのである。士卒が先に疲れるといふ事は大將の恥

だ。勇士は失つてはならず、法も亦亂してはならぬ。」

と、田の持主には小袖を二重(かさね)與へ、高家には兵糧十石を添へて歸した。

高家は此情に感激していよ〳〵忠義の心を深め、大將に代つて討死をしたのであつた。

聖主又山門へ臨幸の事

官軍の總大將義貞が僅かに六千餘騎となつて京都へ歸つて來たから、京都では大騒ぎをして、五月十九日に天皇は三種の神器を先に立て比叡山へ臨幸遊ばされた。今度は公家にも武家にも御供をする者が多かつた。攝政關白を始め、外記(九)、史(一〇)、官人(一一)、北面(一二)、瀧口(一三)、官僧、官女ら、我も我もとお供をした。武家では義貞、義顯の父子、脇屋義助らを始め、都合六萬餘騎の軍勢が御乘物の前後を圍んで今路越に落ちて行かれた。

持明院、本院、東寺に潛幸の事

持明院の法皇(一四)、本院(一五)、新院(一六)、春宮(一七)の方々も皆比叡山御幸遊ばされることになり、太田判官全職(たけもと)がお供をしてゐた。ところが本院は、先頃尊氏に院宣を下されたので、二度御治世を遊ばされる

やうな事もあらうかと、北白川の邊から俄に御病氣だと云ひ立てられ、御乘物を法勝寺の塔の前に舁き据ゑさせて、わざと時間を過してゐられた。全職はさう何時までも待つてゐられないので、お供の人々に急いで比叡山へお供をして來いと云ひ殘して、法皇、新院、春宮を先に東坂本へ御送り申した。本院は全職が引返して來てはと恐しく思はれ、日野中納言資名と三條中將實繼とを連れられ、急いで東寺へおいでになられた。尊氏は一方ならず悅び、東寺の本堂を皇居と定めた。これは確かに尊氏の運の開ける瑞兆だと人々は囁き合つた。

日本朝敵の事

日本開闢の始めより、先づ神武天皇の御代に於ける紀伊國名草郡の蜘蛛を第一に、天智天皇の御代の藤原千方、朱雀天皇の御代の將門、其他、大石山丸、大山王子(一八)、大伴眞鳥、守屋(一九)大臣、蘇我入鹿、豐浦(二〇)大臣、山田石川左大臣、長屋(二一)右大臣、豐成(二二)、伊豫親王(二三)、氷上川繼、橘逸勢、文屋宮田、惠美押勝、井上(二四)皇后、早良(二五)太子、大友皇子、藤原仲成、天慶の純友、康和(二六)の義親、宇治(二七)惡左府、六條判官爲義、惡右衞門督信頼、安倍貞任、宗任、清原武衡、家衡、平相國清盛、木曾冠者義仲、阿佐(二八)原八郎爲頼、時政九代の後胤たる高時法師に至るまで、朝敵となつて天皇の御心を惱

まし、仁義を亂した者は、いづれも皆刑罰に苦しめられ、屍を獄門に曝さぬはない。それ故尊氏もこの春、關東八箇國の大軍をひきつれて上京したが朝敵であつた爲め度々の合戰に負け、九州を指して逃げて行つた。今度は前非を悔いて一方の皇統を立て、院宣を賜はつて行動したから、威勢の上に一つの理由がついて、大功は直ぐさま成就するであらうと、人々は皆さゝやき合つた。

さて東寺が院の皇居となつたので、四方の壁を城郭の構へにつくり、尊氏、直義は共に此寺に立籠つた。

正成が首故郷へ送る事

湊川で討死をした楠判官の首を六條河原にかけた所、去る春にもにせ首をかけたので、これも亦にせ首であらうと云ふ者が多かつた。

「其後尊氏は楠の首をとりよせ、

「公事にも私事にも、長い間交つた舊い友達だ、哀れな事をした。後に殘つた妻子達もさぞかし顏を見たく思ふであらう。」

と云つて、鄕里へ送つてやつた。

楠の後室は、正成が兵庫へ出發する時、色々と誡めを殘した上、今度の合戰には必ず討死をするからといつて、正行を留めて行つたのであるから、出て行かれた時が最後の別れだと、前々から考へてゐたものゝ、さて、面(おもの)あたり御首(おくび)を見ると、如何にも正成に相違はないが、目はつむり、色は失せ、變り果てゝゐる有樣に胸が一杯になり、悲しみと歎きの涙がとめどもなく流れた。今年十一歲になつた正行は、父の顏が生前とは似ても似つかないものになつてゐるのを見、又母のやるせなげな歎きの有樣を見て、流れる涙を袖でおさへ、持佛堂の方へ立つて行つた。母は怪しんで妻戸の方から行つてみると、父が兵庫へ行く時形見に殘した菊水の刀を拔いて右手に持ち、袴の腰を押し下げて自害をしようとしてゐた。母は急いで走り寄り、正行の腕に取りつき、涙を流して云ふには、

「梅檀は二葉より芳はしと昔から云はれてゐる。お前は幼くても父正成の子であるならば、これ位の道理がわからぬ事はあるまい。幼心にもよくよく事の有樣を考へて見よ、亡き父が兵庫へ行く時、お前を櫻井の宿から歸したのは、父の亡き跡を弔へといふのでもなく、又腹を切れと云ふのでもない。自分はたとへ武運がつき戰場で討死をしても、天皇が何處々々においでになると聞

いたならば、生き殘つた一族の者や若侍らを扶持しておいて、今一度軍勢を集めて戰を起し、朝敵を滅して皇位を護り奉れと云ふ意味であつたのです。其遺言を詳しく承つて、此母に話して聞かせたお前が、それを何時の間に忘れてしまつたのです。こんな有樣では、父の名を汚すのみか、天皇の御役に立つ事も出來ますまい。」

と拔いた刀を奪ひとつて、泣く〳〵諫め止めたので、正行は腹を切る事が出來ず、禮盤(二八)の上から泣き倒れ、母と共に歎き合つた。

註

(一)紙の名、奉書紙の類。
(二)馬を繫ぎ合して先立て、川を渡る事。
(三)支那の楚の國の將、弓の名人。命を惜むなといふ事にたとへたもの。
(四)漢の高祖の忠臣で、高祖の命にかはつて死んだ人。義を重んじて忠義をつくせよといふ事にたとへたもの。
(五)腰の邊に垂れた短い裾。
(六)今の神戸。

(七)地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩の九つ。
(八)兵刑を司る役所。
(九)今の書記官。
(一〇)記錄を司る役。
(一一)太政官の役人。
(一二)院の御所の武士。
(一三)宮中の武官。
(一四)後伏見院。
(一五)花園院。
(一六)光嚴院。
(一七)豐仁親王、後の光明院。
(一八)應神帝の第二子大山守。
(一九)物部守屋。
(二〇)蘇我蝦夷。
(二一)高市皇子の子、天武帝の孫。
(二二)藤原武智麿の子、藤原仲麿の兄。

(二三)桓武帝の第二子。
(二四)翌武帝の皇女、光仁帝の皇后。
(二五)光仁帝の皇子。
(二六)八幡太郎義家の長男。
(二七)左大臣藤原頼長。
(二八)甲斐の人、小笠原の流。
(二九)佛前にある禮拜の臺座。

卷第十七

山門攻めの事附日吉神託の事

天皇は二度比叡山へ臨幸遊ばされ、全山の僧侶は春の勝戰の時に習つて、二心なく天皇をお護り申し、北國、奥州の軍勢を待つてゐるといふ噂であつた。そこで尊氏は左馬頭、高、上杉の人人と東寺に會合して相談した所、合戰が延び延びになつて、義貞の軍勢が多くなつてはかなはない、軍勢の少い間に攻め立てようと、六月二日、四方の手分けを定め、大手搦手合せて五十萬騎の軍勢を比叡山へさし向けた。大手へは吉良、石堂、澁河、畠山を大將として五萬餘騎、搦手へは仁木、細川、今川、荒川を大將として八萬餘騎、又西坂本へは高豐前守師重、高土佐守、高伊豫守、南部、岩松、桃井らを大將として三十萬騎で押し寄せた。比叡山では道々の警固もせず、

木戸や逆茂木の構へもしてなかつたので、さしも嶮しい山路も攻め上らぬ所はなかつた。丁度其時は、新田左兵衛督を始め、千葉、宇都宮、土居、得能の人々まで皆東坂本に集つてゐて、山上には一人の兵も居なかつたから、西坂から押し寄せる大軍が躊躇なく四明嶽まで攻め上つたならば、山上も坂本も防ぐ方法がなく、一度にやぶれてしまつたらうに、俄に朝霧が立ちこめてすぐ前さへ見分けのつかぬ程だつたので、前陣で上げる身方の鬨の聲を敵が防ぐ叫聲と聞き誤つて、後陣の大軍は續かず、徒らに時を過した。其處へ大宮で會合してゐた僧侶達が歸山して、必死になつて防いだ爲め、寄手は攻めかゝる事が出來ず、お互ひに遠矢を射合つて其日は無駄に暮れてしまつた。

西坂で戰が始まつたらしく、鬨の聲が山に響いて聞えたから、志賀、唐崎の寄手十萬餘騎は東坂本へ押し寄せて鬨の聲を上げ、敵の陣を見渡した所、新田義貞の陣屋を始め、宇都宮、千葉、河野らの陣屋に、それ〴〵の旗が飜つて、兵共が物々しくかまへてゐるので、寄手は其勢におされて近づく事が出來ず、大津、唐崎、志賀などに三百餘箇所の陣を取つて遠攻めにした。

六月六日、大手搦手の寄手は手筈を定めて、夜明けに先づ搦手の寄手二十萬騎が三手に分れて攻め上り、道々の官軍を打ち破り打ち破り、大嶽まで攻め上つた。そこで比叡山の院々では西坂

が攻め破られたとて、早鐘をついて大騒ぎをしてゐた。さて寄手の中から江田源八泰氏と名乘る者が唯だ一人眞先に上つて來たのを、杉本の山神大夫定範（ぢやうはん）といふ僧が進み出て、他人を交へず二人だけで戰ひ、火花を散らして斬り合つたが、やがて二人は組合ひ、引き組んだまゝで數十丈の谷底へ上になり下になりして轉がり落ちてしまつた。他の僧侶達も皆向ふ敵に走りかゝり、命をすてゝ防ぎ戰つたので、寄手の大軍は進みかね、四明嶽の頂はもう三町といふ所で一休みしてゐた。所が何者かが大講堂の鐘を鳴らして、危急を告げたので、横川に向ひつゝあつた宇都宮が五百餘騎で驅けつけ、又皇居を守つて東坂本にゐた新田左中將義貞も、六千餘騎をひき連れて四明嶽へ馳せ上り、眞逆樣に懸け立てられたので、二十萬騎の寄手は皆谷底へ攻め落されてしまつた。義貞は東坂本を差し置いて大嶽に陣を取つてゐたので、搦手の寄手は大手の寄手に使を出して其事を告げた爲め、大手では十八萬騎を三手に分けて東坂本へ押し寄せた。城中では義貞の弟脇屋右衛門佐義助を大將に、諸國の軍勢が控へてゐたが、三方の寄手八十萬騎が近づいて鬨の聲を上げると、城中の兵六萬餘騎もこれに應へて鬨の聲を上げた。寄手の軍勢は大軍ではあるが、城中の兵にきびしく防がれて、遠攻め、矢戰の外はしなかつたので、はかばかしい戰鬪の展開はなかつた。

同月十六日、熊野の八莊司(一)達は五百餘騎で上京して西坂へ向ひ、傍若無人に力自慢などをしてゐた。六月十七日の朝八時頃、其八莊司の五百餘人を先に立てゝ、二十萬騎の大軍が攻め上つて來た。官軍方の强弓の名人である本間孫四郎、相馬四郎左衞門の二人は義貞の前にゐたが、熊野の人々の攻め上つて來るのを見下して、我々二人が立ち向つて、二矢射かけて奴等の肝をつぶしませうと、靜に座席を立ち上つたと思ふと、大弓を張つて十五束三伏の矢をつがへ、八莊司の中の大力者らしき荒武者が眞先に進んで來るのを本間が射倒し、次いで進んでくる仁王を作り損つたやうな大男の武士を相馬が射殺した。熊野勢の五百餘人はこの矢二本を見たゞけで、進む事も退く事も出來ず、皆背を屈めて立ちすくんでしまつた。本間と相馬はやがて高聲に名乘りを上げたが、二十萬騎の敵軍は追ふ者もないのに、先を爭つて引返して行つた。

こんな有樣で人々が皆攻めあぐんでゐた所へ、比叡山の僧侶で金輪院の律師光澄から、少納言隆賢といふ者を使として、高豐前守の所へ、裏切をして身方にならうと云つて來た。高豐前守は悅び勇んで夜討に慣れてゐる五百餘人の兵を選び出して隆賢につけ、六月十八日の夕闇に乘じ、四明嶽の頂へ上らせた。隆賢は多年の案內者であり、官軍の陣所などもよく知つてゐる筈なのに、どうしたものか道に迷ひ、迷ひ歩いてゐる中に夜が明けて官軍に見出され、軍勢は皆討たれ、隆賢は生捕られて間もなく斬られた。

其頃大師の御廟の修造の爲め、多くの材木が山上に引上げられてあつたので、櫓の柱や矢間の板にしようと、それを坂中へ運んで行つた。ちやうど其日、般若院の法印の所で召使つてゐた童が、俄に物狂はしくなつて色々の事を口走つてゐたが、

「我に大八王子(二)の權現がおつきになつた。」

とか、

「此御廟の材木は急いで元の處へ返せ。」

とか云つた。僧侶達はこれを怪んで色々の事を問うて見た所、其童は一々立派に答へたので、僧侶達もそれを信用し、山門の安否、戰の勝負を問うた所、此物つきの童は涙を流して、

「悲しい事には、今後朝廷の威光は長らく衰へ、公卿は賊徒の手下となり、天皇は帝都を去られる。誠に淺ましい事だ。見よ人々、明日の午の刻頃には早尾(三)の大行事を差向けて、逆賊を四方へ退けてみせるぞ。我が比叡山にはもはや何も恐れるものがない。其材木を元の處へ運び返せ。」

と託宣した。しかし明日の午の刻に敵が退散するといふ事は、餘りに急で本當とも思はれない。先づ明日の樣子を見てから天皇に申上げようと、其日は天皇に申上げる事を取り止めた。

比叡山では西坂に戰があれば本院の鐘をつき、東坂本に合戰があれば生源寺の鐘をら鳴さうと定めてゐた。所が六月二十日の早朝に早尾の神社の猿達がたくさん集つて來て、生源寺の鐘を東西兩塔に響き渡る程に撞いたので、諸方の官軍達は合圖の鐘が鳴ると皆攻め口に馳せ向つて防ぎ戰つた。寄手の軍勢は之を見て、おや山から逆寄せだとあわて騷いだ。官軍はそれにつけこみ、門を開いて急に攻め出した爲め、寄手の大軍は忽ち攻め破られ、なだれを打つて逃げて行つた。寄手の大將高豐前守は生捕られ、新田左中將の前に引き出されたが、やがて唐崎の濱で首を刎られてしまつた。

さて今日の合戰の結果を見ると、昨日の託宣が眞實らしいと、一同は身の毛もよ立つばかりであつた。

京都兩度軍の事

比叡山の寄手は攻め破られて、四方へ逃げ散つた爲め、京都は一時ひどく手薄であつたが、官軍が追擊して來なかつた爲め、追々と兵士が集つて來ていつの間にやら大軍になつた。さうとは知らず、比叡山の官軍は、京都がまだ手薄であるものと考へ、十萬餘騎を二手に分けて攻め寄せ

たが、尊氏の計略にかゝり、一戰に打破られて又山上へ引き返して行つた。

其後は暫く合戰もなかつたが、二條大納言師基卿が北國から三千餘騎をひきつれて東坂本へ到着したので、これに力を得た官軍は、謀を定めて京都を攻めようとしたが、誰れか其謀を尊氏に內通した爲め、五條河原に向つた官軍の一手は一戰で敗け、他方面に向つた新田左中將兄弟は十重二十重に敵に圍まれた。然し義貞の兵は一氣に其圍みを衝いて、一人も討たれず比叡山へ引返した。

山門の牒南都に送る事

官軍の再度の敗戰に、比叡山の僧侶達は心がはりするかも知れないと、天皇はいたく大御心を惱まされて、色々と僧侶達を優遇された。全山三千の僧侶達は大講堂の大庭に會合して、

「天下は總て天皇の領土である。たとへ僧侶であつても、此危急に際しては何で忠義をつくさずに居られよう。殊に比叡山は天皇の御氏寺である故に、かく朝廷の危急をお助け申すのである。又南都の寺々は攝關を始め重臣の氏寺であるから、當然藤原氏一門の窮苦を救ふべきである。早く東大寺、興福寺へ牒を送つて義戰に力を協してくれるよう申込まう。」

と相談一決して、奈良へ牒狀を送つた。

奈良ではそれを見て、比叡山に身方する旨の返牒を送つてきた。奈良が比叡山に身方をしたと聞いて、畿内近國の兵士達も皆比叡山に身方をして力を協さうとする者が多く、各〻京都の四方に陣をとつて道を塞いだ爲め、京都では國々からの運送の道が絶え、兵糧に窮した兵達は、民家に押入つて衣裳をはぎ取り、食物を奪つた。

比叡山の官軍が强くなつたといふので、國々の軍勢も多く官軍に身方する事になり、引き切りなしに東坂本へ集つて來た。そこで今一度京都へ攻め寄せて、決戰を試みようと合圖を定め、大將新田義貞は參内して天皇に拜謁し、決心の程を上奏して御前を退り、軍勢をひきつれて戰場へ向つた。

隆資卿八幡より寄せらるる事

東坂本の官軍が合圖の時刻を待ちうけてゐた所へ、敵が欺いて火をつけたものか、北白河に火の手が上つたので、八幡の官軍は合戰が始つたものと考へ、合圖の時刻も待たず、四條中納言隆資卿は三千餘騎を率ゐて、東寺の南大門へ押し寄せた。東寺の軍勢は皆北白河邊へ出て、比叡山の

官軍を防いでゐたので、高武藏守師直の軍勢五百餘騎が作道まで馳せ出したが、忽ち射立てられて出塀の上の高櫓を一つ攻め落され、城中は大騷ぎをしてゐた。其處へ土岐伯耆入道存孝の息子惡源太が驅けつけ、尊氏と父の命をうけ、唯だ一騎で大勢の敵を目指してかけ出し、またゝく間に大軍を追ひ散らしたので、高武藏守師直、越後守師泰の軍勢が盛り返して追ひかけ、官軍の大軍は元の八幡へ逃げ返つて行つた。

義貞軍の事附長年討死の事

一方の寄手が敗れたとも知らず、合圖の時刻が來たと、大手の大將新田義貞、脇屋義助は二萬餘騎をひきつれて三方から攻め寄せた。名將義貞も度々の合戰に負けて、今度こそは恥を雪がうと、勢ひ込んだ有樣はもの凄いばかりであつた。朝廷兩統の御運も、新田、足利二氏の葛藤も、唯今日のこの合戰で定まるものと、息をこらさぬ者はなかつた。

さて合戰は六條大宮から始つて、尊氏の二十萬騎と義貞の二萬騎とは入り亂れて攻め戰ひ、義貞は敵を追ひ散らし追ひ散らし、東寺の小門の前に押寄せ、一度に鬨の聲を上げた。義貞は始めから今日の戰には尊氏と一人同志の決戰をしようと覺悟してゐたから、自ら陣頭に現はれて、

「矢を一つ受けてみられよ」と高聲に名乘を上げた。矢は尊氏の近くに立つた。これを見て尊氏も、「我れの軍を起したのは、君を傾け奉らうと思つたからではない。たゞ義貞に會つて憤りを散じたいと思つた爲めであつた。彼れと一人同志の決戰は勿論我れの悅びとする所だ。其門を開け、打つて出よう」と云つたのを、上杉伊豆守が思ひもよらぬ事だと押しとどめた。其處へ土岐彈正少弼頼遠が五條大宮の敵を追ひ散らして、鬨の聲を上げたので、今まで追ひ立てられてゐた足利勢が、彼方此方から馳せ集つて來て、義貞の軍勢を取り圍んでしまつた。義貞は今日を最後と決心して、大敵の中へ攻め入り、四方八方に追ひ散らして三條河原へ出たが、身方の軍勢とはひどく懸け離れてしまつた。

又名和伯耆守長年は二百餘騎で大宮に引き返して戰ひ、自ら後の門を閉めて退路を斷ち、一人も殘らず討死をしてしまつた。そこで三十萬騎の敵軍はわづかに生き殘つてゐる義貞の軍勢を眞中に取圍んでしまつた。義貞も覺悟を定めた樣子で一足も退かず、討死をしようとした所へ、天皇から賜はつた御衣を切つて笠符につけた兵達が、あちらこちらから馳せつけてきて、戰ひ疲れた敵の大軍を息もつかせず追ひ立てたので、さすがの敵も堪へかねて、京都の中へ引き退いた爲め、義貞、義助らは危ふい命を助かり、坂本へ引き返してきた。

江州軍の事

合圖の違ひから官軍が又しても京都の合戰に敗れたので、兵數がひどく減つた上、奈良の僧侶達にまで裏切られてしまつた。剩へ北國路は足利尾張守高經が塞ぎ、近江國には小笠原信濃守が陣を取つて往き來を止めた爲め、官軍は飢に苦しむ事となつた。そこで先づ江州の敵を退治しようと、比叡山の僧侶達が替る替る攻め立てたが、何時も小笠原の軍勢に打ち破られてしまつた。其處へ佐々木佐渡判官道譽が僞つて降參をなし、近江の守護に任命して下さるならば、これを平げて宮軍の力といたしませうと申し出たのを、天皇も義貞も僞りとは知らずお許しになつた所、道譽はやがて近江へ渡り、其國を支配して坂本を遠攻めにした爲め、天皇は脇屋右衞門佐を大將に二千餘騎を江州へ差向けられたが、散々に攻め破られ、此日も亦官軍はわづかの軍勢となつて坂本へ逃げ歸つてきた。

山門より還幸の事

尊氏はこつそりと天皇に使を出して、自分は全く君に向つて謀叛を企てたのではなく、唯だ義

貞の一類を亡ぼして、後々の讒臣のこらしめにしようと思つたゞけである。私の罪を哀れに思召し、京都へ御還幸の上、再び御即位遊ばされるやうにと、傳教大師勸請の起請文を副へて申し上げた。天皇はこれを御覽になつて、告文のある上はまさか僞りではなからうと、側近の元老や重臣にも御相談遊ばされず、近く還幸しようと、尊氏に云つてやられた。

さて還幸の儀も祕かに定まり、天皇は其時を待つてゐられた。義貞は其事を少しも知らずにゐたが、洞院左衞門督實世卿の所から、

「唯今天皇は京都へ還幸遊ばされると、お供の人を集めてゐられます。御存知ですか。」

と云つて來たので、義貞はそんな事はあるまい、何かの聞き違ひであらうと、つゆ驚く樣子もなかつた。然るに堀口美濃守貞滿は御樣子を見て參りませうと、皇居へ馳せつけた所、今にも還幸せられる御樣子であつたから、貞滿は御前へ出て御乘物の長柄に取りつき、涙を流してお諫め申し上げたので、天皇を始め奉りお供の人々も皆な其道理に從ひ、忠義に感じて深くうなだれた。

儲君を立て義貞に著けらるる事附鬼切日吉へ進ぜらるる事

暫くたつて義貞は父子兄弟三人で、三千餘騎の兵をひきつれて參內した。天皇は義貞義助をお

側近く召され、御涙を流されて、

「天運に惠まれず、時機の到來しない中に、兵は疲れ勢は衰へたので、假りに尊氏と和睦して、時の來るのを待たうと、還幸に同意したまでのことである。此事は前以て內々知らせたいと思つたが、餘りに擴がつては却つて困る事があらうと、わざと默つてゐたのである。越前國には身方の者がゐる故、先づ彼處に下つて北國を打ち從へ、再び大軍を起して天下の守りとなつてもらひたい。然し朕が京都へ行けば、お前は朝敵の名を被るであらうから、皇太子に天子の位を讓り、お前につけて北國へ下さう。天下の事は大小となくお前が取計つて、朕に代つて此君を輔佐してもらひたい。お前が早く謀をめぐらして、朕を救出しに來るのを待つてゐよう。」

と仰せられたので、人々は皆首を垂れて鎧の袖をぬらした。九日は受禪の儀や還幸の準備に暮れ、夜更けてから新田左中將は、こつそりと日吉の大宮權現に參詣し、「願はくば再び大軍を起して朝敵を亡ぼす力を與へ給へ、又不幸にして命ある中に望を達せられぬならば、子孫の中に必ず大軍を起す者が出來ますやうに」と、眞心をこめて祈り、代々家に傳はつてゐる重寶、鬼切といふ太刀を奉納した。

義貞北國落ちの事

明くれば十月十日の朝十時頃、天皇は輦輿に乘られて、今路を西へと還幸遊ばされ、皇太子は良馬に召されて戸津を北へと行啓あらせられた。還幸のお供をして京都へ行く人々には、吉田內大臣定房、萬里小路大納言宣房、御子左中納言爲定、侍從中納言公明、坊門宰相清忠らをはじめ、武家では大館左馬頭氏明、江田兵部少輔行義、宇都宮治部大輔公綱ら七百餘騎の軍勢があつた。

行啓のお供をして北國へ行つた人々は、一宮中務卿親王、洞院左衞門督實世、同少將定世を始め、武士らは新田左中將義貞、息子の越後守義顯、脇屋右衞門佐義助、同息子の式部大輔義治、堀口美濃守貞滿らに率ゐられた七千餘騎の軍勢で、案內者を先に立てゝ御馬に從つた。

此外、妙法院宮は御船にのられて遠江國へ、阿曾宮は山伏の姿になつて吉野の奧へお忍びになられ、又四條中納言隆資卿は紀伊國へ下り、中院少將定平は河內國へ隱れた。

還幸供奉の人々禁殺せらるる事

法勝寺の邊まで還幸遊ばされると、左馬頭直義が五百餘騎をつれてお迎へに參り、第一に三種の神器を今上天皇の方へお渡し下さるやうにと申上げたので、天皇は前々から御用意の代品をお渡しになられた。其後は天皇を花山院へお入れ申して、四方の門を閉ぢ、警固の者を置き、降參した武士達は一人づつ大名達に預けて囚人のやうな取扱ひをした。十餘日を過ぎてから菊池肥後守は警固の隙を盜んで本國へ逃げ歸り、宇都宮は出家の姿になつて日を過し、本間孫四郎は六條河原で首を斬られた。又比叡山の僧侶道場坊助註記祐覺は山徒の張本人であるといふので、十二月二十九日に阿彌陀峯で斬られてしまつた。

以上の外、比叡山からお供をして來た公卿達は、どうやら死罪だけは許されたが、官を奪はれ任を解かれて、居ても居なくても同じやうな身の上となつてしまつた。

北國下向勢凍死の事

同月十一日、義貞は七千餘騎で鹽津海津に着いたが、それから七里半の山中を、越前の守護尾張守高經が大軍で塞いでゐるといふ噂なので、そこから道をかへて木目峠を越えた。北國の常として十月の始めから高い山々には雪が降るが、今年は例年よりも寒さが早く、風まじりに降る山

路の雪が甲冑に洒ぎ、士卒達は道を見失ひ、山路の夜に宿もなく、木の下、岩の陰に縮まつて寢た。三百騎で後陣に打つた河野、土居、得能は道を見失つて、鹽津の北で敵と戰つたが、馬も兵も凍えて自由がきかず、皆自害をして死んでしまつた。千葉介貞胤も五百餘騎で進んだが、降る雪に道を踏み迷つて敵の陣中へ出たので、一所に集り自害をしようとしたが、尾張守高經の勸めで不本意ながら降參して、高經の軍に屬する事になつた。

同月十三日、義貞は敦賀の港につくと、氣比彌三郎大夫が出迎へ、皇太子、一宮、總大將父子兄弟を先づ第一に金崎へ入れ奉り、他の軍勢は港の民家に宿所を割りあてゝ、長途の旅の疲れを休めさせた。此多數の軍勢が一所に集つてゐてはよくないと、一日そこに逗留した後、大將達を國々の城へ分け、總大將義貞は皇太子、一宮にお附き申して金崎城にとどまり、息子の越後守義顯は越後國へ、脇屋義助は瓜生の杣山城へ、それぞれにさし向けられた。

瓜生判官心變りの事附義鑑房義治を藏す事

同月十四日に義助義顯は三千餘騎で敦賀港を立つて杣山に向つた。瓜生判官保、弟の兵庫助重、彈正左衛門照の兄弟三人は、色々とこれをもてなしてゐた所へ、足利尾張守の所からこつそりと

使を出し、先帝の出されたものだと云つて、義貞の一類を追伐せよといふ綸旨を送つてきた。瓜生判官は元來深い考へのある者ではなかつた爲め、尊氏が謀んだとは知らず、忽ち心變りして杣山城へ立籠つた。所が判官の弟に義鑑房といふ禪僧があつて、義助義顯の所へきて、

「兄の保は愚者で、尊氏から送られた綸旨を誠のものと思ひ、謀叛の心を起しました。私が武士なら刺し違へて死ぬところだが、僧侶であるのは如何にも殘念でございます。けれども保だとて、事の次第がわかつたなら、必ず御身方に參らうと存じます。若し御幼稚の御子樣がたくさん御ありなら、一人をここへお留になりますやうお願ひします。私はどのやうにしてもお隱まひ申し置き、時機を得たら旗上げをして、金崎の後詰をいたしませう。」

と涙を流して云つた。義助義顯はそれを聞いて、まさか僞は云ふまいと疑ひの心も起さず、脇屋右衛門佐の息子で、今年十三歲になる、式部大輔義治と云つて、一方ならず可愛がつてゐた者を義鑑房へ預けた。

翌朝義助義顯は軍勢を揃へてみた所、何時の間に逃げて行つたものか、僅かに二百五十騎しかなかつたので、これでは越後國まで行く事は出來ぬ、金崎へ引返さうと敦賀港まで歸つて來たが、此處の今庄九郎入道淨慶が近邊の野武士を集めて、其行手を遮つた。然し淨慶は、義顯の義心、

由良越前守光氏の忠義に感じて、一同を無事に通してしまつた。

十六騎の勢金崎に入る事

淨慶との問答がむづかしくなつたのを聞いて、二百五十騎あつた軍勢は何處ともなく逃げ出し、僅かに十六騎となつてしまつた。金崎の樣子を問ふと、諸國の軍勢が二三萬騎で城を取り圍んでゐるといふ事であつたから、どうしようと說がまち〳〵になつたが、栗生左衛門の說に從つて、翌朝の夜明けに十六騎の人々が敵陣の後から、「二萬餘騎にて後詰を仕る、城中の人々お出向ひなされよ。」と口々に叫び、鬨の聲を上げて大軍の中へ攻め込んだ爲め、金崎を取りまいてゐた寄手三萬餘騎は、あわて騷いで攻口をさつと引き退いた。城中の軍勢はこれにつけこんで打つて出たので、さすがの大軍達も大あわてにあわて、十方へ逃げ散つてしまつた。

金崎船遊びの事附白魚船に入る事

かく城を取り圍んでゐた敵は、一時の謀に破れて退散し、今は近邊に一人の敵もなくなつたので、城中の人々は此上もなく悅び合つた。

十月二十日の明方、江山の雪が晴上つたので、旅中の御心を慰め奉る爲め、港々の船を集めて浮べ、雪中の景に興じられた。皇太子と一宮とは御琵琶、洞院左衛門實世卿は琴、義貞は横笛、義助は箏の笛、維賴は打物をそれぞれに奏でられた爲め、心ない魚までも感動して、跳ね上つて御舟の中へ飛び込んで來た。これを見て實世卿は「支那にも例があることで、これは戰に勝つといふめでたい前兆だ」と、早速料理して皇太子に參らせた。

金崎城攻むる事附野中八郎が事

杣山から引き返した十六騎の小勢に、金崎の寄手の大軍が負けた事が知れたので、尊氏は大いに怒つて再び大軍をさし向けた。その軍勢は六萬餘騎で、海陸から城の四方を取り圍んだが、金崎城は三方が海、一方が深い谷をへだてた山となつてゐるので、容易に近づく事が出來なかつた。

小笠原信濃守はこれをみて、選り拔きの兵士八百人を選び、東の山の麓から楯をかついで攻め上らしめた。城中の兵はこれをみて三百餘人がこの門を開いて一度に打つていで、互ひに近づいて一足も退かず烈しく攻め戰つたが、小笠原の兵は遂に攻め立てられて退いて行つた。そこで今度

は船で攻めようと、小船百餘艘で崖の下に漕ぎつけ、出塀に取り着かうとした所を、城兵二百餘人が拔き連れて攻めて出た爲め、寄手は眞逆様に落され、先を爭つて船に逃げこんでしまつた。

中村六郎といふ者は、重傷をうけて船に乘りおくれ、磯に立つて船を招いたが、助けようとする者がなかつた。これをみて播磨國の住人野中八郎貞國は、船を漕ぎもどして中村を助けようと云つたが、誰れも贊成する者がなかつたので、貞國は大いに怒り、艪を奪つて自ら漕ぎ戻し、唯だ一人で船から飛び下り、中村の方へ歩みよつてきた。城兵はこれをみて、十二三人で中村の後から走りかかつたが、貞國は少しも驚かず、長刀の石づきで向ふ敵の一人を薙ぎ倒し、其首を取つて鋒にさし中村を肩へかつぎ、落着いて船に乘つたので、敵も身方も其働きを譽めぬ者はなかつた。

註

(一)熊野にある八箇の莊の役人。
(二)山王二十社の中の八王子權現。
(三)早尾は不動明王、大行事は毘沙門天を祀る。
(四)神佛を分祀する事。

(五)皇位を讓られて受ける事。
(六)腰の邊で舞く手與。
(七)鼓太鼓の類。

卷第十八

先帝吉野へ潛幸の事

天皇は尊氏の僞りの詞を御信頼になり、山門から還幸あらせられたところ、長くも花山院へ押籠め奉つて、一人だにお側近くに仕へるものはなかつた。天皇は國中の樣子を尋ね聞かれる御手段もなくて、世の中をいと頼りなく思召され、花山天皇の例に習つて出家しようかと思ひ煩つてゐられた處へ、刑部大輔景繁が唯だ一人で伺候し、ひそかに諸國の官軍の樣子を申上げた上、近日中、夜に紛れて大和の方へ臨幸遊ばされ、吉野十津川の邊に皇居を定めて、諸國へ綸旨を御下しになられるやうに御すゝめ申上げた。天皇はこれを聞かれて、

「明夜必ず寮(一)の御馬を用意して、東の小門の邊で待つて居れ。」

と仰せいだされた。

さて合圖の時が來ると、天皇は築地の崩れから女房の姿で忍びいでられたので、景繁は用意してゐた寮の御馬にお乘せ申し、三種の神器は自らかついで、夜の間に大和路へかゝり、梨間宿(なしまのしゅく)まで逃げのびられたが、白雲この有樣で奈良を通られては怪しむ人もあらうと、粗末な張輿(二)にお乘せかへ申し上げた。心ばかりは急いでも足は進まず、其日の夕方に內山までお着きになられたが、此處らまでは敵が追ひかけてくるかも知れない、今夜中に何とかして吉野までお連れ申したいと又寮の御馬にお乘せ申したが、八月二十八日の夜の事故、道が暗くて進めさうにもなかつた。所が俄に春日山の上から金峯山の頂へ光物が飛び渡るらしく、松明のやうな光りが夜通し天地を照らしたので、行く道は自ら明かに見え、まもなく夜明けに大和の國の賀名生(かなふ)といふ所までお逃れになられた。此處には皇居に定めるやうな所もなかつたので、吉野の僧侶達を身方に誘ひ入れようと、景繁が吉野へ行つて吉水法印に此事を申し入れると、全山の僧侶を誘ひ集め、藏王堂に會合して相談した結果、御身方申し上げることに決し、三百餘人の僧侶達が甲冑をつけて御迎へに參つた。此外、楠帶刀正行、和田次郎らを始め、諸國の人々が引き切りもなく馳せ集つた。此雲霞の如き大軍に前後を衛らせつゝ、天皇はやがて吉野へ臨幸遊ばされた。

高野根來と不和の事

後醍醐天皇が花山院を忍び出られて、吉野へひそかに行幸せられた爲め、近國の軍勢達は勿論の事、諸寺諸社の僧侶神官までも皆天皇の御德を慕ひ、或は軍用金を作り、或は御禱をしてゐたのに、根來の僧侶達だけは一人も吉野へやつて來なかつた。之は必ずしも武家に身方をして朝廷に背き奉るといふわけではなく、後醍醐天皇が高野山を崇敬せられ、諸所の領地を寄進して、色々の御立願を遊ばされたといふ事を聞き、片意地な心を起しただけの事である。何故かといふに、根來と高野とは前々より仲違ひをして居り、久しきに亙つて葛藤が續けられて來たからである。

瓜生旗を擧ぐる事

互理新左衞門といふ者が、楠川の島崎から金崎へ游ぎつき、吉野の天皇から下された綸旨をとどけてきた。城中の人々は驚いて開いてみると、天皇はひそかに吉野へ臨幸遊ばされ、近國の武士達が多く馳せ集つたから、やがて京都を攻められるといふ事が書いてあつた。城中の兵士達は始めて此事を知つてひどく悅び合つた。

瓜生判官保は足利尾張守高經について金崎の攻め口にゐたが、弟の兵庫助重、彈正左衞門照、義鑑房の三人は杣山城にゐて、脇屋右衞門佐の息子式部大輔義治を大將に兵を擧げようと計畫してゐた。兄の判官は之れをきいて、宇都宮美濃將監と天野民部大輔とを誘ひ、共に杣山城に歸つてきて、十一月八日に義治を大將に押し立てゝ兵を擧げた。所があちらこちらから軍勢が集つて來て、まもなく千餘騎となつた。

越後守師泰はかくと聞いて、能登、加賀、越中、三箇國の軍勢六千餘騎を差し向けたが、瓜生の謀にかゝり、一戰で討ち破られてしまつた。或は討死をし、或は生捕られ、又やつとの事で逃げのびた者も、甲冑を脫ぎ捨て、弓矢を失はぬ者はなかつた。

越前府の軍附金崎後攻の事

如何にもして杣山の軍勢が國中に擴がるのを防がねばならぬと、尾張守高經は三千餘騎をひきつれて越前の府へ歸つて行つた。瓜生はこれを聞いて、直ぐさま三千餘騎で押寄せ、一日一夜攻め戰つて、高經の立籠る新善光寺城を攻め落してしまつた。それ以來義治の勢は追々盛んになつて、諸國の僧侶、地頭らが集つて來たけれども、義治は皇太子を始め一族の人々の立籠つてゐる金崎

城の苦しみを思ひやると、ぢつとしてゐることが出來なかつた。そこで金崎の後詰をしようと、兵を集めて、正月十一日に里見伊賀守を大將として敦賀に向つた。所が敵は敦賀から二十餘町程東に當る要害の土地へ、今川駿河守を大將に二萬餘騎を差向けて防禦の陣を敷いてゐた。夜が明けると、官軍は第一に宇都宮の紀清兩黨、第二には瓜生、天野、齋藤、小野寺らの軍勢が、次々に駿河守の陣へ攻め込んだが、敵の新手の爲め攻め立てられて退却した。里見伊賀守は僅かの軍勢で踏みとどまり、敵の大軍に取り圍まれて、瓜生、義鑑房の二人と共に、三人一所に討死をしてしまつた。

瓜生判官老母が事

さて敗軍の兵士達は杣山へ歸り、負傷者や死人の數を調べた所、里見伊賀守、瓜生兄弟、甥の七郎の外、討死をした者が五十三人、傷を受けた者が五百餘人もあつた。子は父を失ひ、弟は兄に死におくれて、泣き悲しむ聲が家々に充ち滿ちてゐたが、瓜生判官の老母尼公は一向悲しむ樣子もなく、大將義治の前に進み、

「此度敦賀へ向つた者共が、不面目にも里見殿を討死させました。さぞかし殘念に思はれる事でせう、御心中御察し申し上げます。然しこれを見ながら、判官兄弟が皆無事に歸つて參りましたならば、尙一層はかなくもあり、お慰め申す方法もございませんでしたが、判官の伯父甥三人の者が里見殿の御供をして殘りの弟三人が大將の御爲に生き殘りました事は、歎きの中の悅びと存じます。元々上の御爲に此一大事を思ひ立ちました以上、百千の甥子達が討たれましても、歎き悲しむことはございません。」

と涙を流し流し酌を取つて、一獻お進め申したので、元氣を失つてゐた軍勢達も、別れを歎いてゐた人々も、愁へを忘れて勇氣を振ひ起した。

金崎城落つる事

金崎城では瓜生の後詰を命がけで待つてゐたが、判官は戰ひ敗れ、其軍勢は討たれてしまつたと聞いて、皆心細い思ひをしてゐた。一日一日と兵糧は乏しくなつて行くので、馬を毎日二匹づつ刺殺して朝夕の食に當てゝゐた。そこで人々の勸めに從ひ、新田義貞、脇屋義助、洞院實世は河島維頼を案內者として、三月五日の夜半こつそり城を拔け出して、杣山城へ逃げて行つた。

金崎ではもう馬も皆食ひつくし、十日程斷食をしてゐたので、軍勢達は今はもう手足を動かす

事も出來なくなつてしまつた。寄手の軍勢はこれを見破つて、三月六日の朝六時頃大手搦手の十萬餘騎が烈しく攻め立てゝきたが、城中の兵は太刀を使ひ弓を引く力もない有樣だつたので、寄手は二の門まで攻め込んできた。新田越後守義顯は一宮の御前に進み、

「合戰の樣子では、もはやこれまでと思はれます。我々は武士として名を惜む家に生まれました故、快く自害を致さうと思ひます。上樣はたとへ敵の中へおいでになられても、まさか御失ひ申す事はございますまいから、このまゝ此處にいらせられるのがよいと思ひます。」

と申上げた所、一宮は何時よりも心地よげに笑はれて、

「天皇が京都へ還幸遊ばされた時、我を元首の將とし、お前を股肱の臣とせられた。股肱がなくては元首は保つ事が出來ない。それ故自害をしようと思ふが、一體自害はどうすればよいのか、敎へてくれ。」

と仰せられたので、義顯は感涙を押へ、

「このやうにするものでございます。」

と云ひ終るや否や、刀を拔いて逆手に持ち直し、左の脇に突立て、右のあばら骨二三枚へかけて掻き切り、刀を拔いて宮の御前に置き、俯伏してしまつた。一宮はやがて其刀を取上げて御覽に

なると、柄口にひどく血がついてゐるゝしてゐたので、御衣の袖で刀の柄をきりゝと卷かれ、雪のやうに白い御膚を出し、御胸の邊に突立てゝ義顯の枕の上へうつぶしになられた。これを見て重立つた人々や庭上の兵共も皆思ひゝに腹を切り、刺違へて、重なり合つて死んでしまつた。

氣比大宮司太郎は皇太子を小舟に御乘せ申し、綱を自分の褌に結びつけ、海上三十餘町を泳いで蕪木浦へお着け申し、粗末な漁夫の家にお預け申して、

「此方はやがて日本國の主とならせられる御方である。何とかして杣山城へお連れ申してくれ。」

と云ひきかせて置いて、金崎へ引き返し、自ら自分の首を斬り落してしまつた。

土岐阿波守、栗生左衞門、矢島七郎の三人は船田長門守と共に海岸の岩穴にかくれてゐて不思議な命を助かり、又由良、長濱を始め生き殘りの城兵五十餘人は、三の門から大軍の中へ攻め出して、皆それぞれに討死をしてしまつた。

春宮還御の事附一宮御息所の事

皇太子を蕪木浦から御連れ申して來た足利尾張守は、去る夜金崎で討死をした新田一族の首を

實檢したところ、死んだのは越後守義顯、里見大炊頭義氏の二人だけで、義貞や義助のそれが見出されなかつたので、皇太子の御前に參つて、

「義貞、義助二人の死骸が見つかりませぬが、如何いたしたのでございませう。」

とお尋ね申した所、皇太子は、

「義貞、義助の二人は、昨日の夕方確かに自害したが、それを家來達が役所の内で火葬にすると云つてゐたやうだ。」

と仰せられたので、「さては死骸のないのも無理はない」と、詳しく探しもせず、又杣山には大した敵もゐないから、其中に降參するであらうと、そのまゝにして置いた。

やがて新田越後守義顯並に一族の者三人、其他重立つた人々の首七つを持たし、皇太子を張輿にお乘せ申して、京都へ送り奉つた。京都へお還りになると、まもなく牢の御所を造つて皇太子を押籠め奉り、一宮の御首は禪林寺の夢窓國師の所へ送られ、御喪禮の儀を執り行はれた。

さて一宮の御息所の御歎きは、申すも畏き程限りないものであつた。いよ〳〵夢窓國師が喪禮を行はれると聞かれて、餘りの悲しさに御車に助けのせられ、禪林寺の邊までお出ましになると、今しも式が行はれるらしく、夕の空に立上る煙が松吹く風に心細く靡いてゐた。死別の悲しさは

誰れしも同じことであるが、宮のやうに尊い御身を御自ら劍に害はれた御事は誠に例のない悲しみ故、御最後の御有樣を想像し奉つたりすると、一層哀れが深くなつて、今こゝで御命を終つて、同じ墓地の露と消えたい御心地がせられて、御息所は何時々々までもお歸りになられず、悲しみに伏し沈んでゐられた。其御心の中は誠に御氣の毒に堪へない。

行きて舊居の跡を訪はれると、故宮にかゝる月影が御心を傷ましめ、歸つて淋しき御閨に入られると、後宮を吹く風の音に御夢が破られる。見るもの聞くもの、御歎きの種ならぬはなく、一日一日と悲しみが深まつて行つたので、まもなく御息所は御病氣になられ、宮の御中陰さへ終らない中に、お亡くなりになられた。

比叡山開闢の事

金崎城が攻め落されてからは、天下は悉く武家の手に歸し、尊氏の命に隨はない者はなくなつた。諸所方々に官軍の城がある間は、比叡山の僧侶が又何を仕でかさないとも限らぬと、其機緣をとる爲め色々の好遇をしたが、天下がもはや武家の威光に歸した今となつては、比叡山を三井寺の末寺にしようか、或は其土地を取上げて僧侶を追ひ出し、其跡を軍勢に與へることにしようか

などと、高、上杉の人々が尊氏の前で相談をしてゐた所へ、北小路の玄慧法印が來合せたので、早速呼び入れて、「有つて無益のものは比叡山、無い方がましなのは山法師であるが、一體これはどうすればよからうか」と尋ねた所、法印は「以ての外の事だ」と、比叡山開創以來の歴史を語つて、其功德の大きなこと、なくてはならぬ寺であることを、言葉をつくして說きさとしたので、尊氏、直義を始め、高、上杉の人々も、そんなわけでは比叡山を亡ぼすことが出來ないと、却つてこれを信仰するやうになつた。

註

(一)馬寮に飼育する馬。
(二)疊表で張つた奥。
(三)人の死後の四十九日間をいふ。

卷第十九

光嚴院殿重祚の御事

建武三年六月十日に光嚴院太上天皇が重祚せられた。

將軍尊氏に宣旨を下されたのも、亦東寺へ潛幸遊ばされて、武家に威光を加へられたのも、皆な此君の御手柄であるから、其御恩報じに、多少異議があつたにも拘はらず、尊氏が一途に御計らひ申し上げたのであつた。

本朝の將軍補任兄弟其の例なき事

同年十月三日に年號を延元と改め、其十一月五日の任官式に、足利宰相尊氏は上席十一人の人

を越えて正三位に上り、大納言に任じ、征夷將軍の職に補された。弟の左馬頭直義は五人を越えて四品の位となり、宰相に任ぜられ、日本の副將軍となつた。兄弟が同時に揃つて征夷將軍の職についた事は我國ではまだ前例がないと、其家來達は皆おごりたかぶるやうになつた。

新田義貞越前府の城を落す事

新田義貞、脇屋義助の二人は金崎城沒落の後、杣山の麓にある爪生の屋敷にゐたが、國々へこつそりと使を出して軍勢を集めた所、あちらこちらで時機を待つてゐた兵達がしのび〳〵に馳せ集つて來て、彼れ是れ三千餘騎となつた。これをきいて尊氏は足利尾張守高經、弟の伊豫守の二人を大將として、越前の府へ大軍を下した。府は大軍であり、杣山は要害である爲め、かうして五六ヶ月を經ても、お互ひに城へも府へも近づき得ず、兩陣の境へ兵を出し合つて小競合をするに過ぎなかつた。其處へ加賀國の敷地伊豆守、山岸新左衛門、上木平九郎らが畑六郎左衛門尉時能を身方に誘つて、足利方の津葉五郎が立籠つてゐる大聖寺城を攻め落し、又平泉寺の僧侶達も大部分官軍に身方をして、三峯の僧侶から杣山へ、大將を一人賜りたいと云つて來たので、脇屋義助に五百餘騎をつけて差し遣はした。尾張守高經は府中に立籠つて、勝敗を決するやうな合戰もなく

て年が新まり、やがて二月も中旬となつて、寒さが段々衰へてきた。そこで脇屋義助は何處か要害の土地はなからうかと、僅に百五十騎で鯖江の宿へ打つて出た。これを知つて尾張守の副將細川出羽守は五百餘騎を率ゐて、鯖江の宿を取り卷いた。脇屋は前後を敵に圍まれてこれでは逃げ出す事が出來ぬと、覺悟をきめて一軍心を一つにして敵に當り、七八度も遭つては開き、遭つては離れして、攻め立てた爲め、細川の五百餘騎はわづかの軍勢に攻め立てられて退却した。脇屋勢は附近の民家二十餘箇所に火をかけて身方に合戰を知らしたので、四方から馳せ集つてきた身方の軍勢は、またゝく間に敵を攻め破り、追ひ散らし、逃げるを追ひかけ追ひかけ、前後左右に入り亂れて、半時程の間命の限り戰ひ合つた。やがて敵は府中をさして引返して行つたが、義貞は隙間もたく追ひすがつて、猶豫を與へず攻め立てた爲め、敵は府の城へ入る事も出來ず、四方へ逃げ散つてしまつた。

金崎の東宮並將軍宮御隱れの事

義貞、義助が杣山に兵を擧げ、尾張守は府中を逃げ出し、城は陷つたといふ事を聞いて、直義は烈火の如く怒り、

「これは皇太子が彼等を助ける爲め、金崎で腹を切つたと申されたのを誠と思つた爲めだ。此宮をこのまゝにして置いては、如何なる御企てをなさるかも知れぬ、鴆毒を差上げて御殺し申せ。」と命令したので、御兄弟の將軍宮と一所に押籠められてゐた皇太子の所へ、お藥だと云つて鴆毒を持參した。皇太子はそれを毒と知られつつ、とても遁れられる命ではないと、將軍宮と共々に七日の間それをお飲みになられた。皇太子は其翌日から御病氣になられ、四月十三日の夕方御心閑かにおかくれ遊ばされた。將軍宮は二十日程の後黄疸といふ御病氣にかかり、これも遂におなくなりになつた。

諸國の宮方蜂起の事

先帝が三種神器を奉じて吉野へ潛幸せられ、義貞が數萬騎をひきつれて越前の國へ打つて出たときいて、先に比叡山から降參にでた大館左馬助氏明は伊豫國へ逃げ、土居、得能の息子らに對面して四國を討ち隨へようとし、江田兵部大輔行義も丹波國へ出て、足立、本庄らと高山寺に立籠り、金谷治部大輔經氏は播磨の東條から打つて出て、丹生の山陰に城を造つて山陰の中道を塞いだ。又遠江井介は妙法院宮を押し立てゝ奥の山に立籠り、宇都宮治部大輔入道は紀清兩黨の

五百餘騎をひきつれて吉野へ馳せ參じた。

相模次郎時行敕免の事

北條高時の二男相模次郎時行は、一家の滅亡後、天地の間に身を置く所もなく、此處彼處と隱れ歩いてゐたが、こつそりと吉野へ使を出して、

「父が亡ぼされたのは、自ら招いた罪の報ひですから、自分は決して君をお恨み申すやうなことはございません。たゞ尊氏の行ひは飽くまでも憎んで居りますから、天皇の御許しを得て朝敵誅罰の計略を運らせよ、といふ綸旨を賜はりましたなれば、どこまでも官軍を助けて忠義を竭したいと思ひます。」と申し上げた。天皇は詳しくお聞きになつて、誠にもつともの事だと、恩免の綸旨をお下しになられた。

奥州國司顯家卿上洛並新田德壽丸上洛の事

奥州の國司北畠源中納言顯家卿は、天皇が吉野へ潛幸せられ、義貞が北國へ打つて出た事を聞き、軍勢を集めて鎌倉を攻め落さうと、八月十九日に十萬餘騎で白川の關を出發した。鎌倉の管領

足利左馬頭義詮は此事を知つて、上杉民部大輔、細川阿波守、高大和守に八萬餘騎を添へ、利根河でこれを防がせた。兩軍は各〻東西の岸に臨み、水の減ずるのを待つてゐたが、顯家卿は長井齋藤別當實永の意見に從ひ、河を渡つて攻め入り、忽ち敵を追ひ散らした。足利勢八萬騎は四方八方に驅け散らされて、鎌倉へ引返して行つた。

顯家卿は武藏の府に六日間逗留して鎌倉の樣子をさぐつてゐた。其處へ宇都宮左少將公綱が千餘騎で身方に加はり、相模次郎時行も吉野の敕免を蒙り、伊豆國に兵を擧げ、五千餘騎で足柄箱根に陣を取つた。又新田左中將義貞の次男德壽丸も上野の國で兵を擧げ、二萬餘騎をひきつれて武藏の國へ押しよせ、入間河に到着した。

鎌倉では上杉民部大輔、同中務大輔、志和三郎、桃井播磨守、高大和守らの重立つた人々が、大將足利左馬頭義詮の前で、如何にすべきかの相談をつづけてゐた。

奥州勢の跡を追ひて道々合戰の事

大將左馬頭は其時十一歲であつたが、此相談をきいて一同を勵まし、討死の決心で鎌倉に立て籠つた。其軍勢は一萬餘騎に過ぎなかつた。これをきいた顯家卿、新田德壽丸、相模次郎時行、宇

都宮の紀清兩黨らの軍勢併せて十萬餘騎は、互に牒し合せ、十二月二十八日鎌倉へ攻め寄せてこれを打ち破つた。其後東國は皆官軍に身方をしたので、顯家卿以下の人々は正月八日に鎌倉を出發して上京した。其軍勢五十萬騎は途々の民家で掠奪し、神社佛閣を燒き拂ひ、途中の軍勢をも加へて進んだ。

さて鎌倉の合戰に負けて、方々へ逃げ隱れてゐた上杉、桃井、高の人々は、武藏相模の軍勢を集めた所、官軍につかなかつた者が三萬騎ばかり馳せ集つてきた。それに尙諸所方々の軍勢を加へると、ざつと五萬餘騎になつたので、顯家卿の勢六十萬騎の後を追つて上京した。

青野原軍の事

奥州勢は既に垂井、赤坂邊に着いたが、後から追ひかけてくる鎌倉の軍勢が近づいたときき、先づこれから攻めようと、三里引返して美濃尾張の兩國に陣を取つた。後詰の軍勢は八萬騎を五手に分け、一番には小笠原信濃守、芳賀清兵衞入道禪可、二番には高大和守、三番には今川五郎入道、三浦新介と順々に攻め込んだが、皆打ち破られて引き退いて來た。四番には上杉民部大輔と同宮內少輔とが、一萬餘騎をひきつれて青野原へ打つて出た。これには新田德壽丸と宇都宮の紀清兩黨

との三萬餘騎が立ち向ひ、互に一歩も退かず、命を的に戰ひ合つたが、上杉は遂に負けて逃げて行つた。五番には桃井播磨守直常と土岐彈正少弼頼遠とが、わざと選りすぐつた鋭兵一千餘騎をひきつれて青野原に打つて出た。これには奥州の國司顯家卿と副將軍の春日少將顯信卿とが六萬餘騎をひきゐて渡り合つた。土岐、桃井らは大軍をおそれず、一手となつてかけ入り、一騎となるまで引くな引くなと勵まして戰ひ合つたが、土岐は重傷を受け、桃井は七十六騎となり、戰ひ疲れて引き退いた。

京都では此事を聞いて驚き、近江美濃の邊に馳せ向つて決戰しようと、高越後守師泰、同播磨守師冬、細川刑部大輔頼春、佐々木大夫判官氏頼、佐々木佐渡判官入道道譽、同息子の近江守秀綱を始め、諸國の大名五十三人、其軍勢都合一萬騎は、二月四日に京都を出發して、六日の朝早く近江と美濃の境にある黒地川に着き、ここに陣をとつて待つてゐた。

顯家卿は北國の義貞勢と一手にもならず、黒地をも攻め破らず、俄に士卒を引いて伊勢から吉野へ廻らうと、奈良へ着いて暫く休息の後、部下の意見に從つて京都へ攻め上るべき準備をしてゐた。此事が京都へわかつたので、尊氏は大いに驚き、急いで奈良へ討手を下し、顯家卿を遮り留めよと、相談の上桃井兄弟を選び、これに討手の大將を云ひつけた。桃井直信、同直常兄弟は、其

日出發して、奈良に向つた。顯家卿は般若坂に第一陣を張つて防いたが、桃井のよりぬきの兵七百餘騎が身を捨てゝ切つて入り、顯家卿の兵も亦た力のかぎり防いだけれど、長旅に疲れてゐた事とて一陣二陣は忽ち打ち破られ、數萬騎の兵は散り散りとなり、顯家卿も所在不明になつたといふ事で、桃井兄弟は無事に京都へ歸つて來た。

かうした次第で、桃井兄弟は誰れよりも重い恩賞にあづかれる事と思ひ外、何の事もなかつたので、心中ひそかに不平を懷いてゐた。其處へ顯家卿の弟春日少將顯信卿が、奈良を逃げ出した敗軍の兵を集めて和泉の境に打つていで、やがて八幡山に陣を取つて京都を窺つた。京都では又大騒ぎをして、討手の大將を差向けようとしたが、進んで出る者がなかつた爲め、師直は自ら一家を擧げて打ち向つた。これに刺戟せられて、諸軍勢は先を爭つて馳せ加はり、桃井兄弟も私心を捨て、公義に從つて出征した。師直は大軍を率ゐて八幡山を取り圍み、四方からこれを攻め立てた。一日一夜の合戰に桃井兄弟は討死した。師直祕かに思へらく、和泉の境こそは河内に近く、楠和田らの合力も容易だから、先づ之を破らねばならぬと、八幡は遠卷きにして置いて、自らは天王寺方面へ出動した。天王寺には顯家卿が陣を取つて居り、命を捨てゝ防ぎ戰つたが、疲れてゐる上小勢の爲め、遂に討ち破られて散り散りとなつてしまつた、顯家卿は大敵の圍みを破つて吉野

へ出ようと、僅かに二十餘騎で進んだが、五月二十二日に和泉の境に近い安倍野で討死をしてしまはれた。

註

(一)烏といふ毒鳥の毛を酒にひたして作る毒藥。

(二)直義が鎌倉へ申し下し參らせた後醍醐天皇の第七の宮成良親王。

卷第二十

黒丸城初度軍の事附足羽度々軍の事

新田左中將義貞朝臣は、去る二月初めに越前府中の合戰に打勝ち、次いで國中の敵城七十餘箇を瞬く間に攻め落して、其勢ひが又强大となつた。けれども黒丸城はまだ落ちず、足利尾張守高經がそこに據つてゐるので、これを殘して上洛するのは殘念だと、義貞は五月二日、自ら六千餘騎を率ゐて國府(一)を出發した。黒丸城の手前にある足羽城を先づ攻めようと、波羅寄、安居、河合、春近、江守の五箇所へ五千餘騎の兵が差向けられた。

一番には義貞の小舅、一條少將行實が五百餘騎を率ゐて江守より押寄せたが、黒龍明神の前で敵に出逢ひ、戰ひ利あらずして本陣へ引返した。二番には船田長門守政經が五百餘騎で安居渡から

押寄せて、兵士が河を渡らうとしてゐる時、細川出羽守の二百餘騎が河向ひに現はれ、高岸の上から散々に射立てたので、漲る浪に人馬は溺れ、ほふ〳〵の體でこれも引返した。三番には細谷右馬助が、千餘騎を率ゐて河合莊から押寄せ、北の端の勝虎城を取卷いて一氣に攻め落さうと堀を越え、塀につかまつてゐる處へ、鹿草兵庫助の三百餘騎が後攻にまはり、側目も振らずに攻め立てたので、細谷の軍は腹背共に敵に追ひ立てられて本陣へ引返した。かうして足羽の合戰は、もはや寄手の敗北となつた。

越後勢越前に越ゆる事

越後國には新田の一族が蔓つてゐるので、義貞の上洛と聞いて、それに合體するつもりで、大井田彈正少弼、同式部大輔、中條入道、鳥山左京亮、風間信濃守、禰津掃部助、太田瀧口らは總勢二萬餘騎で、七月三日越後の府を立ち、將に越中國に入らうとした時、其國の守護普門藏人俊清が國境に出てこれを牽制したが、小勢の大半を討たれて松倉城に引籠つた。

越後勢はそれに頓着なく、直ちに加賀國へ向つたので、富樫介は五百餘騎を率ゐて、安宅、篠原のあたりで出迎へたが、敵に對抗するほどの軍勢でもないので、二百騎餘り討たれて、富樫の

軍は那多城へ引籠つた。

越後の勢は兩國で二度の合戰に打勝ち、北國の敵恐るゝに足らずと、其儘越前へ打つて出るつもりであつたが、そこから京都までは、多年の兵亂で、國衰へ、民疲れ、どこでも兵糧が得られさうもないので、暫く加賀國に留つて兵粮を用意しようと、今湊宿に十餘日間も留まつてゐた。

其間に滯留軍は、劔、白山以下所々の神社佛閣を犯し、或は民家に押入つて、手當り次第に資財を掠奪した。昔から靈神怒を爲せば災害岐に滿つといはれてゐるが、此軍勢の惡行の責めを、若し一人が負ふものとすれば、其總大將義貞朝臣が成功せられる事は覺束ないと、達識の人々は潛に將來を憂へてゐた。

宸筆の勅書義貞に下さるる事

幾日かの後、越後勢は越前の河合に到着し、義貞の軍勢は益ゝ强大となり、もう足羽城を陷す事は容易であると思はれた。尾張守高經は平城に三百餘騎で楯籠り、三萬餘騎の敵兵に四方を圍まれてゐる事とて、いくら守將の元氣がよくとも、籠鳥が雲を慕ひ、涸魚が水を求めるやうに、城兵はいつまでとも知らぬ命を自覺して、歎き悲しまぬものはなかつた。

愈〻來る二十一日には黒丸城を攻めようと、義貞勢が準備を進めてゐる處へ、吉野から敕使が立てられて、「義興や顯信は疲れ切つた敗軍の兵を率ゐて八幡山に楯籠つてゐるが、洛中の賊徒が全力を竭してこれを攻圍し、城中には已に食料が乏しく、兵士らは悉く疲勞してゐる。たゞ北國軍の上洛が間もないと聞いて、士卒は梅酸の渴を忍んでゐるだけだ。若し進發が延引するならば、官軍の沒落は疑ひがない。天下の安危、ただ此一擧に在り。早く其地の合戰を閣いて、京都の征戰を專らにせよ。」といふ御宸筆の敕書を下された。

義貞は敕書を拜見して、これまで源平兩家の武臣は、代々大功があつたけれど、親しく御宸筆の敕書を賜はつた例はまだない。これは全く當家の過分の名譽である。此時、君の爲めに命を輕しとしなければ、何時其時期があらうと、足羽の攻圍を止めて、先づ京都への進出を急いだ。

義貞山門に牒ず同じく返牒の事

兒島備後守高德が、義貞朝臣に向つて云ふには、「先年、京都合戰の時、官軍が比叡山を陷れられたのは、北國の敵に糧道を絶たれたからです。越前、加賀の主なる城々には軍勢を殘し、兵糧を運送させて、御身は比叡山に陣を置き、京都を攻められたなら、八幡の官軍が大に力づくこ

とと存じます。然し小勢で山門に上られては衆徒が背くかも知れません。先づ牒狀を送つて見られては如何ですか。」で、義貞が「誠に細心で、深いお考へです。では牒狀を山門へ送つて見ませう」と云ふと、豫てから心に草案を持つて居たのか、高德は筆を取つて、

正四位上行左近衛中將播磨守朝臣義貞牒二延曆寺衛一。

早く山門最眞の一諾を得て、逆臣尊氏直義以下の黨類を誅罰し、佛法王法の光榮を致さんと請ふ。

と書きつけた。山門の大衆は、何か不思議があつて早く先帝の御代になれかしと祈つてゐた處へ、此牒が到着したのであるから、一山擧つて悅び合ひ、同年七月二十三日、大講堂に會合して、直ちに義貞へ合同する由の返牒を送つた。

山門の返牒が越前に屆くと、義貞は非常に悅び、直ぐ上洛されようとしたが、如何にも高經が氣懸りなので、兵を二手に分け、義貞は三千餘騎を率ゐて越前に留り、義助は二萬餘騎を以て七月二十九日越前の府を立ち、翌日、加賀の湊に着いた。

八幡炎上の事

將軍は此事を聞いて、「脇屋義助が、山門と一味して上洛するさうだ。それは一大事だ。八幡の合戰は閣いて、急ぎ京都へ歸れ」と高武藏守に命じた。上洛の命を受けて師直は進退谷り、雨風の夜に乘じて、忍びの名人を八幡山に遣はし、神殿に火を懸けさせた。よも神殿を燒くまじと、官軍は油斷してゐたから、周章て騷いで煙の中に右往左往する。十萬餘騎の寄手は、これを見て谷々より攻め上り、既に一二の木戸にまで達した。

城中の官軍に、多田の入道の手下で、高木十郎、松山九郎と云ふ知名の兵があつた。高木は心こそ强けれ力が足らず、松山は力こそ勝れたれど心が臆病である。二人は共に同じ關を固めてゐたが、一の關を既に攻め破られ、二の關を辛うじて支へて居た。敵が逆茂木を引破つて關を切つて落さうとしても、松山は例の癖で、手足を慄ひ戰かせるだけで、敢て戰はうともしない。高木十郎は、それを見て眼を瞋らし、腰の刀に手をかけて「敵は四方を攻め圍んで、一人も殘すまいと押し寄せて來る。こゝが破られたら、主將を始め我々は一人も生き殘るまい。今こそ懸命に戰ふべき時だ。然るに、何ぞや心臆して、愚圖々々してゐる君の樣子は、實にあきれ返つて物もいへない。平生百人力だ二百人力だと威張つてゐながら、かゝる場合に懸命の合戰をしない君と、おれは刺し違へて死なう。」と言葉激しく詰め寄つた。松山は其樣子を見て、目の前の勝負が敵よりも怖

ろしく「ま、暫く待つてくれ。今は公私の一大事、決して命を惜んでゐるわけではない。先づ一戰して敵に一泡吹かせよう。」と、云ふなり早くふらふらと走り立つて、傍にあつた大石の五六人がゝりなのを輕々と提げて、敵軍の眞只中へ十四五程も、大山の崩れるが如くに投げ込んだ。數萬の寄手は此大石に打たれて、將棊倒しに谷底へ轉び落ち、自ら太刀長刀につき貫かれて命を墮し、負傷した者幾千人とも知れなかつた。かうして間もなく攻め落されさうに見えた八幡城が思ひの外に持ち堪へたので、松山の力は高木の身にあるのだと、笑はない者はなかつた。

敦賀に着いた越前勢は、八幡炎上と聞いて數日間、逗留したが、官軍はそれを待ち切れず、六月二十七日の夜半に、八幡山を退去して河內國へ歸つた。まだ聖運が熟しなかつたとでも申さうか、兩軍の合圖が相違して、敦賀と八幡との官軍が合體出來ず、共に兵を引揚げて歸つたのは、誠に薄運の極みであつた。

義貞重ねて黑丸合戰の事附平泉寺調伏の法

八幡との合圖が相違した上は、心閑かに越前の敵を退治しようと、義貞、義助は河合莊に赴いて、先づ足羽城を攻める計畫を立てた。

尾張守高經は、此事を牒知して、「討死を覺悟して城を堅める他はない」と、深田に水を入れて馬の足も立たぬやうにし、路を掘つて穽を造り、橋を外し、溝を深くして、其内に七つの城を造り構へた。

此足羽城は藤島莊と竝んで居り、城郭の半分以上は其莊の中にあるので、平泉寺の衆徒が申すには、「藤島莊は當寺と叡山とが多年爭論してゐる下地である。當莊を平泉寺に下さるならば、若い者は城に籠いて合戰をさせ、年功ある者は陀羅尼の扉を閉ぢて御祈禱をさせませう。」と云つたので、尾張守は悅んで藤島莊を平泉寺に附ける敎書を下した。衆徒は勇んで、五百餘人の若輩を藤島の城に楯籠らせ、宿老五十人に怨敵調伏の法を行はせた。

義貞夢想の事附諸葛孔明が事

それから七日目に當る夜、義貞朝臣は不思議な夢を見られた。所は足羽邊と思はれる河岸で、自分と高經とが相對して陣を張つてゐる。まだ合戰をしない中に數日を過したが、自分は俄に長さ三十丈許りの大蛇となつて地上に臥した。高經がそれを見て兵を引き上げ、楯を捨てゝ逃げること數十里にして漸く止まつた。と、夢が覺めた。

義貞は朝早く起きて、人々に此夢の事を話されると、一同は御目出度い御夢だと聲を合したが、齋藤七郎入道道猷は垣を阻てゝ之を聞き、眉を顰めて潛に云ふには、

「これは全く目出度い夢ではない。豫め凶を告げる天の聲である。と申すわけは、昔支那に吳の孫權、蜀の劉備、魏の曹操といふ三人の豪傑が居り、支那四百餘州を三つに分けて各〻其一を保つてゐた。蜀の劉備は南陽山に世を避けてゐた諸葛孔明の賢を知つて、三度まで訪れて之を丞相に任じた。孔明は臥龍と呼ばれ、其德に天下が靡きさうになつたので、魏の曹操は恐れをなし、今の中に早く蜀を討滅しなければならぬと、司馬仲達に七十萬騎を授けて蜀を攻めさせた。仲達の七十萬騎は孔明の三十萬騎と河を隔てゝ對峙し、五十餘日を經ても戰はうとはしなかつた。仲達は孔明の德が全軍を一心同體にしてゐるから、たとへ戰つても身方に利益は無い。それよりはただ陣を張つて、將卒と勞苦を共にしてゐる孔明が疲れて病ひになるのを待つた方がよいと考へたのである。數箇月經つた或夜、兩陣の間に客星が落ちて、其光りが火よりも赤かつた。仲達はそれを見て、七日の中に天下の人傑を失ふべき星である。これは孔明の死する前兆だ。魏が蜀を併せるのは遠くないと悅んだが、果して其朝から孔明は病ひに臥し、僅か七日にして死んでしまつた。蜀の副將軍らは魏兵の進擊を恐れ、孔明の死を祕して旗を進め、兵をさしまねいて魏の陣

中へ突入した。仲達は一戰をも交へず、馬に鞭つて走る事五十里、嶮岨の處で漸く留まつた。戰濟んで後、孔明が死んだ事を知り、蜀の兵は皆仲達に降つた。蜀は間もなく亡びた。此故事を以て、今の御夢を考へるに、事の樣、全く魏吳蜀三國の爭ひに似てゐる。龍の姿で水邊に臥されたのは、臥龍と云はれた孔明を表はしたものである。諸君は御夢を目出度いといはれたけれども、道獸は强ひて同意しない。」

之を聞いて、人々は心中では尤もだと思つたが、語に憚つて敢て凶だといふ者はなかつた。

義貞の馬屬强ひの事

閏七月二日は、足羽の合戰だと觸れられたので、國中の官軍は義貞の陣河合莊へ馳せ集まつた。其勢は雲霞のやうであつた。大將新田左中將義貞朝臣が赤地の錦の直垂に脇立だけで遠侍の座上に坐られると、脇屋右衞門佐は紺地の直垂に小具足だけで左の一の座に著かれる。此外、山名、大館、里見、以下の一族三十餘人は、思ひ思ひの鎧兜に色々の太刀、刀、綺麗の限りを盡して東西二行に並ぶ。外樣の人々には、宇都宮美濃將監を初めとして、禰津、風間、敷地、以下軍勢三萬餘人、旗竿を引きそばめ〳〵、膝を折り手を束ねて、堂上庭前に充ち滿ちたので、由良、

船田に大幕を揭げさせて、大將に遙か目禮して一隊一隊座敷を起つ。巍々たる裝束、堂々たる禮儀、誠に尊氏卿の天下を奪はん人は、必ず義貞朝臣であらうと、誰れしもさう思はない者はなかつた。

大將は中門で鎧の上帶を締めさせ、水練栗毛とて五尺三寸の大馬に手繩打懸けて、門前で乘られようとすると、其馬が俄に進まず、騰ね上り跳り狂ひ、左右に附いてゐた舍人二人は、蹈まれて半死半生になつた。不思議だと思ふ間もなく、足羽河を渡る旗持ちの馬が河中に伏して、旗持ちは水に浸つた。かうした怪事が次々に起つたけれど、已に進軍を始めた以上は引返すことも出來ないので、危惧の念を懷きながらも一同は前進した。

義貞自害の事

義貞は燈明寺の前で、三萬餘騎を七手に分けて、七つの城を押し阻てゝ對城を取られた。豫ての作戰では、前の兵士は城に向つて合戰し、後の足輕は櫓を造り、塀を塗つて、對城を造つてしまつた後、段々に攻め落さうといふ手筈であつたが、平泉寺の衆徒の籠つてゐる藤島城が意外に脆く、間もなく落ちさうに見えたので、數萬の寄手はこれに勇氣を得て、先づ對城を差置き、塀

に取り著き、堀につかつて、喚き叫んで攻め戰つた。衆徒も始めは負けさうであつたが、とても遁れられないと觀念したものか、急に元氣を出して懸命に防いだ。官軍が楯を覆して入らうとすれば、衆徒は走木を出して突き落す。衆徒が橋を渡つて打つて出れば、寄手の官軍は鋒を揃へて斬つて落す。追ひつ追はれつ、入れ替つての戰ひに、時刻が移つて、日は西山に沈まうとする。

大將義貞は燈明寺の前で負傷者の實檢をしてをられたが、藤島の戰ひが存外手强く、動もすれば官軍が追ひ立てられさうなので、不安を感ぜられたのでもあらう、馬に乘り替へ鎧を著かへて、僅か五十騎の兵を從へ、路を替へて田の畦を傳ひ、藤島の城に向はれた。其時、ちやうど細川出羽守、鹿草彦太郎の兩大將が、藤島城を攻める寄手共を追拂はうと、三百餘騎で黑丸城を繰り出し、横畷を廻つて來たのに、義貞がばつたり行き合つた。

細川方には楯を持つ射手が多く、深田に走り下りて楯を衝き竝べ、それに鏃を支へさせて散々に射たが、義貞方には一人の射手もゐず、楯の一帖もないので、兵士が義貞の矢面に立ち塞がつた。中野藤内左衛門は義貞に目ぐばせして、「小敵を攻めるのに、大將の手は要りません。」といつたが、義貞はよくも聞かずに、「多數の兵を失つて我れ獨り難を免れるのは本意でない。」と駿馬に一鞭あてゝ、敵中に懸け入らうとした。馬は名うての駿足で、一二丈ばかりの堀を容易に越えることが出來たが、五筋までも射中てられた矢にひるんで、小溝一つをも越えかねて、屏風を倒すやうに崖下に轉んだ。此時義貞は左の足をくぢかれて、起き上らうとされる處へ、白羽の矢が一筋、兜の正面の端、眉間の眞中に立つた。何しろ急所の痛手であるから、一矢の爲めに目がくらみ、心が迷つたので、義貞はもはや萬事休すと、拔いた太刀を左手に取り渡し、自ら首を搔き切つて深泥の中に藏し、其上に横つて俯向かれた。

越中國の住人氏家中務丞重國は、畦を傳つて走り寄り、其首を取つて鋒に貫き、鎧、太刀、刀を一所に收めて黑丸城に馳せ歸つた。義貞の前で畷を阻てゝ戰つてゐた結城上野介、中野藤内左衛門尉、金持太郎左衛門尉らは、馬から飛び下りて義貞の死骸の前に跪き、腹搔き切つて重なり合つて死んだ。此外の四十餘騎は皆堀溝の中に射落され、一人の敵をも討ち取る事が出來ずに死んでしまつた。左中將の兵三萬餘騎はいづれ劣らぬ勇者で、大將の身に代つて死なうと思はぬ者はなかつたけれども、小雨混りの夕霧に、誰れが誰れだか分らず、大將が自ら戰つて討死された事を知らなかつた。何といふ運の惡さだ。唯だよそよそしい郎黨が主人の馬に乘り替へて、河合を指して引き揚げるのを、數萬の官軍は遙かに望んで、大將の跡に從はうと、何の分別もなく思ひ思ひに落ちて行つた。

漢の高祖は自ら淮南の黥布を討つた時、流矢に當つて未央宮の裏に崩ぜられ、齊の宣王は自ら楚の短兵と戰つた時、干戈に貫かれて戰場に死なれた。だから蛟龍は常に深淵の中に住む。若し渚に遊べば網や鉤にかゝる愁ひがある。義貞朝臣は君の股肱の臣として、武將の位が備はつてゐたのであるから、其身を慎み、命を全うされたならば、十分大功を樹てらるべきであつたのに、自らさほど重要でもない戰場に出られて、名もなき匹夫の鏑矢に命を喪はれてしまつた。運命、と云ひながら、如何にも惜しい事だ。

軍が濟んでから、氏家中務丞は、尾張守の前に出て、「重國こそ新田殿の御一族かと思はれる敵の首を取りました。誰れとは名乘らぬから名字は存じませんが、馬、物具の樣子、從兵が死骸の前で腹を切つて討死しました樣子。それらを觀ると常の葉武者ではないと存じます。これが其死人の膚に懸けてゐた護符であります」と、血をまだ洗はぬ首に、土の着いた金襴の守札を副へて差出した。尾張守は其首をしげ〳〵見て、「なるほど、新田左中將そつくりの顏附だ。若し左中將なら左の眉の上に矢創がある。」と自ら鬢櫛で髮を搔き上げ、血を洗つて土を落して見ると、果して左の眉の上に疵跡があるので、更に帶びてゐられた二振の太刀を調べると、金銀を延べて作つた一振は、銀で金膝纏の上に鬼切といふ文字を沉め、一振は銀脛巾の上に鬼丸といふ文字を沉

め、共に源氏重代の重寶であるから、益〻怪しく思つて膚の守を開くと、後醍醐天皇の御宸筆で「朝敵征伐事。叡慮所レ向。偏在二義貞武功一。選未レ求レ他。殊可レ運二早速之計略一者也。」とあつたので、さては愈〻義貞朝臣の首に相違ないと、葬禮の爲めに屍骸を輿に乘せ、時衆八人にかゝせて往生院へ送り、首は朱の唐櫃に入れ、氏家中務を副へて潛に京都に上せられた。

義助重ねて敗軍を集むる事

脇屋右衛門佐義助は、河合の石丸城に歸つて初めて義貞の死を知り、大將と同じ處で討死しようではないかといはれたが、兵士は皆茫然としてゐるのみか、中には夜の闇に紛れて落ちて行く者もあり、又黑丸城へ降る者などもあつて、昨日までは三萬騎を計へた兵數が、一夜の中に二千騎にも足らないほどになつた。こんな有樣では、とても北國を押さへる事は出來ないと、三峯城に河島を籠らせ、杣山城に瓜生を置き、湊城に畑六郎左衛門時能を殘されて、閏七月十一日、義助、義治父子は、七百餘騎を率ゐて當國の府へ歸られた。

義貞の首を獄門に懸くる事附勾當內侍の事

新田左中將の首が京都に著くと、朝敵武敵の最なるものとして、大路を渡して獄門に懸けられた。左中將は後醍醐天皇の寵臣で、其武功は一世を蓋はれたから、長い間に其眷愛を受け、恩顧を蒙つた人が幾千萬といふ數を知らない。それらの人々は京中に散らばつてゐるので、いたはしい最後の御顏を拜まうと、集つて來た車馬は歸りかねて道に横り、立ちすくんだ男女は岐を埋めて、見上げる眼は涙にうるほひ、聲を立てゝ泣き悲しむものさへあつた。中にも哀れなのは左中將の北の臺勾當內侍の局の心の中である。

局は頭大夫行房の女であつた。(八)金屋の內に粧ひを閉ぢ、鷄障の下に媚びを深くして、(九)二八の春の頃から內侍に召されたが、(一〇)羅綺にも堪へない姿は、春風に吹き殘された一片の花かと疑はれ、紅粉を施した顏は、秋雲の吐き出した半江の月に似てゐた。さればこそ椒房の三十六宮、五雲の漸くに遠ゐる事を听み、(一一)禁漏の二十五聲、一夜の正に長き事を恨んだ。想ひ回せば建武の初め、天下がまた將に亂れようとした時、新田左中將は常に召されて、內裏の御警固に當つてゐた。秋の或夜、月が澄み、風が冷やかであつた時、勾當內侍は半ば簾を捲上げて、琴を彈じてゐた。左中將は其怨むやうな聲に心を引かれて、思はず月下に彷ひ出でたが、何物かに憧憬れてわけもなく心が落着かないので、唐垣の陰に立隱れて內の樣子を窺つた。內侍はそれを氣づいて、もの惱ましげ

に琴彈く手を止めた。夜がいたく更けて、有明の月がさし入るのに、「(一二)類までやはつらからぬ」と詠じて萎れ伏した樣子は、折つたら落ちさうな萩の露か、拾つたらば消えさうな玉篠の霰か、否それよりも一層艶つぽかつたので、左中將は心も空に歸つて行く途筋も分らず、淑景舍の傍で一夜を立ち明した。內裏から歸つた後も、幻影が眼の前にちらついて、世の業、人の語も心に入らないから、(一三)起きるともなく、寢るともなく、夜を明し、日を暮して、若し案內してくれる海人さへあつたら、忘れ草の生へてゐる浦のあたりをでも尋ねて、此戀ひ慕ふ心を忘れたいものだと、深き物思ひに沈まれた。どうにも仕方がないので、媒してくれる人を探し出し、其人に托してただ此戀心の切なさを先方に知らせようと、

我が袖の涙に宿るかげとだに
しらで雲居の月やすむらむ

(歌意——自分の袖を濡らした涙に、映る影とさへ知らずに、空の月は澄んでゐるのだらうか。戀ひこがれて泣いてゐる私の心も知らずに、貴女は雲深き九重に住んでゐられるのですか。)

といふ歌を詠んで局に贈られたが、若しかやうの事が叡聞に達しては畏れ多いと、それの方の心配

もあつて、誠に哀れげな樣子に見えた。ところが使が歸つて來て、手にさへ取らないと云つたので、左中將はがつかりして、まるで生きてゐる心地もしなかつたのに、誰れが申上げたものか、天皇は此事を知られて「田舍者の一徹さに、思ひ詰めたのも尤もだ。」と事の外に憐れませ、御遊の次でに義貞を召され、さて御酒を賜はつて、「勾當內侍を此盃につけて取らせう。」と仰せ出された。左中將は此上もなく悅んで、次の夜、牛車爽やかに仕立て、勾當內侍の許にかくと案內をさせると、內侍も早や觀念して、此頃では誘ふ水あらばと思つてゐたと見えて、さほど夜の更けぬ中に車の軋る音がして、左中將の中門に轅を差廻すと、侍兒が一人二人、妻戶をさし隱してどよめき合つた。左中將は幾年も戀ひ忍んだ末、やつと相逢ふことが出來たので、優曇華の春待ち得たる心地して、珊瑚の枕の上に陽臺の夢が長くさめ、連理の枝の頭に驪山の花が自ら濃やかであつた。

中將ほどの人の心の迷ひである、誰れも諫める者がなかつたので、前には建武の末、朝敵が西海の波に漂つてゐた時も、中將は此內侍に暫しの別れを悲しんで、征伐に出るのを躊躇し、後には叡山臨幸の時、寄手が大嶽から追ひ落され、其儘押し寄せたら京都が手に入つたらうものを、中將は此內侍に迷つて、勝ちに乘じ、疲れを攻める作戰に出でなかつた。そして其結果、國は遂

に敵の爲めに奪はれてしまつた。一たび笑めば能く國を傾くとは、誠に理の深い箴言である。中將が坂本から北國へ落ちられた時は、道中の難儀を慮つて、此內侍を今堅田といふ所に留め置かれた。かうした場合の別れでなくも、行く者は後を顧みて、頭を家山の雲に回らし、留まる者は末を思うて、涙を天涯の雨にそふのが常である。ましてや中將は行末も賴みない北國に赴かれるのであるから、生きて再びめぐり逢ふ後の契りは覺束ない。又、內侍は、都に近い海人の磯屋に身を隱されたのであるから、今にも探し出されて捕はれの身となり、憂き名を人に聞かれることがあるかも知れないと、並み並みならず嘆かれた。

翌年の春、父行房朝臣が金崎で討死されたといふ噂さを聞かれてからは、戀しい思ひの上に悲しみの心が添うて、內侍は早や命も欲しくないと嘆き沈ませられたが、たとへさう思つたとて死なれた身ではないのであるから、起つにつけ居るにつけても流れる涙に袖を乾しかねて、二年餘りは夢のやうに過ぎた。

中將も越前に下著された日から、迎ひの者を上せたいと思はれたけれども、道も容易でなく、また人の心をも憚かられて、唯だ時々の便りばかりを互ひに生き殘つてゐるしるしとして、心ゆかぬ月日を送つてゐられたが、其秋の初めに、今は道中も靜かになつたと、迎ひの人を上らせたの

で、内侍は夜の明けたやうな心持で、先づ杣山まで下り著かれた。

其時中將は、足羽に出向はれ、杣山には誰れもゐなかつたから、其處から輿の轅を進めて、淺津の橋へかゝられた時、瓜生彈正左衛門尉が百騎許りを率ゐて行くのにばつたり出逢つた。瓜生は馬から飛び下りて、輿の前にひれ伏し、

「これは何處へ御渡りになるのでございます。新田殿は昨日の夕方、足羽と申す所でお討たれになりました。」

と云ひも終らず、涙をはらはらとこぼすと、内侍は驚きの餘り却つて涙も出ず、輿の中に伏し沈んで、

「せめては其方のお討たれになつた野原の草の露の下に、私の身を捨置いて歸つておくれ。さほどの前後はない、一所に死にたうございます。」

と云つて泣き悲しまれたので、

「早く其輿を舁き返せ。」

と急いで杣山へ返された。これが此頃中將殿の住まれた所だといつて、案内されたまゝに色紙を張り散らした障子の内を見ると、何となき手荒みの筆の跡まで、皆な「都へ何時か」と待望の心

を書き置かれたものでないのはなかつた。かうした形見を見るにつけても、内侍の心の悲しみは深くなりまさるばかりであつたが、中將が久しくお住みになつた處であるから、爰で中陰の日を過して、亡き御跡を弔はうと思はれた。然るに、間もなく其の邊が騷がしくなり、敵が近附いたといふやうな噂さもあつたので、やがて又京都へ送つて、仁和寺の邊りの靜かな宿、そこは荒れ果てゝ主人さへ住まない家に置きまいらせた。都ながらも今は旅心、安き思ひとてはなく、袖はいつも涙に濡れてゐるので、何處かに浮舟の此身を寄せる處がないかと、昔知つた人の行方を尋ねて陽明の邊に行かれる途中に、大勢の人が群がつて、「あゝ哀れだ」、など云ふのを何かと思つて、立留つて見られると、自分が越路遙かに尋ねて行つて、會はずに歸つて來た其新田左中將義貞の首が、何とまあ獄門に懸けられて、眼が塞がり、色が變つてゐるではないか。

内侍の局はそれを二目とは見られずに、土塀の陰に泣き倒れられた。知る人も知らぬ人もそれを見て、涙を流さない者はなかつた。日は已に暮れたけれども、立歸る心地もしないので、露しげき草の中で泣き崩れてゐられるのを、其邊の道場の僧が見て、「あまりに御氣の毒で、お慰め申す言葉もございません。」と請じて内へ誘ひ入れたところ、其夜直ぐ黑髪を剃り下して、艶やかな御姿を墨染の衣に包まれた。暫くの間は亡き人の面影を身に副へて泣き悲しまれたが、やがて會者

定離の理に愛別離苦の夢を覺まされてからは、穢土を厭ふ心が日々に募り、淨土を願ふ念が刻々に增つたので、遂に嵯峨の奥、往生院のあたり、とある小庵に朝夕を行ひすましてゐられた。

奥州下向の勢難風に逢ふ事

吉野では義貞が北國から攻め上る由を聞かれ、今か今かとそれを待たせられた甲斐もなく、次ぎには足羽で討死の牒狀を見させられて、天皇は深く御落膽遊ばされた。其時奥州の住人、結城上野入道道忠が參內して、

「國司顯家卿が三年の內に二度まで大軍を動かして上洛せられたのは、出羽、奥州の兩國が皆國司に從つてゐたからの事でございます。國人の心が變らない中に、宮樣を御一人下されましたならば、從ひ奉らぬものはございますまい。奥州五十四郡は日本國の半分にも當り、其兵數も四五十萬を下りません。此道忠が宮樣を擁し奉つて、老人の頭に兜を頂きますならば、重ねて京都に上つて恥を雪ぐのは、一年も經たない中のことゝ存じます。」

と申し上げたので、天皇を始め奉り、老臣達も尤もな事と思召され、當年七歲の第八宮義良親王に、春日少將顯信、結城入道道忠を附けて奥州へ下されることになつた。又新田左兵衛佐義興、

相模次郎時行の二人にも、東八箇國を討ち平げよとて、武藏相模の兩國へ下向せしめられた。

陸地には敵兵が滿ちてゐて通り難からうと、伊勢の大湊に船を艤して風を待ち、九月十三日の夜纜を解いて出帆した。兵船はすべて五百餘艘、宮の御座船を護つて遠江の天龍灘を過ぎる頃、海風が俄に吹き荒れて、逆捲く波が忽ち天を卷き返した。船は或は檣を吹き折られ、或は舵をうち折られたが、日が暮れるに從つて天候は益ゝ暴く、風向が一向定まらない爲めに、船は散り散りばら〳〵になり、伊豆の大島、女良湊、龜河、三浦、由比濱など、津々浦々の港に吹き寄せられた。宮の召された御船一艘だけは、廣々とした大洋に吹き放たれて、今にも覆らうとした處、光明赫奕たる日輪が現はれて、風が俄に吹き變つて、伊勢國の神風濱へ吹き戻された。

結城入道地獄に墜つる事

中でも結城上野入道の乘つてゐた船は、惡風に吹かれて渺々たる海上に漂ふ事七日七夜、既に大海の底に沈むかと思はれたが、風少し靜まつて伊勢の安濃津へ吹き寄せられた。渡海の順風を待つて十餘日を經る中、入道は重き病に罹つて、もはや快癒の見込みがなくなつたので、看病してゐた僧が枕邊に寄つて、

「今日まではひたすら快方に向はれるのを待つてゐましたが、御病氣は重る一方で、御臨終の日ももはや遠くはないと思はれます。よくよく後生を願はれて、念佛申される聲の中に、三尊の來迎を御待ち下さい。だが、今生では何事を思召されます。御心に懸る事がございますなら、何なりと仰せ置き下さい。御子息の御方へ御傳へ申しませう。」

と云ふと、既に目をつむらうとした入道は、かつぱと跳ね起きてからからと笑ひ、

「私は已に七十歳に及び、身に餘る榮華を極めたので、今生には何も思ひ殘すことはない。たゞ朝敵を亡ぼすことが出來ないで死ぬのが何時何時までもの妄念となります。それだから息子の大藏權少輔には、我が後生を弔はうと思ふならば、供佛施僧や稱名讀經の代りに、朝敵の首を取つて我が墓前に懸け並べて見せよと傳へ下さい。」

と云ふのが最後の詞で、刀を拔いて逆手に持ち、齒嚙をして死んだ。

入道が死んだ事を、遠方の事とて、故鄕の妻子はまだ知らなかつたが、其頃、入道一家に關係のある律僧が武藏國から下總國へ下つて行つた。廣い野原で日が暮れて泊る宿を探してゐると、山伏が一人出て來て、「さあいらつしやい。此邊の僧を接待してくれる所へお連れ申しませう。」といふので、行脚の僧は悅んでついて行くと、鐵の塀を圍らし、金銀の樓門が立つてゐて、其額には

大放火寺と書いてあつた。內に入つて、夜中過ぎになつた頃、急に月がかき曇り、雨が荒く降つて、電光がすると共に、數限りもない牛頭、馬頭の獄卒が大庭に集まつて來る。烈々たる猛火が盛んに燃えて、毒蛇が舌を出して焰を吐き、鐵の犬が牙をとぎつゝ吠え怒る。僧は、あゝ恐ろしや、これこそ無間地獄であらうと、恐怖に戰きつゝ見てゐると、鬼共が罪人を連れ來り、俎と俎の間に挾んでえいやえいやと押す。紙の如くに押しつぶされた罪人を鐵の串にさし貫き、炎の上で炮り乾して寸分に切り割り、さて銅の箕の中に入れて簸ふと罪人は再び蘇るのであつた。

僧は恐ろしさの餘り、山伏に「あれは一體如何なる罪人ですか」と聞くと、山伏は「あれは奧州の住人結城上野入道と云ふ人です。伊勢國で死んだが、阿鼻地獄へ落ちたのです。若し貴方が御緣のある方ならば、妻子達に、一日經を書いて供養し、此苦しみを救つてやれと云つておやりなさい。私は入道が上洛する時鎧に名を書いた六道能化の地藏菩薩です。」と云ひも終らぬ中に、曉を告げる野寺の鐘が松吹く風に響いて聞え、地獄の鐵城は忽ち搔き消すやうに視界から去つた。

僧は急ぎ奧州へ下つて、入道の子に其話をしたので、大藏權少輔は七日七日の忌日には經を書

いて供養をした。

註

(一)國府とあるは越前の國府、古くは府中といつた。現在の武生(たけふ)。
(二)梅酸の渇とは、前途に梅林があり、梅の實がなつてゐると聞いて、兵士が渇を醫したといふ魏の武帝の故事。
(三)脇立とは鎧の胴の右脇の隙間を塞ぐもの。
(四)遣侍とは中門の際の番侍の詰所。
(五)葉武者は下つ端武者。
(六)膝繩は鐔元を固める金具。
(七)時衆とは時宗の僧の意。
(八)金屋は立派な御殿の事。
(九)二八とは十六の事。
(一〇)羅綺は共に薄衣。
(一一)禁漏は禁廷の漏刻時計、二十五聲は一晝夜の半。
(一二)類までやは云々、「つれなさの類までやはつらからぬ月をもめでじ有明の空」(新古今集)。

(一三)起きる云々、「起きもせず寝もせで夜を明しては春のものとてながめくらしつ」(在原業平)。
(一四)誘ふ水云々、「わびぬれば身をうき草のねを絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ」(小野小町)。
(一五)交情の濃かなるを言つたもの。

卷第二十一

天下時勢粧の事

曆應元年の末、諸國勤王の士は競つて兵を擧げたので、今度こそは天皇の御運も啓けようと思はれたが、顯家、義貞は流矢に中つて命を墜し、奥州下向の諸將は難風に吹き流されて行方が知れないといふ有樣なので、結城入道の子の大藏少輔は南朝危しと見て、降人となり、芳賀兵衞入道禪可も亦た武家方に附いた。

けれども新田の一族は、尙ほ各地の城に楯籠つてゐるので、國々に在らせられる宮樣は、時節の來るのを偏へに待ち望んでゐられた。其御有樣は實においたはしい限りであつた。之に反して高、上杉の黨類は、世の譏りも知らず顏に侈りを極め、初めの程こそ朝敵の名を憚つて、事毎に

天皇の御思召しをお伺ひしてゐたが、もはや天下が武家のものになると、公家はあつても用のないものと、其所領を奪ひ、甚しきに至つては朝廷の御領をさへも犯し奉つた。かうして曲水重陽の宴は絶え、白馬踏歌の節會も行はれず、寂しき禁闕には伺候する者も稀であつた。

思ひ上つた武士らは公家を見る毎に、長袖垂れた魚板烏帽子よと、其言葉を眞似たり、指を差して嘲つたりしたので、氣の弱い公家達の中には、云ひも習はぬ坂東聲を使つたり、著も慣れぬ折烏帽子に額を顯はしたりして、ひたすら武士に紛れようとする者が多かつたが、どことなく姿が艶めいて武家とは見えず、さりとて公家ともつかない樣子であつた。

佐渡の判官入道流刑の事

其頃、時流に乘つて榮耀榮華を極めてゐた佐々木佐渡判官入道道譽の一族若黨共が、風流を盡しての小鷹狩の歸りに、妙法院の南庭の紅葉の枝を下郎に折らせた。「門主は恰度其時、御簾の內から暮れゆく秋の氣色を眺めてゐられたが、此有樣を御覽になつて、それを坊官に制せしめられたところ、下郎は嘲罵して一層大きな枝を折つたので、泊つてゐた御門徒の山法師が承知せず、枝を奪ひ取つて、散々に叩きつけて、門外に追ひ出した。

かくと聞いて道譽は大に怒り、直ぐさま三百餘騎を率ゐて押寄せ、妙法院に火を放つた。折からの烈風に煽られて火は四方に燃え廣がり、忽ち堂塔を燒き盡したので、門主は逃げられ、御弟子の若宮は道譽の子の源三判官に、板敷の下に追ひこめられて打ち叩かれさせた。鬨の聲が京白河まで響き渡り、兵火が天を焦したので、人々は遽て騒いで上下に馳せ違つたが、やがて鎭まつてから歸つて來た人々は、皆山門が承知しないだらうと噂し合つた。

山門は果して激怒して公家に訴へたが、彼等は武家に壓せられてなす術を知らなかつたので、衆徒は大宮八王子の神輿を根本中堂へ上げ、それを皇居へ擔ぎ込まうといふ評議をした。武家でも流石に山門の嗷訴を無視する譯にはゆかず、道譽を流刑に處する事に決し、二十五日、之を上總國山邊郡へ流した。

道譽には近江の國分寺まで、若黨三百餘騎が見送りの爲めに從つていつた。其者共には皆猿皮を靫に懸け、猿皮の腰當をさせ、手には鶯籠を持たせた。道中では酒宴を催し、宿々では遊女を弄んだ。其有樣が普通の流人とは異つて、如何にも美々しく豪勢に見えた。これは全く公家の裁斷を輕んじ、山門の法威を嘲る行爲であつた。昔から山門の訴へを受けた者は、十年と經たぬ間に其身を滅ぼすと云ふが、結果は其通りで、文和三年に道譽の長男源三判官秀綱は堅田で山法師

に討たれ、弟の四郎左衞門は大和の內郡で野伏共に殺され、嫡孫近江判官秀詮、弟次郎左衞門の二人は、攝津の神崎の合戰に宮方に誅せられた。

法勝寺の塔炎上の事

康永元年三月二十日、岡崎の在家から俄かに火が出て、一つの小さい火屑が遙かに十餘町を飛んで、法勝寺の五重の塔の上に落ちた。暫くは消えもせず、燃えもしないでゐたが、寺中の僧が梯もがなと周章て騒いでゐる中に、檜皮に火が附き、間もなく燃え上つた。魔風が頻りに吹いて、火は堂、門、廻廊に燃え移り、瞬く中に灰燼となつてしまつた。燒けてゐる最中に、それを外から見てゐると、煙の上に鬼の姿をした者がゐて火を諸堂に吹き懸け、また天狗の形をした者が松明を振り上げて、塔の一重一重に火をつけてゐたが、金堂の棟木が燒け落ちると共に、一同手を拍つて、どつと笑つて、いづくともなく立去つたが、行先は愛宕、大嶽、金峯山であつたらしく、暫くすると花頂山の五重の塔、醍醐寺の七重の塔が同時に燒けた。あゝもう佛法も王法も、有れども無きが如くになるのか。公家も武家も共に衰微する前兆だと、心ある人々は皆歎き悲しんだ。

先帝崩御の事

延元三年八月九日から、後醍醐天皇は吉野で御病床に臥させられたが、御惱は次第に重らせて、いくら御祈りをしても其驗がなく、靈藥を御進め申しても、一向其效果がなかつた。

かうして玉體は日々に衰へさせ、御臨終の日ももう遠くはないやうに見えたので、大塔忠雲僧正は御枕邊に近づき奉つて、涙を抑へて、

「神路山の花が再び開き、石清水の流れが遂に澄むべき時が來たなら、佛神は君を見捨て給ふまいから、必ず御平癒遊ばされることと信じて居りましたが、御脈は已に變らせられたと典藥頭が驚いて申します。今となつては只だ御位を捨てさせ、悟りに入られる事のみを思召されたい。それにしても經文には、御最後の御一念で三界に生を引くと、說かれてありますから、御心に懸かる御事共をすつかり仰せ置かれまして、後生は善き所にお生まれ遊ばさうとの御望みを御心にお懸け遊ばされるやうにお願ひ申します。」

と申し上げたら、主上は苦しさうな御息を吐かせられて、

「妻子珍寶及び王位は、命終る時に臨みて隨はざる者なり、といふ佛の金言は、常々朕の諳んじてゐた事であるから、秦の穆公が三良を埋め、始皇帝が寶玉を隨へたやうな事は、敢て朕の關せざる所である。朕の死後、生々世々に思ひ殘す事は、只だ朝敵を悉く亡ぼして天下を泰平にしたいと思ふことだけだ。朕が早世した後は、第七の宮を天子の位に即け奉り、賢士忠臣が事を圖り、義貞、義助の忠功を賞して、子孫に不義の行ひがなかつたならば、股肱の臣として天下を鎭めるであらう。此事を思ふからこそ、骨は縱令南山の苔の下に埋るとも、魂は常に北闕の天を望んでゐる。若し命に背き、義を輕んずるならば、君も纖體の君ではなく、臣も忠烈の臣ではない。」

と、悲痛な御言葉を遺されて、左の御手には法華經の五の卷を持たせ、右の御手には御劔を握らせられて、八月十六日の丑刻（午前二時）に遂にお崩れになつた。

何といふ悲しい事だ。天子の位は北斗の如く高く、それを繞る列星のやうに百官が列るけれど、黃泉路の旅に、從ひ奉る臣とては一人もない。南山の地は勢ひ僻り、萬卒が雲のやうに集つてゐるけれども、無常の敵を禦ぎ止める兵とては一人もない。これはどうする事も出來ない。唯だ中流に船を覆して一壺の浪に漂ひ、暗夜に燈が消えて五更の雨に向ふが如くである。心細い行末だ。

火葬の御禮は、強て遺敕があつたので、御臨終の形を少しも變へず、御座を正しくして御棺に收め、吉野山の麓、藏王堂の北東に當る林の奥に圓丘を高く築いて、北向きに葬り奉つた。

寂寞たる空山の裏、鳥が鳴いて、日は既に暮れた。土墳を見ると悲しく涙が流れるが、涙が盡きても愁ひは盡きない。舊臣后妃は折からさし上る月を眺めて天を恨み、冷やかに吹く夜風に永き別れを惜しんだ。誠に哀れな御事である。

南帝受禪の事

同十月三日、大神宮へ奉幣使を立てられ、第七の宮が天子の御位に卽かせられた。御卽位に際しては、樣々の大禮が執り行はせられる。新帝受禪の日には、先づ三種の神器を傳へさせ、尋いで卽位の御儀があり、其翌年には國都を卜定する行事所始や、東の河原に幸せられての御禊や大嘗會やの行はれるのが常である。然しながら、今は雲深き山中の皇居の事とて、どんな準備を整へる事も出來ず、只だ三種の神器を受けさせられただけで、新帝は御位に卽かせられた。

遺敕に任せ綸旨を成さるゝ事 附義助黑丸城を攻め落す事

同じ年の十一月五日に、南朝の羣臣は相議して、先帝に延喜の帝の御風格があるといふので、後醍醐天皇の諡を奉つた。

新帝は御幼少に在らせられ、且つ御喪中三年間は政を聞召されないといふ慣はしに從つて、御政務は一切北畠大納言が計はれ、同じ年の十二月、北國の脇屋義助朝臣、筑紫の西征將軍宮（懷良親王）、遠江の井伊城に在らせられる妙法院（宗良親王）、奥州の新國司顯信卿へ、遺敕に從つてそれぞれ忠戰を抽んでられるやう綸旨を下された。

義助は義貞の後を繼ぎ、微力ではあるが、敵に壓倒される程ではなかつたので、全軍力を合はせて一擧に黑丸城を攻め落さうと評定してゐた。其時先帝崩御の由を傳へ聞き、一時落膽はしたものゝ、御遺敕の忝さに感激して、是非とも一戰に勝つて南朝を復興したいと、御國忌の中陰が過ぎるのを、今や遲しと待つてゐた。

もと新田左中將義貞の部下であつた上木平九郎家光は、此頃將軍方に屬して黑丸城に居たが、大將尾張守高經の前に出て、

「此城は先年新田殿に攻められたが、不思議の運で陷らずに濟みました。だからと云つて、今度も大丈夫だとは申されません。其譯は、先年此處に押寄せた敵は皆東國西國の兵で、土地不案內

の者ばかりだつたから、深田に馬を驅け入れたり、堀溝に墮ちたりして、名將も遂に一命を失はれました。今の場合は其時と異ひ、身方の者が多く敵になりましたから、寄手も城の様子を能く知つて居り、其上畑六郎左衞門と申して日本一の大力の勇士が命を棄てゝ此城に向はうと決心して居ります。恐らく互角の勢で彼れと合戰をする者はございますまい。後攻もない平城に小勢で御籠りになつて、名將が命を失はれるのは殘念な事でございます。今夜の中に加賀國へ御退却になつて、京から加勢の來た時、力を合はせて敵を御退治になつても、何の障りもございますまい。」

といつたので、細川出羽守らに至るまで此議に贊成し、尾張守高經は五の城に火をかけて、其光を松明として夜の間に加賀國の富樫城に退却した。畑の謀計で義助は黑丸城を落し、義貞の討たれた恥を雪いだ。

鹽治判官讒死の事

北國の宮方が崛起して、尾張守の黑丸城が陷つた事が傳はると、京都は大あわてにあわて騷いだ。やがて援兵を送る評定が開かれ、高上野介師治は大手の大將として、加賀、能登、越中の兵

を率ゐて、加賀國を經て、宮腰から越前に向つた。土岐彈正少弼頼遠は、搦手の大將として、美濃、尾張の兵を率ゐ、穴間、郡上を經て、大野郡へ向つた。佐々木四郎判官氏頼は江州の兵を率ゐて、木目峠を打越え、敦賀の津から北進した。鹽治判官高貞は海上の大將として、兵船三百艘に出雲、伯耆の兵を滿載し、三方の寄手が相近づいた頃、津々浦々から上陸して敵の後を襲はうといふ合圖が定められた。

陸地三方の大將は已に京都を立ち、鹽治も出發の用意をしてゐる最中に、思はぬ事件が突發して高貞は忽ち武藏守師直の爲めに討たれた。高貞が多年連れ添つた女房に師直が懸想して、其爲めに理由もなく討たれたのだといふ。

其頃師直は病氣で暫く出仕しないでゐたが、家來共が師直を慰めようと酒宴を設け、藝人を招いて座中の興を催した。眞都、覺一檢校の二人が平家を演じて、源三位頼政が鵺を射て年月戀ひ忍んだ菖蒲の前を時の帝から頂いたといふ筋を語つた。

師直は枕を押しのけ、耳を傾けて聞いてゐたが、平家が終つて、居殘つてゐる者共が、

「頼政は鵺を射て傾城を賜はつたが、領地か、御引出物を賜はつたのに較べると大きな劣り方だ。」

と云つたのを聞いて、師直は、

「お前らは馬鹿な事を云ふ。師直は菖蒲ほどの美女ならば、國の十箇國や、所領の二三十箇所よりも、女を頂きたいと思ふ。」

といつて一同を辱しめた。元は公家に仕へて羽振りよかつた女で、今は衰へて寄る邊がない薗に、此武藏守の處へ常に來てゐる侍從と云ふのが、垣根越しに此話を聞いて、後の障子を引き開けて笑ひ崩れ、

「まあ、何といふ御心得違ひでございませう。私は菖蒲の前はさほどの美人でなかつたと思ひます。揚貴妃は一度笑めば六宮に顏色なしと申します。縱令千人萬人の女房を並べたとて、菖蒲の前が本當に一世の美女であつたら、賴政ともあらう者がそれを何で引きかねませう。それほどの女にさへ十箇國を代へても惜しくないと仰せられるならば、若し先帝の御外戚、早田宮の御女、弘徵殿の西臺なんどを御覽になつたら、日本國、唐土、天竺とでも御替へになる事でございませう。此御方は眞に絕世の御容貌です。いつの事であつたか、宮中に御仕へしてゐる公卿達が、櫻の咲くのを待ちかねてゐた退屈紛れに、宮中、仙洞の美夫人、女官、更衣達を花に比べられました。其時、桐壺の君を明けやらぬ外山の花に譬へられたが、梨壺の君はいつも臥し沈ませら

れる御樣子がもの悲しいので、玉顏寂寞として淚欄干たりと譬へられました。或は月もうつろふ本あらの小萩、波も色ある井手の山吹、或は遍昭僧正がわれ落ちにきと人に語るなと戲れた嵯峨野の秋の女郎花、光源氏の大將が白くさけるはと名を問はれました黃昏時の夕顏の花、見るに思ひが牡丹を初めとして、樣々の花に譬へられました。けれども梅は匂ひこそ深けれ枝が優美でない、櫻は色が優れてゐるけれども香がない、柳は風を留める綠の絲、露の玉をぬく枝が一際他と異なつて面白いが匂ひもなく花もない。梅の香を櫻の色に移して、柳の枝に咲かせてこそ此御容貌にお譬へ出來ませうと、遂に花の譬へに入らなかつたと申しますから、何と申上げやうもない事でございます。」

と云ひ、障子を閉めて內へ入らうとするのを、師直は目を細くして打笑ひ、

「其宮は何處に御出になる。御年はいくつになられる。」

と問ふと、侍從は立留つて、

「此頃は田舍者の妻になつてゐられるし、御年も盛りを過ぎられましたから、宮中にゐらせられた頃とはまるで御容貌が變つてゐる事と思つてゐましたのに、或日物詣の歸りに參上して見まいらすると、昔の春待遠い若木の花の御容子よりも、一層あだつぽくならせられて、在明の月が一

杯に差し入る處で、南向きの御簾を高く捲き上げさせ、琵琶を搔き鳴らされると、はらはらとこぼれかゝつた鬢のほつれからほのかに見えた眉の色、芙蓉の眸、丹花の唇。どんな修行を重ねた聖人でも迷はないではゐられまいと、目も眩むばかりに思はれました。然るに何といふ恨めしい結びの神の御計ひでございませう。どんな女院、御息所としても立派な御方ですが、さうでなくても、せめては天下の權を取る人の妻にでもなればよいのに、其聲が塔の鳩の鳴くやうな、出雲の鹽冶判官に先帝が下されたので、賤しい田舍の御栖ひに身を捨て果てられました。胡國の野蠻人に嫁がせられた王昭君も、かうであつたらうかと思はれて、お見受けするのも悲しうございます。」

と言巧みに物語つた。それを武藏守は嬉しさうに聞きとれてゐたが、「御話が面白かつたから、何か御贈物を致さう」と、色染めの小袖十重に沈の枕を添へて侍從の前に差出した。侍從は俄に利德づいた心地がしながら、不思議な贈物だと立ちかねてゐると、武藏守が近く寄つて來て、

「面白いお話で、師直の病氣は立ち所に治りましたが、其代り又た變な病氣にとり憑かれました。其美くしい女房を何とかして私に媒して下さい。さうして下さつたら、所領なり、家の財寶なり、何でも御望み通りに差上げます。」

と云つた。侍從の局は呆氣に取られて、唯だ獨りでゐられる方ではなし、どうしたらかく〳〵の次第だと申し出られよう。若しそんな事は云ひ出せないと云つたら命を取られるのは必定だと思つたので、さりげなく、「はい、申して見ませう」と云つて歸つた。

侍從は二三日の間、ああしようか、かうしようかと、色々案じ暮らしてゐたが、武藏守から酒肴などを送つて來て、「如何にも御取成しが遲い。」と責め立てた。侍從はもはや斷るに斷り切れず、遂に彼の女房を訪れて、そつと、

「こんな事を申し上げたら、さぞ卑しい心の女だとお蔑すみなされるでせう。本來は聞いたばかりで聞き流しにして置くべき事なのでせうが、實はこんな事があるのです。如何取計ひませう。露程の一寸したかこつけ言で、人の心が慰められましたならば、御子樣方の行末の御爲めになり、又憑む者のない妾共までも憑む處が出來るわけです。度重なつてこそ安濃浦に引く網で、人に知られる恐れがありますが、篠の小笹の一節に露のかゝるを誰れが知りませう。」

と侍從局は色々かき口説いたけれども、北の臺は「飛んでもない事だ。」と跳ねつけられるばかりなので、其上云ひ寄るすべもなかつた。「後で哀れと思召しても其甲斐がございません。故宮に仕へ參らせた御緣と思されて、せめて一言の御返事なりとも。」と恨めしげにいふと、北の臺は佗し

く打萎れた御様子で、「さやうな事を申されるものではありません。哀れな方に心が引かれたら、仇な浮名が立ちませうぞえ。」といはれた顔は曇つてゐた。

侍従が歸つて様子を告げると、師直は兼好と云ふ遁世者を呼び寄せ、それに手紙を書かせて、使の者に持たせてやつた。やがて使者が歸つて來て、「御文を手に取らせられたばかりで、見もせずに庭に棄てられました。」と云ふと、師直は忿つて、ちやうど用事で來合はせた藥師寺次郎左衛門公義に相談をした。公義は、「人は皆岩木でないから、どんな女房でも靡かぬ事はありますまい。」といつて、

返すさへ手や觸れけむと思ふにぞ
わが文ながらうちもおかれず

（歌意――返されてさへあなたの手が觸れたと思へば、自分の書いた手紙だが、下にも置かれない。）

と書き、使を出して鹽冶の女房に持たせてやつた。女房は歌を見るなり、顔を赭めて中へ入らうとするので、「御返事は」と聞くと、「重きが上の小夜衣」と云はれたと、使が歸つての報告。

師直は嬉しさうに思案してゐたが、藥師寺を呼んで「衣小袖を造つて送れと云ふのだらうが、

どんなのが良いかな。」と尋ねた。藥師寺は、「いや、そんな意味ではありません。新古今の十戒の歌に、さなきだに重きが上の小夜衣わがつまならぬつまな重ねそと云ふのがあります。それは人目を憚ると云ふ意味なのです。」と歌の心を釋き聞かせた。

師直は此後はのべつ幕なしに侍従を呼んで、「主人の一大事に逢つて捨てようと思つた命を、人妻の爲めに空しくするのは誠に悲しい事だ。今はの際には必ず侍従殿を連れて、死出の山、三途の河を越えようと思ふ。」と或時は目を瞋らしておどし、或時は顔を伏せて恨むので、侍従の局も持て餘して、もうかうなつては致し方がない、師直に此女房が湯から上つて、化粧しない素顔を見せて愛想をつかさせようと思ひ、「見もしないでの推量は憑になりません、一目女房を御見せしませう。」といつた。師直はほくそ笑みして、それを今日か明日かと待つてゐた。侍従は北の臺に仕へてゐる女童と約束してあつたので、「今夜こそは良人が御留守で、御臺が御湯を使はれます。」と女童から侍従の局の許に知らせて來た。

で、侍従が其旨を師直に告げ、師直は侍従を案内にして鹽冶の邸へ忍び入つた。

二間の所に身を縮めて垣の隙から覗いて見ると、女房は今湯から上つたと見えて、紅梅色の鮮かな上に、氷のやうな練貫の小袖の撓々としたのを掻い取つて、濡れ髪長く垂れかゝり、袖の

下に焚きこめた香の煙の匂ふのを聞くと、其人が何處にゐるかもわからぬほどに心は茫然となり、巫女(一〇)朝の花は夢の中に殘り、昭君村の柳は雨の外に疎かな心地して、師直は怪しきものに憑かれたやうに、只だわなわなとふるへるばかりであつた。餘り長引くと、主人が歸つて來るかも知れないので。侍從は師直の袖を引いて(一一)半蔀の外まで出たが、師直は緣の上にひれ伏して、どんなに引立てゝも起き上らず、其儘息が絶えてしまひさうに思はれた。それを侍從が促して、漸くのこと邸に歸らせたが、今は只だ戀の病に臥し沈んで、氣が狂つたのかと思はれるほど、寢ても覺めてもあられもない事ばかり云ひ續けてゐるといふ噂を聞いて、侍從は愚圖々々してゐては、どんな目に會はされるかも知れないと、恐ろしさに行方を晦ませて片田舍へ逃げ落ちた。これから後は指圖する人もないので、師直はどうしようかと嘆いたが、色々思案のまゝ遂に心を決して、鹽冶判官が隱謀の企てをしてゐる事を將軍に讒言した。

鹽冶は此事を聞いて、本國に逃げ下つて旗上げをしようと、三月二十七日の曉に鷹狩と見せて家を出で、女房子供は丹波路より落し、自らは播磨路へ落ちていつた。

武藏守は此事を鹽冶の弟四郎左衞門の密告に依つて知り、驚いて桃井播磨守直常、大平出雲守の二人を呼び寄せ、急いで鹽冶の後を追はせた。又山名伊豆守時氏を丹波路に向はせ、女房子供

の後を追はせた。鹽冶の郎黨は追手の懸るのを豫期して急ぎに急いだが、女子供を連れてゐるので思ふやうに捗がゆかず、暮に燭を繼いで馳せ下る追手に播磨の陰山で追ひつかれてしまつた。鹽冶方は北の臺を乘せた輿を小家に舁ぎ入れて奮戰したが、今は既に刀折れ矢盡きてどうすることも出來なかつた。八幡六郎は家の前に立ふさがり、「私は矢のある限り射て防がう、君達は女子供を刺しまいらせて、家に火をかけて腹を切れ、」と呼はつたので、鹽冶の一族山城守宗村が內へ走り入り、持つた太刀を取直して、雪よりも淸く花よりも美しい女房の胸を突くと、紅の血が流れて、あつと云ふ幽かな聲を立てゝ薄衣の下にうつ伏される。五つの幼子は太刀に驚いて泣きながら亡き母に取縋るのを無情にもかき懷き、自分も共に鐔元まで貫かれて死んだ。他の者も皆な燃え熾る火の中に飛び込んで討死した。

山陽道を追ひ下つた山名伊豆守は、京都から湊川までを二時ばかりで下り、馬を休めようとそこで留まつた。十四歲になる子息右衞門佐は、氣早な者を呼び拔いて、馬の强い者は俺と一所に來いと云ふや否や、馬に打ち乘つて馳せ去つた。其後に續いたのは小林以下の十二騎、十六里を一夜に驅けて夜が明けると、遠方に三十騎許りの騎馬が見えた。鹽冶の手の者共であつた。判官の舍弟鹽冶六郎は濁り踏み止まつて、河を渡つて岸へ懸け上る敵と斬り合ひ、小林左京亮と太刀

を合はせたが、右衛門佐に斬つて落された。右衛門佐は生き殘つた者を引連れて尙も追つた。此間に鹽冶高貞は漸く落ち延びて、三月晦日に出雲國に著いた。

追手の大將山名伊豆守は、四月一日に三百餘騎で屋杉莊に著いた。高貞は佐々布山に陣取つて一戰しようと、馬を早めて行く途中で、丹波路から落ちて來た若黨の仲間の一人に逢つた。彼れは「御臺も公達も皆討たれました。」といふより、腹かき切つて馬から落ちた。高貞これを聞いて「暫くも離れ難いと思ふ妻子。それを失つて何で命を生き長らへよう。七生まで師直の敵となつて、思ひ知らせてやらう。」と馬上で腹を切つて、倒に落ちて死んだ。一人附き添つてゐた木村源三は、馬から飛び下りて、判官の首を取つて鎧直垂に包み、深田の泥中に埋めて後、腹かき切り、腸を手繰り出して判官の首の切口を隱し、自分は其上に折重つて死んだ。

これから後、師直は惡行が積つて程なく亡びた。人を利する者は天必ず福ひし、人を賊ふ者は天必ず之を禍ひすとは、眞に千載不磨の金言である。

註

(一)三界　佛界、衆生界（自己以外の一切生物）、己界（自己の一心）の三界。

(二)妻子珍寶云々は大集經に出づ。

(三)玉顏寂寞云々は長恨歌中の句。

(四)月もうつらふ云々「吾が宿の本あらの小萩咲しより夜な〳〵月の影ぞうつらふ。」（新古今集）。

(五)波も色ある云々「春深み井出の川波たち返り見てこそ行かめ山吹の花」（拾遺集）。

(六)われ落ちにきと云々「名にめでゝ折れるばかりぞ女郎花」の下句。

(七)安濃浦云々は度重なる意の譬。

(八)二間とは柱と柱の間が二つある意。

(九)練貫とは生絲を經、練絲を緯として織つた絹布。

(一〇)巫女廟云々「巫女廟花紅似レ粉。昭君村柳翠二於眉一」（朗詠集）。

(一一)半蔀は上下へ上げ下しする戸。

卷第二十二

畑六郎左衛門が事

さうかうして中に、京都から討手の大軍が攻め下つたので、杣山の城も落され、越前、加賀、能登、越中、若狭五箇國の間には宮方の城は一つもなくなつて、唯だ一つ畑六郎左衛門時能が僅かに二十七人で籠つてゐる鷹巣城だけが殘つてゐた。

去年杣山城を出た一井兵部少輔氏政が此城に入つたので、時能の勇力と、氏政の機智とがあつては、たとへ小勢だとて棄て置くわけに行かないと、足利尾張守高經、高上野介師重を兩大將として北陸道七箇國の軍勢七千餘騎を率ゐ、鷹巣城の四方を千重百重に攻め圍ましめた。畑六郎左衛門は勇力のある武藏國の住人で、其下には甥の快舜といふ惡僧があり、仲間に惡八郎といふ

缺脣の大力者があつた。又犬獅子といふ不思議な犬がゐて、敵の構へた向城に忍入つて、其樣子を探つて主人に仔細を知らせた。三人は此犬を案内として縱横に切り廻つたので、三十餘箇所の向城にゐる敵は、密かに酒肴を送つて我城を夜討しないやうにと畑に賴まない者はなかつた。

寄手の中に元新田左中將の侍であつた上木平九郎家光といふ者がゐた。家光は畑と内通してゐるやうに思はれたのを口惜しく思ひ、二月二十七日の早朝に一族を連れて討つて出た。寄手は是を見て、必ず落ちる事情があるに違ひないと、向城三十餘箇所の兵七千人が取るものも取り敢へず、岩を傳ひ、木の根に縋りついて嶮しい鷹巣城の坂十八町を一氣に攻め上つた。城では靜まり返つてゐたが敵が鹿垣近くに來た時、太刀長刀の鋒を揃へて、聲々に名乘り喚いて切つて出た。城中に人なしと油斷してゐた敵は大いに驚き、助を求めて一所に寄り集つた處へ、例の惡八郎が八九尺許りの大木を脇に挾み、五六十人がゝりでも押し難い大磐石を易々と轉したので、寄手は恐れをなして退いた。

寄手は山を阻て、川を境として、遠く退いたので、どうしようにも仕方がないが、畑の胸中には此際決戰して、天運を見ようといふ念願が湧いた。そこで城には一井兵部少輔に兵十一人を附けて殘し、重だつた者十六人を連れて、十月二十一日の夜半に伊地山に打上り、中黑の旗二旒を

立てゝ寄手遲しと待つてゐると、高經は二十二日の午前六時に三千餘騎で押寄せた。畑六郎左衛門は敵が已に一二町の處まで迫つた時に、金胴の上に緋縅の鎧の敷目に拵へたのを、草摺長に著下して、鍬形うつた五枚兜の緒を締め、熊野打の頬當に、大立揚の臑當を脇楯の下まで引籠めて、四尺三寸の太刀に三尺六寸の長刀を莖短かに握り、鹽津黑といふ五尺三寸ある馬に打ち跨り、劣らぬ兵十六人を前後左右に隨へて、「畑將軍此處にあり、尾張守は何處に坐すぞ」と呼はつて大勢の中へ駈け入つた。追ひ廻し、懸け亂し、四方八方に暴れ廻つたので、敵の萬卒は忽ちに散り散りになつて、皆馬の足を立てかねた。尾張守高經、鹿草兵庫助は旗の下に控へて、「何たる意氣地なしだ。敵が縱令鬼神であつても、あれ程の小勢に會つて退却する事があるものか。唯だ馬の足を立寄せて魚鱗に控へ、兵を虎韜にして取籠めよ。一人も殘さず打留めよ。」と嚴しく命令した。三千餘騎の兵は大將の此言に力を得て、十六騎の敵を中に取籠めて揉み合つた。畑が乘つた馬は頂羽の騅にも劣らぬ駿足なので、鐙の鼻にあてられて轉び落ちる者の首を取つては馳せ通り、引返しては颯と破る。從兵もまた似たり寄つたりの勇ましさ。尾張守の兵は到底之に抗し難く見えたので、東西南北に散亂して河向ふに引退いた。

畑は陣に歸つて兵を集めると、五騎は討たれ、九人は重傷を負うてゐた。特に賴みとした快舜

も、七所に重傷を受けて其日の暮に死んでしまつた。畑もまた脛當のはづれ、小手のあまり、切られぬ所とてはなかつた。少々の小疵は氣にも懸けなかつたが、障子の板の外れから流れて來た白羽の矢一筋に肩先を射られ、漸く拔きに拔いたけれども、鏃だけはどうしても拔けず、三日の間苦痛に身を責められて終に喚きつゝ死んだ。此畑は僧法師を殺し、佛閣神社を燒き壞し、惡逆無道であつたので、遂に天罰を蒙つたのであらう、流矢に中つて死んだのは憐れである。

義助吉野へ參らるる事 並 隆資物語りの事

脇屋義助は去る九月十八日、美濃の根尾城に立籠つたが、土岐賴遠、刑部賴康に攻め落された ので、郎黨七十三人を連れて、祕かに吉野へ潛入し、義助が參內すると、新帝は玉顏殊に麗はしく、御席を進められて、こゝ五六年間の北征の忠功が、他に擢んでゝゐる事をのみ仰せられ、敗北については一言も仰せ出されなかつた。

「卿が無事で、此處に來た事は、君臣の間を水魚にする忠德が再び顯はれる兆である。」と仰せられて、御涙をさへ浮べさせられたが、次の日に臨時の宣下があつて、義助に一級を加へられた。否、義助のみではなく、一族隨兵に至るまで皆恩賞を賜はつた。

其頃、殿上に伺候した諸卿が色々話し合はれた際、洞院右大將實世が嘲つていはれるには、

「一體義助には何の勳功がある。彼れは越前の合戰に負けて美濃國に落ち、其國をさへ追ひ落されて身の置き處がなく、やつと吉野へ歸つて參つたのに、恩賞に預かつて官祿を進められた事は、誠に不審の至りである。これは昔平維盛が東國の討手に下り、水鳥の羽音に驚いて逃げ上つたのを、清盛入道の計ひで一級を進められたのと同じ事だ。」

と打笑はれた。四條中納言隆資卿は、默つて其話を聞いてゐられたが、殿上を退いてからいはれるには、

「此度の事は、陛下の御思召が當然と存じられる。其譯は、義助が北國の合戰に負けたのは、彼れが戰ひに拙かつた爲めではなく、主上の御運が未だ到らなかつた爲めである。又敕裁の將たる彼れの威光を輕んぜられた事も敗戰の一因である。此間他國の有樣を傳へ承るに、大將の擧狀を帶びてゐないのに、士卒が直訴すれば直ぐ敕裁を下され、僅かに吉野へ伺候すれば、それだけで軍用を支へられる。北國の所領を望む者があれば、碌に調べもしないで聖斷を下される。之が爲めに大將の威光は輕く、士卒が心を悉にしたので、義助は百戰の利を失つたのである。これは全く戰の罪ではなく、唯だ上の御命令の手違ひの爲めである。我君には忝くも此由を知し召されてゐるから、今回其賞を重くせられたのである。どうして昔の維盛などと同じからうか。」

といはれたので、さしもの大才實世卿も、一言もなく退出せられた。

佐々木信胤宮方になる事

かうした處へ伊豫國から使が來て、相當の大將を一人急ぎ遣はされたならば忠勤を抽んでたいと奏聞したので、脇屋刑部卿義助朝臣を下される事に決した。然し下向の道は陸も海も皆敵地である、どうして下さうかと僉議の最中、備後國の住人佐々木飽浦三郎左衛門尉信胤が早馬で駈けつけ、「去月二十三日、小豆島に渡つて義兵を擧げた處、國中の勤王の士が馳せ加はつたので、逆徒を少々打ち從へて京都への船路を差塞ぎました。急ぎ近日中に大將を下向させて頂き度い。」と申したので、諸卿は悅んで、大將進發の道が開けたのは、天運が既に機を得たものであるといひ合つた。

一體、此信胤は、建武の亂に、細川定禪に身方して備前、備中の兩國を平げ、將軍の爲めに勳功のある者であるが、それが何故俄に宮方になつたかと云ふと、此頃天下に禍ひなす例の傾城故だとの事である。

其頃菊亭殿にお妻といつて、容貌優れ、上品で、しかも阿娜つぽいところのある女房があつた。元來が浮氣の性質で、此人と定めた者も無く、慕ひ寄る多くの男の中、誰れに身を任さうかと自分で決しかねてゐた。抑〻容易に人の近づけない宮中であるのに、どんな便を得たものか、今の世に肩を並べる者もない高土佐守に通ひ馴れて、人知れず思ひ結ぼれた下紐の堰き止め難い中となつた。初めの間は人目を忍んでゐたが、後には餘りに度々我家に下つて、宮仕へが段々疎かになつた來た。

高土佐守には元相馴れて子供を澤山儲けた鎌倉の女房があつた。土佐守が伊勢國の守護になつて下向する時、此女房とお妻との二人を連れてゆかうと思ひ、元の妻を先づ下した。お妻は今日明日と云つて容易に立たず、うるささうな樣子をさへ見せたので、土佐守は一層思ひが增して、どうしても連れて行くと、三日間下向を延期して色々と云ひ恨んだので、それではといつて夜中に輿さし寄せ、几帳さし隱して扶け乘せられた。土佐守はあまりの嬉しさに、道中少しも休まず、驛て伊勢路に赴いた。

まだ夜を籠めて逢坂の關の岩角を踏み鳴らし、夕告鳥に送られて、水の邊の粟津野の、霧を分けて行くと琵琶の湖に出る、其湖の流れの末が河となり、それに架つた勢多の橋を渡ると、田

上河の朝風に、比良の峯下しが吹き來つて、さつと輿の簾を吹き揚げた。出絹の中を見ると、年の頃八十ばかりの古尼の、額は皺だらけで、口には齒の一本もないのが、腰を二重に屈めて乘つてゐた。土佐守は驚いて、

「これはきつと古狸か古狐かゞ化けたのであらう。鼻を燻べよ。蟇目で射て見よ」

と云つたので、尼は泣く泣く

「いえ〳〵、私は化物ではございません。菊亭殿へ年來參つてゐる者ですが、お妻の局から、こんなに都で住みわびてゐるよりは、自分の下る田舍へ往つて暫く心を慰めてはどうかといはれ、嬉しい事に思つて昨日御局へ參りますと、妻戸に寄せられた輿に乘れと仰せられたので、何心なくそれに乘つたのでございます。」

と云つたが、土佐守は承引せず、尼を勢多の橋詰に打捨てゝ、空輿を舁ぎ返して京へ引返した。

土佐守は菊亭殿に推寄せ、四方の門を閉ぢてお妻の局を搜したが、どんなに搜しても見つからないので、女の童を捕へて責め問ふと、

「其御方はお通ひになる處が多いから、何處へ行かれたか確と分りませんが、近頃は飽浦三郎左衞門とか云ふ人に心を寄せ、人目も憚らぬ仲だと聞いて居ります。」

と語つたので、土佐守は烈火の如く怒り、軈て飽浦の宿所へ推寄せて、一討ちに討たうといふ計畫を立てた。飽浦はそれを聞いて、とても遁れぬ運命だと、掌を飜して宮方に付いたのであつた。

義助豫州へ下向の事

脇屋刑部卿義助は、曆應三年四月一日、勅命を受けて、四國西國の大將として伊豫國に下向されるとの事であつた。

吉野へ馳せ集つた兵は五百騎にも足りなかつたが、四國中國には心を通ずる官軍があるから、一日も早く行かうと、未明に吉野を立つて紀伊路にかゝられた。このやうな次手でなければ參詣の志は遂げられないと、高野山に詣でゝ二三日逗留せられた。

院々谷々を拜み廻るに、聞いたよりもなほ貴く思はれる。八葉の峯が空に聳え、千佛の座が雲に横はつてゐる。御影堂からは香煙が窓を漏れ、心細い鈴の聲が霧に籠つてもの寂しい。昔瀧口入道が住んでゐたといふ庵室の跡を尋ねると、古い板間に苔が生えて、家が荒れても月は漏らない。また昔西行法師が結んで置いた柴の庵の名殘りだといふのに立寄ると、掃かない庭に花が散

つて、蹈んでも痕のつかない朝の雪の美くしさ。暫くでもかうした靈地に留つて、憂き身の汚れを濯ぎたく思はれたけれども、軍の旅に赴かれることゝてそれも協はず、高野を紀伊路に出で、千里の濱から田邊の宿に著いて、渡海の船を調へしめられた。熊野人が兵船三百艘を調へて淡路へ送ると、宮方の安間、志宇知、小笠原の一族が、それを備前の兒島へ送る。此處には佐々木信胤、梶原三郎が居て、多數の大船を艤裝して、四月二十三日に伊豫國今張浦へ送り著けた。

大將が下向されたので、宮方は彌勢ひを得た。當國には武家方の城が十餘箇所あつたけれど、戰はぬ先に落ちてしまつたので、今は四國一圓悉く宮方となり、末頼母しく思はれた。

義助朝臣病死の事附鞆軍の事

かうした狀態が持續されたが、同じ年の五月四日に、國府に居られた脇屋義助が俄に病氣になつて、わづか七日で歿せられた。相從ふ官軍共は、秦の始皇帝が沙丘に崩じて、漢楚が機に乘ずるのを悲しみ、孔明が籌筆驛に死んで、吳魏が便を得るのを愁へたのと同じ心持で、行末の事が俄かに心細く思はれた。

此訃報が外に傳はつたならば、敵に機先を制せられるだらうと、極めて隱密に葬禮を執り行つ

たけれども、武家方の細川刑部大輔頼春が此事を聞いて、伊豫、讃岐、阿波、淡路の兵七千餘騎を以て、河江城の土肥三郎左衞門を攻めた。義助に從つた多年恩顧の兵共は、宮方土肥の應援として、金谷修理大夫經氏を大將とし、兵船五百餘艘を連ねて海上に浮んだ。かくと聞いて備後の鞆、尾道に船艤してゐた備後、安藝、周防、長門の武家方は、大船千餘艘で押し出た。

兩軍の兵は海中に帆を突き入れ、鉦を叩いて鬨の聲を上げる。潮の流るゝまゝ、風の吹くまゝに押合ひ押合ひして相戰ふ。其中に、大館左馬助氏明の執事、岡部出羽守が乘つてゐる船十七艘は、備後の宮下野守兼信が左右に分けて漕ぎ竝んでゐる船四十餘艘の中に分け入り、敵の船に乘り移り乘り移りして、皆引組んで海中へ飛び入つた。備後、安藝、周防の船は皆大船であるから、艫舳で櫓を大きく搔いて、船を押し進めて散々に射る。伊豫、土佐の船は皆小船であるから、逆櫓を立てゝ進退を自由にし、縱横に相當る。兩軍の兵は、よし死んで海底の魚腹に葬られるとも、逃げて天下の笑ひものにはなるまいと、一引きも引かずに終日戰ひ暮したが、海上俄に風吹いて、宮方の船は悉く西方に吹きやられ、寄手の船は悉く伊豫へ吹き流された。

宮方の兵は元へ引返さうとしたが、大將金谷修理大夫は、「憑みとした大將軍脇屋義助が歿せられたからには、微運の我等には何事も出來ない。命限りの戰ひを致さう。」と、其夜半に鞆へ押寄

せた。無勢の城を忽ちに落して意氣あがり、三千餘騎で押寄せた備後、備中、安藝、周防四箇國の武家方と相戰ふ。互ひに戰ひ屈して十餘日を經たが、細川頼春が大館左馬助の籠る世田城を攻めると聞いて、土居、得能以下の者は「同じく死ぬならば自分の國に屍を曝さう。」と伊豫國へ引返した。細川の軍が大勢だと聞いて、大將頼春と組んで刺し違へようと、集まつた二千餘騎の中から、金谷修理大夫經氏を大將とする三百騎を選り、皆一樣に曼荼羅を書いて幌に懸け、生きて歸らぬ覺悟の軍に出て行つた。優にやさしく哀れな心懸けだと、之を聞いた者は皆鎧の袖を濡らした。さうかうしてゐる中に、細川刑部大輔は七千餘騎を率ゐて千原町に打つて出た。敵陣を見渡すと、ひろびろとした野原に中黑の旗一旒が風に靡いて、其下に僅か三百餘騎程の勢が控へてゐる。刑部はそれを見て、「屹度勇者を選んで、頼春に組んで、勝負をしようとするのであらう。決心した小勢を一息に討たうとすれば討てない事がある。疲れさせて討てよ。」と旗の前に現はれて閑々と進んだ。金谷修理大夫は是を見て、「やあ敵が襲ひかゝつて來るらしい。」と見計ひもせず、總攻めにむずと攻めて、矢を射違へられる距離まで來た。そこで弓矢を投げ棄て、太刀刀を取つて、叫き喚びつゝ眞黑になつて進んだ。

細川刑部の馬の廻りには、藤の一族が五百餘騎で控へてゐたが、豫ての謀であるから左右へ颯

と分れて控へた。此中に大將が居るとも知らず、それには目も懸けずに裏へ拔け、二陣の敵に懸る。敵は南の山の峯へ颯と引いて上つたので、大した敵でもなかつたと、三陣の敵に打つて懸る。此中には大將がゐるであらうと、中をかけ破つて、引き返し、引組んでは刺し違へ、落ち重なつては首を取る。一歩も引かず戰つたので、宮方は忽ち討死して僅か十七騎になつた。大將金谷經氏以下生き殘つた十七騎は、一騎當千の兵で敵に當ること十餘箇度、陣を破ること六箇度に及んだが、負傷もせず、疲れた樣子もなかつた。敵の大將をどんな者とも知らないので、大した事もない兵に逢つて討死するよりはと、一所に馬を寄せ、馬を引返して、七十餘騎の眞只中をかけ破つて、備後をさして引いて行つたのは、實に勇ましい光景である。

大館左馬助討死の事附篠塚勇力の事

大將細川頼春は此合戰が終つて後、更に大館左馬助が籠る世田城を攻めようと、八月二十四日早朝に一萬餘騎を七手に分けて陣取り、夜晝となく三十日まで攻め立てた。

城の中では主軍とも憑んだ岡部出羽守の一族四十餘人が日比澳で自害した。其外の勇士は千町原の戰ひで討死したので、力盡きて防ぐ方法もなかつた。九月三日の曉に大館左馬助主從十七騎

は一の木戸口に出て、塀に著いてゐた敵兵五百餘人を麓へ追ひ下し、一度に腹を切つて枕を並べて死んだ。

防矢を射てゐた兵も是を見て、敵と引組んで刺し違へて死ぬ者もあり、又役所に火をかけて火中に飛び込み、死ぬ者もあつたが、篠塚伊賀守一人は、大手の一二の木戸を悉く開けて立つた。降人になるのかと思ふとさうではなく、紺絲の鎧に、鍬形打つた兜の緒を締め、四尺三寸ある太刀に、八尺あまりの金棒を脇に挾み、大音揚げて、

「外では定めて名を聞いたであらう、今近づいて我を知れ。畠山莊司次郎重忠の六代の孫、武藏國に育つて、新田殿に一騎當千と憑まれた篠塚伊賀守爰にあり、討つて勳功に預れ。」

と呼ばはつて、百騎許りの敵中へ眞直ぐに走り入ると、敵兵は東西に引き退き、道を開いて通した。

「それ討取れ。」と二百餘騎が後を追ひかける。篠塚は小歌を口誦みながら悠々と落ちて行く。敵が「逃すな。」と追ひかけると、篠塚は立止つて、

「あゝ御邊達、あまり近寄つて蹟と仲違ひすな。」

とあざ笑つて、例の金棒を打ち振ると、蜘蛛の子を散らすやうに一旦は逃げ、やがてまた集まつ

て、後から鏃を揃へて射る。

「某の鎧には御邊達のへろへろ矢は立つまい、さあ此處を射よ。」

と後を向いて立ち止る。

何しろ名譽の者であるから、誰れか一人擊ち止める者があるかも知れないと、追つかける二百餘騎の敵に六里の道を送られて、其夜半頃に今張浦に著いた。

これから隱岐島へ落ちよう、船があるかと見ると、敵が乘り棄てゝ船頭ばかり殘つてゐる船が澤山ある。これこそ我が物と、鎧を著ながら浪の上を五町ばかり游ぎ、そこにある船にがばと飛び乘つた。船頭梶取は驚いて、「一體何者だ。」と咎めると、

「さう云ふな。自分は宮方の落人、篠塚と云ふ者だ。急いで此船を出して隱岐島へ送つてくれ。」

と云つて、二十人餘りで繰り立てた碇を易々と引上げ、十四五尋ある檣を輕々と推立てゝ、屋形の内に入り、鼾をかきつゝ高枕で寢た。船頭梶取共は、恐れて「あゝ、大したものだ。尋常の爲業でない。」と直ぐ順風に帆を揚げて隱岐島に向つた。昔も今も勇士は多いが、こんなのは曾て聞いた事がないと、譽めない者は一人もなかつた。

註

(一)敷目とは袖草摺に、筋違ひに色を替へて縅した物。

(二)熊野打は熊野で造つたものだらうといふ。

(三)大立揚は全部鐵製。

(四)魚鱗は布陣の一型式。相連なつて造る陣。

(五)出絹は出衣の意。女房用の車の簾の下から、女房の衣の裾を出して乘ること。

(六)曼荼羅は梵語。聚集と譯する。壇上に諸尊諸德を聚集して一大法門を成す。

(七)幌は背に負うて矢を防ぐもの。

卷第二十三

大森彦七が事

曆應三年春の頃、伊豫國から不思議な報告が來た。伊豫國の住人大森彦七盛長は、建武三年五月、湊川で楠正成に腹を切らせた勇士で、戰後數箇國の恩賞に預つた。一族の者が悦びと誇りとに猿樂の能を催すといふので、彦七も下人に裝束を持たせて樂屋へ向つた。山の傍の細道を眞直ぐに通つて行くと、年の頃十七八の女が、赤い袴に柳裏の五衣を著て、折からさし出た月に照されてたゞ一人佇んでゐる。さて其女が彦七に向つて、「案内してくれる者がございません。道を誰れに尋ねませう。」と言つて、打萎れてゐるのを見ると、どんな荒武者でも心を懸けずにはゐられない。彦七は、其美しい姿に牽きつけられて、「こちらが道です、御棧敷がなかつたら、ちやうど

用意の棧敷があります、それへ御入り下さい。」と心ならずも云ふと、女はにつこり笑つて後について歩んで來る。羅綺にも堪へぬ姿のしほらしさは、一足も土を踏んだことのない人のやうに見えたので、彦七は見かねて、「餘り露が深うございますから、あれまで負うて行つて上げませう。」と前に跪くと、女は少しも遠慮せず、「御迷惑ではございませんか。」といつて、彦七の背によりかかつた。「白玉か何ぞ」と問うた古の伊勢物語の話もかうであつたかと思ひながら、嵐につれて散る花が袖に懸るよりも輕さうに、艶人を背負ひつゝ彦七の蹈む足元はたど〳〵しく心も浮かれつつ半町ばかり來ると、山陰の月が少し暗い處で、其女房は俄に丈八尺ばかりの鬼となり、二つの眼は朱を溶いて鏡の面に洒いだ如く輝き、上下の齒を喰ひ違はせ、口は耳の根元まで割け、眉は漆で何度も塗つたやうに額を隱し、振分髪の中から五寸ばかりの犢の角が鱗をつけて生ひ出てゐる。其重さは大石で上から押されるやうである。彦七が驚いて打棄てようとすると、化物は熊のやうな手で髪を掴み、空に上らうとする。むずと組んで深田の中へ轉び落ち、「盛長化物を組みとめた。寄れよ者共。」と呼ばゝつた。人々が走り寄つた時には、しかし化物はもう搔き消すやうに消え失せてゐた。

其夜の猿樂は中止になつたけれども、又吉日を選んで堂の前に舞臺を作り、猿樂が進行して半

ば頃になると、遙かの海上に裝束の唐笠ほどの光物が二三百現はれた。海人の漁火かと見てゐると、それは一群の黒雲の中に玉の輿を舁き連ね、恐ろしい鬼形の者が其前後左右に並んでゐる。黒雲の中に電光が時々閃めいて、舞臺の上に覆ひかぶさつてゐる森の梢に止まつた。人々が驚き騒いでゐると、雲の中から大聲で、「大森殿に申すべき事があつて、楠正成が參つた。」といふ。彦七は物に恐れぬ男であるので、「楠殿は何用あつて、今此處で盛長を呼ばれるのだ。」と問ふと、楠は、

「正成が存命の間、樣々に謀を廻らして相模入道一家を傾け、先帝の御心を安んじ奉らうとしたのに、尊氏卿、直義朝臣が惡心を挾んで遂に天下を傾け奉つた。之が爲めに忠臣義士は多く屍を戰場に曝したが、彼等は皆鬼神となつて憤恚の心が止む時もない。正成は彼等と共に天下を覆さうとしてゐるが、それが爲めには貪瞋痴の三毒を表す三つの劍が要る。その一つが御邊の腰に佩んでゐる刀である。此刀さへ我等の物となるならば、尊氏の世を奪ふことは容易である。急いで差出されよ。先帝の敕諚によつて、正成は罷り向つたのだ。早く頂かう。」

と云ひも終らぬ中に、雷が東西に鳴り渡り、今にも落ちるかと思はれた。盛長は刀の柄を碎けるばかりにしつかと握り、「縱令身をずた〳〵に割かれ、骨を微塵に碎かれようとも、此刀を參らせ

ることは出來ない。早く歸られよ。」と、空を睨んでつゝ立つたので、正成は非常に怒つて、「何とでも言へ。遂には取らう。」と、海上遙かに逃げ去つた。

かうした次第で、此夜の猿樂も二三番で取止めになつた。其後四五日經つて、雨が一通り降り過ぎて、風が凄じく吹き騷ぎ、電光が時々閃めくので、盛長は、「今夜は屹度化物が來るに相違ない。遮つて待たう。」と中間に布皮を敷いて、鎧を着し、二所籐の大弓に、尖り矢を多く拔き散らし、鼻膏を引いて、化物遲しと待つてゐた。案の如く夜中過ぎる頃、澄んでゐた月が俄にかき曇り、一群の黒雲が立ち覆うた。雲の中から聲がして、「なんと大森殿は其處に御出でか。先に仰せ付けられた劍を急ぎ參らせられよ。天皇の仰せによつて、敕使として正成が又參つた。」と云ふので、盛長は、「不審の事をお尋ねする。御邊は六道四生のどんな處に生れてゐられるか。」と聞くと、正成は庭前の柳の梢近く下りて來て、「我も最後の惡念に引かれて罪が深かつたので、今は千頭王鬼となつて七頭の牛に乘つてゐる。御不審であつたら其有樣を見せよう。」と松明を十四五同時にはつと振り擧げた。其光について大空を遙かに見上げると、群立つた雲の中に十二人の鬼共が玉の輿を舁いでゐる。楠正成は湊川で合戰した時と少しも違はないで、紺地の鎧直垂に黒絲の鎧を著け、頭の七つある牛に乘つて遙かに引下つた所にゐる。

此有様は只だ盛長の幻だけに見えて、他人の目には入らなかつたので、盛長が左右の者を顧みて、「あれが見えぬか。」と云はうとすると、風に漂ふ雲のやうに姿は忽ち消え失せて、唯だ楠の聲許りが殘つた。盛長はこれ程の不思議を見ても心動ぜず、

「縱令如何なる第六天の魔王共が來て云ふとも、此刀は差上げられない、早く歸られよ。此刀は將軍へ差上げるのだ。」

と云ひ捨てゝ、盛長は内へ入つた。と、正成は大いに嘲笑ひ、

「此國が陸續きであつても、道を易々とは通さない。まして海上を通るからには決して通さない。」

とどつと笑つて、西の方を指して飛び去つた。それから盛長は氣が狂つて、山を走つたり、河を潜つたりして、亂行が一日も止まず、常に太刀を拔いたり、矢を放つたりするので、一族の者が集まつて盛長を一間に押籠め、武器を持つた者が警戒をしてゐた。

或夜又雨風が一しきり通つて、電光が頻りに閃めくので、それ又楠が來たと怪しんでゐると、案の定盛長の寢た枕邊の障子を蹈み破つて、數十人の討ち入る音がした。あわてゝ起き上つた警固の者は太刀長刀の鞘を拂つて、敵はどこだと見廻しても誰れもゐない。どうした事かと訝つてゐると、天井から毛の生へた、熊の手のやうな長い手を差し下し、盛長の髻を掴んで宙に引提げ、破風口から出ようとする。盛長は宙に提げられながら、例の刀を拔いて化物の眞唯中を三刀刺した。刺されて弱つたところをむづと引組んで、廣廂の軒の上に轉び落ちた。捉へて押しつけ、七刀まで刺すと、化物は急所を刺されたものか、空をさして騰つていつた。

其次の夜も月が曇り、風が荒れて、どうやら怪しい樣子なので、警戒の者が大勢遠侍に集まつて、終夜睡らないやうにと碁雙六を打つて遊んでゐた。夜中過ぎに、百人餘りの警固の者が同時にあつと云つたと思ふと、皆酒に醉うたやうに頭を垂れて睡つてしまつた。

只だ一人眠らないで座中にあつた禪僧が、燈火の影から見ると、一匹の大きな山蜘蛛が天井から下りて來て、寢入つた人々の上を這ひ廻り、又天井へ騰つていつた。暫くすると、盛長が俄に驚いて、「よし」と云ひさま、人と組んだ樣子で、上になり下になり、揉み合ひ返し合つてゐる。叶はなくなつたものか、「寄れや、者共。」と叫んだので、傍に臥してゐた者共は起き上らうとしたが、或者は髻を柱に結びつけられ、或者は我が足に人の手を結ひつけられてゐる。其中に盛長が「化物を取つて押へたぞ、早く燈を持つて來い。」と呼ばゝつたので、警固の者は漸く起き上り、蠟燭を炷して見ると、自分が押へられてゐる盛長の膝を持ち擧げようともがいてゐる者がある。

大勢が逃がすまいとして壓へると、大きな土器の割れる音がして、眉間から二つに碎けた曝首が其後に殘つてゐた。盛長は吐息をついて、腰を探つて見ると、刀を化物に取られて、鞘ばかりが殘つてゐたので、「俺はもはや疫鬼に魂を奪はれた。俺の命は物の數でもないが、將軍の御運が心配だ。」と、顏色を變へ、涙を流して、わなわなと慄へた。

やがて夜が更けて、有明の月が中門に差入つた頃、簾を高く捲き上げて庭を眺めてゐると、空から毬のやうな光りのものが叢の中へ落ちた。走り出て見ると、盛長に押し碎かれた首の殘りの半分に、例の刀が柄口までつき貫かれて落ちてゐた。盛長は、「もう來ないだらう。」と云つてゐると、庭の蹴鞠場に、眉太に作り、鐵漿を黑々と塗つた、大きさ四五尺もあらうと思はれる女の首があつて、亂れ髪を振り擧げて、目もあざやかに打笑ひ、「はづかしや。」といつて後向きになつた。それを見た人々はあつと驚き、驚くと同時に皆倒れ伏した。

毎夜、夜番を置いて蟇目の矢を射させ、陰陽師に符を書かせて門を封じたが、目にも見えない者が來て、其符を取つて棄てる。皆思ひ煩つてゐる處へ、彦七の緣者の禪僧が來て、「今現はれる惡靈共は皆修羅の一族である。大般若經を讀んだがよい。」と云つたので、僧共を招待して眞讀の大般若を日夜六度まで讀んだ。五月三日の暮に、導師の僧が高座の上で鉦を打鳴らすと、一天俄に

搖き曇り、車馬の音が聞え、鎧戟の光が輝いたが、やがて鬪ひの聲も止み、天も晴れて、盛長の狂氣は回復した。それ以後正成の亡靈は來なくなつた。天竺の班足王は仁王經の功德で千王を害する事を止め、我朝の楠正成は大般若講讀の功德で、貪欲、愼恚、愚癡の三毒を免れることが出來た。其後、彦七は此刀を天下の靈劍として、左兵衛督直義朝臣に差上げたといふ。

直義病惱に就いて上皇御願書の事

さうかうしてゐる中、諸國の宮方が段々衰へて、天下は遂に武家の手に歸し、帝都は表面靜まつたやうであるけれども、武家は佛神三寶をも敬はず、三公五攝家の所領をも渡さず、政道が正に水火の苦しみに墮ちたので、行末はどうなるだらうと、世間ではとかく噂し合つた。吉野の先帝崩御の後、種々の風聞があつたが、車輪のやうな光物が夜々都を指して飛び渡り、色々の惡相を現したので、不思議だと思ふ間もなく、惡病が家々に滿ちて、貴賤共に苦しむ事一通りでなかつた。これは大變だと警戒してゐる中、二月五日の暮頃から直義朝臣が邪氣に侵され、身心は惱亂し、五體が苦しさに堪へないので、諸寺の高僧を招いて祈禱を請うた。しかし手を盡しての療治も效果なく、今は最期と見えたので、平重盛が早世して平家の運が盡きた如く、天下の政道も

今後衰へるだらうと歎かぬ者はなかつた。持明院上皇は此由を聞かせられて殊にお嘆きになり、潛に敕使を立てられて八幡宮に樣々の御立願をなされた。

敕使が歸つて三日も經たぬ中に、直義朝臣は忽ちに平癒したので、皆神德の忝けなさに感泣した。しかし吉野の肩を持つ人々は、「徒事を申されるな。神は非禮を享けられないで、正直の頭に宿らうとせられる。僞りの祈願などは聞かれる筈がない。」と云つて嘲つたものもあつた。

土岐賴遠御幸に參り合ひ狼藉を致す事附雲客車より下るる事

同じ年の九月三日は、伏見院の御忌日なので、御佛事を故院の舊跡で執行はせられる爲めに、持明院上皇は伏見殿へ御幸になつたが、種々の御追善に短き秋の日は早や昏れてしまつた。美しい九月初三の夜の月は、出ると直ぐ雲間に影を消して、大空から落ちてくる雁の聲に、伏見の小田も物凄い頃になつたので、松明をかざして還御になられた。夜がまださほど更けない中に、御車は東の洞院を上つて、五條の邊りをお過ぎになつた。ちやうどそこへ、土岐彈正少弱賴遠、二階堂下野判官行春が、比叡の馬場で笠懸を射て、芝生での大酒に時を過し、醉ひつぶれて歸つて

來るのに、樋口東洞院の辻で出會つた。近侍のものが御前に走り散つて、「誰だ、無禮を働くのは、下りられよ。」と大聲で叫ぶと、下野判官行春は御幸だと知つて、馬から飛び下りて傍に畏つた。

土岐賴遠も初めは、御幸だとは知らなかつたが、此頃は勢を得て世を恐れず、我意の儘に振舞つてゐた事とて、騎虎の勢ひ後に引かれず、馬を据ゑて、

「此頃京中で賴遠などを下す者はあるまいと思ふのに、下りよといふはどこの馬鹿者だ。」

と大聲で呼ばゝつたので、前驅、御隨身が馳せ散つて、

「いくら田舍者でも、狼藉には限りがある。畏れ多くも院の御幸であるぞ。」

と聲々に呼ばつた。賴遠は醉ひも廻つてゐたらしいが、これを聞いてから〳〵と打笑ひ、

「何院といふか、犬といふか、犬ならば射て落さう。」

といひさま、御車を眞中に取籠めて、馬かけ寄せて追物射に射た。

竹林院中納言公重卿は列の後方にあつたが、衞府の太刀を拔いて馳せ寄り、「こんな惘れた亂暴はない。御車を早く進めよ。」と命令したけれども、牛の鞦を切られ、轅も折れ、牛童共も散り散りに逃げてしまひ、供奉の公卿達もみな打落されて、御車に當る矢をさへ防ぎまゐらす人がな

かつた。下簾はみな撥き落され、三十輻も少々折れたので、御車は遂に路上に倒れた。眞にこの上もない淺ましさだ。

上皇は唯だ夢心地でいらせられたが、竹林院中納言公重卿が御前に參られると、上皇は、「おゝ公重か。」と許り仰せられ、軈て御涙に咽ばせられた。公重卿も出る涙を押へて、

「此頃の都の有樣は、全く滅茶々々でございます。蠻夷が分を超えて上に擬し、無禮の限りを盡して居ります。然し、日月が尙ほ天にある以上は、必ず御照覽あること疑ひがございません。」

と申上げたので、上皇は御心を稍〻慰ませられ、

「朕の聞くところに依れば、五條の天神は君の御出と聞いて、寶殿を下つて御幸の道に長まられ、宇佐八幡は敕使の度毎に威儀を正して敕答を申されるといふ。然るに武臣の分際で、此亂暴は何事ぢや。いくら末世だとて、衞護の神はましまさないのか。」

と仰せられて、袞龍の袖に玉顏を覆はれたので、公重卿も涙にかきくれたが、元氣を取返して牛車を少々尋ね出して、泣く泣く還御のお供をした。

其頃は直義朝臣が尊氏卿に代つて政治を執られてゐたが、此事を傳へ聞いて驚き、「外國にも曾て聞かない狼藉である。若し其罪を論ずれば、之を三族に及ぼすも尙足りない。五刑に下すもまだ適當とはいへない。直義、彼輩を召出して、車裂きにしようか、醢にしようか。」と憤り、且つ恐縮した。

賴遠と行春とは本國へ逃げ下つた。行春は罪が輕いので、死罪を許して讃岐國に流されたが、賴遠は終に六條河原で首を刎ねられた。意地汚い賴遠は夢窓國師を賴んで生命を助からうとしたけれども、其大逆は到底許されなかつた。弟の周濟房のみは斬られる處を許されて國に下つた。夢窓和尙の態度に慊らぬ者の仕業であらう、天龍寺の脇の壁に

美味しかりし齋は夢窓にくらはれて
周濟ばかり皿に殘れる

と云ふ狂歌が書かれてあつた。かうして手柄のあつた賴遠が忽ちに身を失つたので、日月はまだ地に墜ちなかつたと、直義の政道に感ぜぬものはなかつた。

全く此頃の習俗は不思議で、都人が變じて蠻人になつたとでもいはうか、院や帝の御事を勿體ないとも思はなかつたらしく、賴遠が斬られたと聞いた時、「一體院にさへ馬を下りなければならぬならば、將軍に會つたら土に匍ふだらうか。」と或田舍者が云つたといはれる。何と馬鹿々々しい、憫れた世の中だらう。